
ヤクザの学校

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤクザの学校

【Nコード】

N1075D

【作者名】

タンポポ

【あらすじ】

超問題児中学生、只野仁。彼の問題行動に悩まされた先生は、教師全員ヤクザ。生徒全員ヤンキーという、変わった学校に仁を預ける。その学校で仁は人間として大きく成長していく……予定の物語りです。

教訓その一〇返事はしようね！

季節は冬も終わりの頃、場所はここ、阿櫛 あれ 中学校にて事件は起きた。

普通ならばこの時期、中学生となれば人生を決める最初のハードルである高校受験があるはずだ。

そんな事と無縁なのが、物語の主人公、只野 仁 ただの じん 君。

校内一の問題児。中学校までは義務教育であるため、学校側もうつに手を出せなかった。

―――。

「ジン！珍しく学校に来たと思ったらこれは何だ！？授業は出ない、煙草は吸う、トイレの天井は燃やすわイジメはするわ！」

うざあ。

やっぱ学校なんて来るもんじゃねえな。

「まあいい…とにかく、明日までにその金髪を直してこい」

生徒指導で担任だからっていちいち突っ掛かってくんない。俺は好きな事を好きな時にするんだ。

「返事はどうした！」

『…うぜえ』

「世の中には返事がしたくてもできない奴がいるんだぞ！」

いるかよそんな奴。

「ふう…ジンよ。先生が前の学校ではな、水泳部の顧問をしていたんだ。その部活は部員が少ないうえに弱くてな…」

ああゝあ、またこいつの前の学校話しが始まったよ。こりゃ、当分帰れそうにねえな。

「でもな、その部長が地区の大会で三位になって、賞状をもらえる事になったんだ。全校集会で名前を呼ばれ、ステージで賞状をもらう。その事がよほど嬉しかったんだろうな。部長は部員といっしょに、部室で夜遅くまで名前を呼ばれた時の返事の練習をしていたよ」

はっ、どんだけ馬鹿な連中だよ。

「でもな、全校集会の本番で、名前を呼ばれる時になったんだが…先生方のちょっとした手違いで、名前を間違えられてしまったんだ。だから返事もできずに呆然としてたよ。そいつは後で泣きながら俺に謝ってきたよ。先生、ゴメンなさいってな」

『そんな話しされたって俺は感動なんてしねえよ。じゃあ帰るわ』

「……ジン！」

ふう、駄目だったか…このままではジンは駄目人間になってしまう。こうなったら、あの先生に頼むしかないか…」

先生が作戦を練っている事を知る由もない俺は帰路についていた。

『学校か……くだらねえよな』

学ランの裏ポケットから煙草を取り出し、ジッポで火を点ける。

最初の一口はフカすのが俺流の吸い方。

フィルターから有毒物質を一気に肺まで吸い込み、吐いた白い煙は宙に舞、上空に上がり、そして消えてゆく。

この行為を繰り返す事によって、満足感に浸る。

周りからは冷たい視線。

学生服を着た未成年者が喫煙をしているのだ、無理はない。

しかし、注意はしてこない。いや、できないのかもしれない。

すなわち、許されているのだ。酒も、煙草も、『注意をできない大人』によって、成り立つこの世の中。…腐ってやがる。

所詮、先生なんて教師だから生徒を注意しているだけ。校舎内なら暴力問題も起こせないという安全。

もし先生が教師という職に就いていないなら、どういう性格か、ど
ういう人格かも分からない人間に注意はできないだろう。

そんな器の奴に、なぜ怒られなければならない？

うんざりだ…。

気が付くと煙草の火がフィルターに届きそうだった。

もう一本吸っちまったのか…と思い煙草を捨てた。

「…ポイ捨て、駄目」

『誰、君？』

俺が捨てた煙草を拾い、押し付けてきたのは、同い年くらいの女の子だった。

小柄な体格に、大きな瞳は意思をしっかりと持ち、まるで俺に何かを訴えるかの様だった。

「ポイ捨てはダメなの」

感情がこもっていない声。同じ音程で淡々としゃべる子に少々苛立ちを覚えた。

『だから、誰？』

「ポイ捨てはダメ」

…話しが進まねえ。

『はいはい、ゴメンなさい』

「感情がこもってない」

アンタに言われたくねえよ。

…と、ツツコミたかったが、女の子に突き付けられた煙草を取ろうと手を伸ばした。

…その時

「君！その煙草は？」

不運にも、後ろから自転車で巡回していた警察が来た。

この時、煙草の吸い殻を持っていたのは女の子だったため、持ち物検査をされてしまった。

うわあ…俺知くらねえつと。

『ククク、偽善者ぶって人に注意なんかすつからこうなんだよ。じやあな！』

俺は警察を女の子に押し付け、家に帰って来た。

ベツトに横になり、天井を見上げながら煙草を吸う。

『…さつきの子に悪かったかな…』

そんな罪悪感がわずかに頭を過ぎる。

『まっ、いつか』

でも二秒で忘れた。

俺はそういう汚い人間だ。

次の日、目覚めたのは午後だが、学校へ行った。

俺を見つけた担任が、待ってましたと言わんばかりに駆け寄ってくる。

『何？また説教？』

「いいから来い！」

またしても学校に着いたばかりで生徒指導室に連れていかれた。

「…入れ」

ん？　なんか担任の様子がいつもと違う気がする。

「ジン、ゴメンな。先生の力不足だ」

…なんで先生が謝っ…

ドン！

ドアを開けられ背中を押された。

『おわっ！？』

その拍子に部屋へ。

バンツと音と共にドアは固く閉ざされた。

『何なんだよったく…ん？』

生徒指導室には先客がいた。

スキンヘッドに体格の良いオッサン。

サングラスを付けスーツを着ている。

「はじめまして、ジン君」

先客はヤクザだった。

教訓その二、人を見かけで判断するな！

「はじめまして、ジン君」

先客はヤクザだった。

恐ッ！　つか何この状況！？

『…え？……は？』

「あいさつは基本じゃろがい！！！」

『ヒイ！すいません！』

むりむりむり！

マジ恐いよこの人。

なんで学校にヤクザがいるの？

「明日から我が校に入学するんだってな」

は？　何それ？

そんなの聞いてねえよ！

「補導回数六回、内一回が煙草、原付き無免許が一回、自動二輪無免許が一回、暴走行為が三回…か。ククク、随分と派手やのお」

うわーゴメンなさい。さっきから冷や汗が止まらねえ。

警察と一対一より緊張するよ。

何この威圧感は…。

「じゃあ、早速…」

『え？あの…どちらに？』

「ちょっとここからは遠いからのつ。学校に寝泊まりしてもらう」

『はい？あの…あなたは？』

「ワシは孤羽^{こわい}以^{やくまる} 厄丸。貴様がこれから通う高校の校長だ」

嘘…絶対アンタヤクザでしようが。

「ま、昔はヤクザだったがな」

やっぱりいゝ！

「貴様が手の付けられない生徒だと報告があつてな。ま、今までの行為を反省するんだな」

先生…ゴメンなさい。

もう真面目になります。

だから勘弁してください。

「貴様に似たような奴ばかり集まった学校じゃ。すぐ溶け込める」

うわ、ヤンキーだらけ？

…待てよ？

実はそういう人間のクズばかり集めて俺らをヤクザにするってオチか？

行きたくねえ…。

結局、俺は厄丸校長に連れられ、校舎に止まっていた黒のベンツに乗り込んだ。

厄丸校長と俺は後ろの席へ。

運転席には活きのいいヤンキー兄さんが乗っていた。

こいつも恐ッ！

アイパーでソリコミばっちりじゃん！

「担任のヤスだ。宜しく」

…まるで獲物を狩る目ですね。

『は…はい』

「ククク、返事できるようになったじゃねえか」

はい、そりやもう。

「ま、このヤスって奴も、昔は返事できなかったからな」

「組長」昔の話は勘弁してくださいよ」

組長！？ やつぱり現ヤクザだあゝ！

「組に入りたてのヤスが返事できないだけで殺されかけてたからな」

ガハハと笑う組長…いや、校長。

返事できないだけで殺されかけた？

ダメだ。帰りてえ。

ここ5分くらいで俺だいぶ疲れたよ。

「よろしくね」

そして助手席からは、感情のこもっていない音程を一定を保ち、素っ気ないあいさつをする女の子……

『…………あ！！』

マジか？ 昨日の女の子じゃん。

「ん？ユキを知ってるのか？」

ユキ？ ユキって言うんだ、この子。

『え…つと』

「組長の娘さんだからな、手え出したら分かつとるよなあ」

「ヤス、大丈夫じゃ。なあ、ジン？」

むむむ娘様ですか？

『はははい！もちろんです』

「ついでにユキのボディーガードになつてもらおうかのぉ」

「こんな奴にユキさんが守れますかねえ？」

「いやよぉ…昨日ユキが高校生に煙草のポイ捨てを注意したら、現場に警察が来て、ユキが煙草を吸ったって誤解されたみてえなんだよ」

「マジっすか？」

「んで、当の本人はユキに責任押し付けて逃げたとか」

「マジそいつ見付けだして半殺し…いや、全殺しにして埋めましょ
うや！」

うん、冷や汗が止まらないや」

バレませんようにバレませんようにバレませんようにバレませんよ
うにバレませんように…

「ユキさん！どうゆう奴でした？」

「言いませんように言いませんように言いませんように言いませんように……」

「……………忘れた」

セーーーーーフ!!!!

首の皮一枚繋がったあ！

マジ恐いいゝ。

膝に力が入らねえよお。

「思い出したらいつでも言って下さいね。じゃ、行きますよ」

そしてヤスさんの運転の元、その《ヤクザの学校》に着いた。

先生全員ヤクザ。

生徒全員ヤンキー。

だが、生徒は容姿は恐いが、内面は真面目だった。

授業も真面目に受け、掃除も綺麗に熟している。

「よ、不幸な転入生くん」

まだ戸惑う俺に話し掛けてきてくれたのは、ドカンに短ランでリーゼントの男だった。

「姓は斎藤^{さいとう}、名は一葵^{かずき}。人読んでサイトウイツパツと名乗っております。どうぞヨロシク！」

……変な奴きた。

たしかに一葵って一発って読みそうになるよな。

『い…一発でいいのか？』

「ああ、気に入ってるしな。それよりお前…ジンだっけ？何やったんだ？」

『何って…別に何も…』

「してねえわけねえだろ？ここに居る奴らは全員、過去に何かやった人間さ」

グサツと、今までの悪事が身に染みた。

俺は一発に全てを話すと、やっぱりかぁと笑っていた。

この学校のルールも聞いた。

一、サボり厳禁。

二、改心するまで卒業は認めない。

三、年齢は問わない。クラス分けは年二回。

四、外出時は許可を得る事。

この学校の生徒は全国から集められただけあって、全生徒が寮に入られる。

よって24時間体制で見張られているわけであり、自由がないのだ。

…問題は三だ。クラスはA、B、C…と分かれていて、Aクラスになれば、卒業試験を受ける権利が与えられる。

三つのクラスは、さらにA-1、A-2…など、四つに分けられる。俺はC-4だ。

夏休みや冬休みなどの長期休みは一切なし。夏、冬の年二回、クラス替えが行われるが、毎回毎回、クラス昇格の為にやる事は内密らしい。

早ければ二年間で卒業する事ができる訳だが、年齢は関係ないので、改心の子がなければ永遠に留年というわけである。

『なる…ほどね』

「後な、校内恋愛…すなわち、スクール・ラブは公認されている。……が、ここの女共は普通じゃない。気を付けな」

意味深な言葉を残して、一葵…もとい、いっぱつ君は去っていった。
普通じゃない…って、見た目は皆普通だし、可愛い子だって多いじゃないか。

女の子のヤンキーなんて、パーマでロングスカートのイメージがあったが、いやはや…ミニスカに今時のメイクなど、普通なJKじゃないですか。

年齢制限はないと言っても、たいして歳の差は離れてないみたいだ。

「やつほ！転校生くん！」

背中を叩いて挨拶してきたのは…赤みが掛ったショートのに、クリクリした瞳の幼い顔立ちの子だった。

うーん…まだ未発達な部分からして、年下かな？

何せこの学校は年齢関係ないからな。

「アタシ、五十畑^{いそはた} 妃茄^{ひな}。ヒナで良いよ！君は？」

『あ…只野 仁。ジンで良いよ。え…と何歳？』

「十六歳。高校一年生だよ」

嘘！俺より年上かよ。

「あゝ敬語とか辞めてよね。そゆの苦手だから」

無邪気な笑顔で微笑んでくれたヒナ。やつべ、めっちゃ可愛い。

「ヒナ、廊下に群れてる野郎共をどうにかしろよ！」

ヒナに大声で叫んできたのは、ボリウムがあるロングヘアは明るい茶色で、目がキツイ子だった。

なんか恐い雰囲気だ。

「ヒナた〜ん！こっち向いてえー！！」

キモツ！！

廊下にはザツと数えて十人くらいの男達が見に、わざわざ教室まで訪れてきていた。

「アハハ…あの人達しつこいんだよね」

苦笑いのヒナ。どうやらこの学校のアイドル的存在のようだ。

「あたいは船戸川^{ふなとがわ} 麻弥^{まや}。以上」

冷たいな！

まあ…仲良くしようとも思っていないから別に良いけどね。

「マヤちゃん怒ると恐いから…。目え付けられないようにしてね」

『し』忠告どうも

「ヒナ！早くこのむさ苦しい奴らどうにかしろ！」

「はいはあ〜い…」

マヤに怒られたヒナは、いそいそと廊下に出ていった。

ヒナが廊下に出た瞬間に、まちぼうけしていた男からは歓喜の声。

その大音声に苛立ったのか、マヤはチツ…と、舌打ちをした。

「何見てんだよ…」

あ、マヤに絡まれた。

『別に見てねえよ』

「あたいに向かつて、その口調…気に入らないね」

最初はこの学校の事で戸惑っていたが、こんな女相手に俺はペコペコするような人間じゃない。

『随分と偉い様だね』

俺だつて喧嘩好きだぜ。まあ、そのせいでここに連れてこられたんだが…。

「てンめえ…」

男顔負けのメンチを切りながら、俺の胸ぐらを掴むマヤ。

うん、さすがに殴るよ？

相手が女子供だろうが関係ないもん。

気に入らない奴は殴る。

俺が拳を振りかぶったその時…

「ちょ…辞めて下さい!」

メガネを掛け、艶のあるストレートな髪のおとなしそうな女の子が、俺達の間割ってきた。

「なにすんだレイナ」

レイナ…と言う名前らしい。

「喧嘩がバレた場合、ペナルティーがありますよ」

「……うつ」

強きなマヤでさえ、ペナルティーと言う言葉を聞いただけでおとなしくなってしまった。

そんな酷い罰でもあるのか…?

「私は速水^{はやみず}麗奈^{れいな}。レイナって呼んで下さい」

『おう』

レイナのおかげで、俺達はペナルティーを避けられた訳だ。マヤは気に入らないけど、まあ良ししよう。

「このクラスの委員長なので、分からない事があつたら、何でも聞いて下さいね」

そう言ってレイナはニコツと俺に微笑んでくれた。

しかし、この学校は解らない事だらけだ。

一葵やマヤは見た目や性格が悪いから、問題児と言う事は解る。

だが、明るくて人なつっこいヒナや、知的で育ちも良さそうなレイナが、何でこんな学校にいるんだろう…。

それに、なぜ二人がCクラスなんだ？ レイナに至っては勉強もできそうなのに。

「フッフ、不思議だなあゝみたいな顔をしてるね、ジンくん」

うわぁ… また一葵きた。

「確かにヒナは良い子だぜ。だが… 見てみな、ヒナに触ったキモ男くんを…！」

は？ … と思つたが、廊下に顔を出してみる。

「ヒナちゃゝん」

「アハハ、ヤダァゝ」

ヒナがキモ男くんを軽く叩いた。… と、そこまでは肉眼で確認できた。しかし、その刹那…

ヒュン… と、耳元で風を切る音がした。

『…………はい？』

何かが高速で通過した。

その方を見ると、十メートル先まで、さっきまでヒナの隣にいたキモ男くんが飛ばされているではないか。

「ヒナは殺し屋の娘さ。幼い頃から裏の世界で生きているし、修行もつんでいる」

『…って、事は…過去に人を殺したから、ここに連れてこられたのか？』

「別にそうじゃない。普通の子の様に外で遊び回る事が出来なかったヒナが、学校行きた〜いと、ワガママ言ったらしい。この学校に来たのは自分の意志さ」

ヒナ…あんな可愛くて元気な子が…殺し屋！？

『じゃ…じゃあさ！レイナは？何でここに？』

「ああ、レイナはIQが180の超天才児だな。しかし親が裏組織の化学者だったんだよ。それで、助手として働いていたが、両親が捕まり、行く宛てを失ったレイナは、この学校に引き取られたのさ」

なんか複雑な事情を持っている子もいるようだな。

俺みたいに不祥事を犯した奴だけじゃないみたいだ。

両親が裏の人間だから、子供も裏…と、いうのを救おうとしている

のが、このヤクザの学校なのかもしれない。

『ちなみに、一葵は何やったんだ？』

「ああゝ万引きとか窃盗とか」

シヨボ！

教訓その三、人間も働きアリも一緒だ！

「よし、今日はここまで。レイナ、号令を」

「はい、起立！」

午後四時、HRが終わり、長い一日が終わった。

普通の学校の勉強と特別変わった事がない授業だったが、何せ年齢制限なし。

さすがにこれでは学力の差が出る…と思ったが、クラスの奴らは勉強とは無縁の生活をしていからしいから、全員同レベルだった。

ただ一人、IQ180の超天才児、速水 麗奈を除いてだが…。

俺はと言うと、勉強に無理矢理使った頭がクラクラする。慣れない事はするもんじゃないな。

今日は早く家に帰ってゆっくりするかな。タバコも吸いてえし。

「おうジン、お前は職員室に來い」

担任のヤス先生に呼ばれ、俺と一緒に職員室に向かった。

職員室…と言っても先生みんな恐いしなあ…。
素で行きたくないんですけど。

「ここが職員室だ。入れ」

『し…失礼します』

中に入ると…これまた普通の学校の職員室と同じ造りで、ちょっと意外だった。

「待ったぞジン。こっちじゃ」

厄丸校長先生が居ました。この人は恐すぎる。

職員室の隣に校長室があり、俺はそこへ案内された。

中に入ると、大きなリュックサックが置かれていた。

…どこかで見た事あると思ったら、このリュックサック…俺のか？

「ジンの両親には承諾を得た。これは君の着替えだ」

…忘れてた。

生徒は寮に入れられるんだった…。

「斎藤と相部屋だが、場所は校内案内の看板を見てくれ」

しかも、よりによって一葵と同じ部屋かよ。

『分かりました。では、失礼します』

そそくさと校長室を出る俺。この人と同じ空間にただで冷や汗

が出てくる。

さて、校内案内の看板は…確か校門の所だったな。

校舎の外に出ると、周りは山に囲まれていた。

見渡す限りでは店や家などがない。

ヤクザの隠れ家かココは？

逃げ出そうとする生徒の防止だろうか…？

そういえば連れられて来た時はアイマスクをされたから、確かな場所が分からない。

ふと、看板が目に入った。あれがそうらしい。

学校の敷地内のみどり図が細かく書かれていた。

どうやら、校長を始め、職員の方も寮生活の様だ。

しかし広いなあ。周りに店がないぶん、校内に店がある。

飲食店や漫画喫茶、カラオケなど…年頃の高・中学生が遊び場とするものが設備されていた。

俺は自分の寮の場所を確認すると、まずは荷物を置くために、部屋へと向かった。

「……ただいま」

不意に後ろから感情の込もっていない、女の子の声がした。

振り返るとそこに居たのは、やはりユキだった。

『お…おかえり…うん？』

ユキはこの学校じゃない制服を着ていた。

まあ…そうだよな。校長も自分の娘には普通の学校に通わせるだろう。

『どの学校行ってるの？』

「車で二時間」

『と…遠い学校だね』

「ここから一番近い」

話しにくいなコイツ。

…そうか、校長がここに住んでるって事はユキもここに住んでるのか。

あ、周りに人がいない今のうちに、あの事を謝っておかないとな…
うん。

『あのさあ…タバコの事…その…悪かったな』

「…あなたも」

あなたも…？ 何がです？

駄目だ。ユキとは会話が成り立たねえ。

『俺が…え？何？』

「私がパパの娘だから？」

だから…態度を変えたの？

と、解釈してみたが、つまりそういう事なのか？

やべえ凶星。

「皆そう…あなたと同じ発想。だからこんな所に連れてこられる」

『あ、ああ。悪い』

くそ…女相手に俺がペコペコするとは…。

「そうじゃない。じゃあ…」

ユキは歩いていってしまった。そうじゃないって事は謝っちゃいけなかったのか？

もしかして…ユキは自分を《校長の娘》として喋られるのではなく、《ユキ》という女として見てほしいのではないだろうか？

…つまり、ユキは友達がない…？

それもそうか。学校は毎日送り迎え。放課後、友達と遊ぶ事もないし、この学校の生徒はユキに頭が上がない。

『ユ…ユキ』

俺の呼び止めに、ユキは振り向かず足だけ止めた。

『俺はジン。そう呼んでくれ』

ユキはコクリと頷いてまた歩いていつてしまった。

――――

「ジン！やっと俺にも相棒ができたぜヤッホー！俺ずっと一人で淋しかったんだぜ」

ウザイよコイツ。

こんなのと毎日生活しなくちゃいけねえのかよ。

一葵の話によると、二人部屋。俺の前に来た一葵は今まで一人だったから、淋しかったらしい。

通りで俺にやたら親切に教えてくれるわけだ。

部屋はシンプルな見た目だが、結構きれいな作りだ。

暖冷房の完備も整っているし、テレビや風呂付きなど、俺の予想を上回ってくれた。

「メシの時間までヒマだろ？何か聞きたい事とか、やりたい事あるか？」

とりあえず荷物を下ろし、床に腰掛け、落ち着こうとした…が、やはりアレがないと…アレが。

『タバコ…吸いてえ』

やっぱ…こんな所に入れられているうちは、未成年の喫煙は厳禁なのだろうか。

「フッフッフオ。コレ、何だか分かるかい？兄さん」

『ウツ…そ、それは…マルメンじゃねえか！』

「さあ、楽園（便所）で吸うぞ！」

俺は一葵と楽園（便所）でタバコをふかしている。

やっぱり落ち着くぜえ〜。

『なあ、なんでタバコなんて持ってるんだ？』

「ああ、月に一回、親から仕送りが許可されてるんだよ。金ないとやっぱ困るからな。仕送りは先生に見られないから、タバコも一緒に送ってもらってるわけ」

ずいぶん優しいご両親だこと。

『じゃあ、レイナって頭良いのに何でCクラスなんだ？』

「頭が良ければ良いってもんじゃないねえ。ま、レイナは運がないんだよ」

運…？

そついや昇格のためには何かやらなくちゃいけないんだつたな。

『なあ、運…って、前は何かやっただよ？』

「冬はマラソン。しかも五人一組のチームで。優勝チームは全員昇格。レイナはヒナと組んでぶっちぎりのトップだった…はずだった。

だが、あるうことがチームにはマヤがいたんだよ」

うわぁ…マヤの性格からして冬場のマラソンなんて走らなそうだな…。

「こんな話を聞いた事があるか？《働きアリ》の話だ。

働きアリは、名前の通り、女王アリの為にせっせと働く訳だが…

働きアリを集めると、七割のアリは働くのだが、三割のアリはサボッてしまう。

では、このサボった三割のアリだけにとしてみると、不思議な事に七

割のアリは働き始め、三割のアリはサボる。

同じ様に、働いた七割のアリを集めても、その内の七割は働くが、やはり三割のアリはサボる」

『だから何だよ?』

「つまり、俺達は最初に集められたアリで例えりゃ、三割のサボるアリな訳だ」

人間とアリは違つたろ…と、ツツコミたかったが辞めておいた。

『まあ…今まではサボってきたからなあ』

「じゃあよ、今度はサボリアリだけで集められた…つまり、この学校がそうゆう訳だが…」

吸い終わったタバコを便所に流した一葵が、立ち上がって俺を指差した。

「サボリアリでも七割は働く……三割はカスだ。

ジンは…どっちのタイプのアリだい?」

『ふん…俺は卒業してえつつつただろ?』

「決まり!パートナーになったのも何かの縁だ。一緒に卒業しようぜ!」

俺と一葵はガッチリ握手を交した。

「お、そろそろメシの時間だ。食堂行こうぜ」

俺は一葵の案内のもと、食堂に向かった。

時間は交代制で、C組が最初の順番らしい。

一クラス30人が四クラス。総勢120人が余裕で入れる食堂の広さに驚いた。

すでに何人が食べ始めている者もいて、俺達も早速注文する事にした。

かなりメニューが多い。それでいて、生徒の食バランスも考えられている。

俺は今日の午後から来たから分からなかったが、朝、昼、晩とこの食堂を利用するため、生徒が飽きない多彩なメニューがあるというわけだ。

しかも全部無料。

と言っても、学費に含まれているらしい。

基本的に駄目人間の集まりであるため、自分の子供が真面目になつてくれる為なら…と、親も高い金でも払うんだとか。

しかし、レイナの様に事情がある生徒に関しては学費も全て免除されるらしい。

なんか最初は嫌々だったが、学校の真相を聞くにつれて良い学校だなあ〜と思ってしまっている自分がいる。

「俺スタミナ定食！ジンは？」

『え〜と…じゃあ俺も同じので』

「はいよお！」

出てきたスタミナ定食の量はおかしかったです。

ご飯がかき氷みたいに盛ってありました。

「量も多いし味も良い！まさにベストだね！さて、空いてる席は…」

『……一葵、あそこに座ろうぜ』

「え？…おいジン！そこは……」

一葵は慌てていたが、俺は迷う事なく席に着いた。

『隣、座らせてもらっよ』

「……どうぞ」

食堂にユキがいたからだ。しかも、周りに人がいなく、一人ポツンと食事をしていたから。

なんだか、イジメられてる中学生みたいな感じがした。
まあユキは気にしていないだろうがな。

『スタミナうめえな一葵！』

「そ…そうだな」

いつものハイテンションが抹消した一葵。

原因はユキが近くにいるからだろっな。

『一葵、別にユキはそんなんじゃない』

…と、ユキに聞こえない様に小さな声で一葵に耳打ちをした。

「いや…そうじゃないんだよ、ジン…」

一葵はもう終わった…と言わんばかりの青ざめた顔をしている。

その理由が、やっと俺にも分かった。

「アイツ転入生だろ？初日から校長の娘を狙うとは…やるねえ」

「…ちっ、何コビうつてんの？気に入らねえな」

俺の右側にいるユキは、周りの声など気にせず食を進めている。

左側にいる一葵は、メシに手をつけず、カタカタと震えるばかりだ。

どうやらこの学校では、ユキと仲良くした生徒は、校長に気に入ら

れようと頑張る奴に思われるらしく、他の生徒からは抜け駆けだと勘違いされ、良い目で見られないらしい。

「よおジン！やっぱ最悪だなお前！」

そしてこのタイミングでマヤ登場。

「…ジン、ご飯粒ついてる」

本当に場の空気を見捨て、ユキが俺のほつぺたについたご飯粒を取ってくれた。

ユキが俺の事を名前で呼んでくれた。

「ハッハッハッ、何お前ら？もうできてんの？」

マヤの堂々とした冷やかしが、周りの目をさらに冷たくした。

「ユキちゃん、騙されてるって！ジンが仲良くしてるのはアンタが校長の娘だからって言う理由で………」

『うるさい』

「ああ！？」

『うるせえっての……』

「なんだとコラア！」

マヤがまた俺の胸ぐらを掴んでくる。…今日二回目だ。

俺はマヤの手首を握りしめた。

さすがに喧嘩っ早いといえど所詮女の子だ。手首は折れそうな程細かった。

「いたっ！」

素早く手を引くマヤ。

『早く消えろって』

今までの俺の雰囲気が変わった事を察知してか、マヤはどこかへ行ってしまった。

転入初日から皆に目をつけられた俺。

これからどうなる事やら…。

教訓その四、麻薬には手を出すな！

『一葵！遅刻するー！マジ早く起きろって！』

「今の俺を起こすとね……サターンが降りてくるぞ？」

どんな言い訳だよ！

なぜ朝からこんなに慌てているかと言うと、ご覧の通り、相部屋の
一葵が起きずに遅刻しそうだからだ。

かと言ってコイツを放置して俺だけ教室に行く訳にもいかんしな…。

完全寮制だから、教室までは歩いて10分の距離だ。

だから朝起きる時間は普通の高校生に比べればかなりゆつくりした
方だ。

まあコイツは朝食の時間も睡眠に使っているから現在八時半…。そ
ろそろ起きていただきたいね。

…と、言う俺も朝食の時間に間に合わなかったが…。

「…あ！今何時だ！？」

やっと起きたかカス。

『あと五分でHR開始』

「起こせよバカ野郎ー！」

さんざん起こしたつつの…。

やっと覚醒した一葵は速攻で用意し、俺達は教室までダッシュした
甲斐あって、ギリギリセーフだった。

「おはよう、ジンくん、一葵」

「おはようございます」

『おはよう、ヒナ、レイナ』

うーん、朝から二人を見てるとなんつつか心が癒されるね。

ヒナとレイナに挨拶を交し席に座る。

あ、ついでに後ろの席の奴にも挨拶しとくか…。

『…おはよう、マヤ』

「…ふん」

相変わらず無愛想な奴だ。

そんな感じで今日も一日始まるわけだ。

「ああ、おはよう、皆。今回の昇格のための競技が決まった。よく聞け」

担任のヤス先生が入ってくるなり、いきなり話題を持ち掛けてきた。昇格という言葉聞き、生徒達は黙っていられない。あちこちで競技は何だなどザワザワしている。

「今回は…ソフトボールだ」

ソフトボール！？

意表を突かれた俺だったが、ソフトボールで勝てば卒業への道が前進すると分かれば、たいした事じゃない。

むしろ、もっと過酷な物を想像していたために、どこか拍子抜けでもある。

「ルールは普通のと変わらん。投手は下手投げ。競技に使う道具も同じだ。ただし、五人一組でやる」

五人？ ソフトボールは九人でやるものじゃないのか！？

五人となれば守備の配置など、結構ハードなんじゃないのか？

何せ一人で二人分の動きをしないといけないわけだ。チーム内に足を引っ張られては困る。

「このクラス内なら誰と組んでも構わん。一週間以内にメンバーを組み、紙に書いて提出しろ。提出書に名前がないものは不参加と見なし、もちろん昇格はありえない。…じゃあ出席とるぞー」

出席が終わり、朝のHRは終了した。

それと同時にクラスは賑わう。

誰と組めば有利か、必死で考え、勧誘しているのだ。

中でも目立つのが、やはりヒナ。

彼女の運動能力は半端ではなく凄い。それは誰もが認めている事だ。

男女問わず勧誘されまくるヒナ。

「ヒナさん、私と組みましょ！」

「いや、ヒナちゃん。どうか僕と…！」

人気者だねえ…。…と、のんびりしてる場合じゃねえ！

俺もどこかのチームに入れてもらわなくちゃ！

「アハハハ、私はレイナと組むから。残りは考えとくね？」

そう言っただけヒナはレイナを連れて教室を出ていった。

俺もできるならヒナと組みたい…。

「ジン…組もうぜ！」

はい、やっぱり一葵から誘われました。

だが、ここは当然…

『もちオツケー！』

何せ、俺は一葵以外の男とはユキの件以来から怨まれてるし、女もマヤと敵対してる俺には関わらないだろう。

…と、すると組む人いなくなね？

「なに、心配すんなって！競技がソフトボールで良かったって事だ！」

一葵はやたら自信満々だ。誰かと組む約束でもしてるのだろうか？

『んな事言ったって…誰誘うよ？』

「誘う？そんな必要ねえよ」

「一葵くん、もう誰かと組んじゃった？」

「いや、ジンだけ」

「じゃあ組みましょ！」

…マジ？ ヒナから誘って来てくれた…？

『え…何で？』

「運動が得意なのは俺もだ。特に、野球、ソフトボールは…な」

頼もしい我が親友よ！

そんな訳で俺、一葵、ヒナ、レイナと、考えられる限りで最高のメンバーを組む事ができた。

残りはあと一人…か。

「ヒナ、チームは決まったのか？」

「うん、ここの皆と、マヤちゃんまで五人！」

え…最後の一人はマヤ？

「冗談じゃねえ。女にコビ売るカスと組めるか。てめえ外れろ」

マヤは凄みを効かせて俺を睨んでくる。

『ざけんな。てめえとチームワークはゴメンだ。抜けんならてめえだろ』

「アタイは毎回ヒナと組んでんだ。新人がでかい顔すんな」

『てめえだつてヒナにコビ売ってんじゃないか』

「なんだとコラア！」

「辞めろつて！」

また組み合いになった俺達を一葵が必死に阻止する。

… ったく、何でマヤはあんな意地っ張りなんだよ。

もっと素直になれってんだ…！

「マヤが気になる様だね、ジンくん」

でたあ…一葵。

『まあ…な』

「マヤがこの学校に来た理由は、ヒナやレイナとは違う。つまり悪事を犯したんだわな」

まあ…この学校にいる生徒は全員そうゆう奴らだからな。

それにマヤの見た目と性格を考えたら、女暴走族とかやってそうだし…。

「麻薬だよ。マヤが…マヤく…。はい、滑りましたあ！ツルツルでございます」

『良いから続き…』

「ちえ…。でな、麻薬の売人どころか、マヤ自身も麻薬を打ってたらしいぜ。だから、マヤには関わるな」

マヤが…薬をねえ…。

まあ、あんな奴どうでも良いさ。

俺達で、あと一人メンバーを見つけてマヤを追いつけてやる！

『一葵、手分けして勧誘に行こう！』

「あいよ！」

こうして俺は一葵と別れ、あと一人をチームに誘うべくプラプラ歩いていった。

色々聞いてみたが、やはり食堂での雪の件もあってか、どうも俺とは関わりたくない視線を浴びまくった。

それでも諦めずに俺は勧誘を続けた。

—————

すっかり日は傾き、そろそろ夕食の時間だ。

結局誰一人OKをもらえず、トボトボと部屋に戻ろうとした時だ…！

寮の裏にある花壇にマヤがいた。

まあ別に居たから何だって訳じゃないが、少し悪いけど隠れて見させてもらう事にした。

なんと、あのマヤが花壇の花に水と肥料をあげているではないか。

小さくしゃがみこんで一輪の花を見つめるマヤの背中からは、教室で見
る威張りくさったマヤとは雰囲気が大違いで、思わず健気に思えて
くる。

『…マヤ』

後ろから話かけると、マヤは一瞬ビクツと体を反応させ、こちらを
睨んだ。

「てめえ…見てたのかよ」

もういつものマヤである。その事に何故か少し安心してしまった俺
がいる。

『優しいじゃんよ。花に餌やるなんて』

「餌つつうな！植物だって生きてる」

意外だよ。本当に意外。

マヤが花を大切にすることより、なんつーか…生を大切にしてい
るからだ。

どこことなくマヤは《命》を軽く考えている様なイメージがあった。

しかし、どうやらそれは俺の勘違いだったようだ。

『今のお前、メツチャ可愛いな』

「……なっ！」

おっと、思わず声に出ちまったか…。

マヤも、らしくなく照れているようだ。

「ふん！ユキの次はアタイかい？男は女に求めるものつつたら体しかねえくせに…偉そうな事言うな！」

『おい、別にユキとは友達なだけだ。…って、体ってお前』

「アタイは信じてた男に裏切られたんだよ！？もう男なんて信じられっかよ！」

マヤは言い終えると荒い息をしながら俺を睨みつけた。

その目からは悲しみが伺える。

『何があつたんだよ…』

「アタイはね…不感症なんだよ…笑えるだろ？」

不感症…性行為の時に感じないというやつか。

「もともと体目的だったらしいけどさ。アタイが不感症なのを知った彼は…媚薬を使いやがったんだ」

『媚薬？』

「麻薬の一種さ。理性がぶっ飛ぶ程感じるらしい。そいつを打たれて…アタイがどんな目にあつた事か…」

そっぴやマヤがこの学校に來た理由は麻薬を打つたからだと一葵が言つてたな。

マヤは自分の意思で麻薬に手を伸ばした訳じゃなかったのか。

「タバコ…吸つてるだろ？」

『ああ』

「禁煙した事あるか？」

『ある。一日もたなかつたけど』

「麻薬の中毒性はタバコなんかとは比べ物にならないんだ。薬を打つたアタイは彼なしじゃ生きて行けない体にされちまつてね。彼は麻薬取引きで捕まつたんだが、それがなかったら危うくアタイは廃人になるとこだったよ」

なぜだ…なぜそんな事を俺に言う。

教室内で一番の敵対関係だつただろ、俺達は。

マヤから真相を聞かされた俺は今までのマヤの行動も仕方ない事か…と思つてしまった。

「…ふ、アタイと同じチームにはなるんじゃないよ」

『は？今更何言って…』

「アタイはこの学校を卒業する気なんてないのさ」

『なんでだよ？』

「卒業したって、待っているのは刑務所暮らし。今頃、元彼もアタイを庇うどころかチクってるからな。罪は消えないんだよ。」

「前回のマラソンの件なんだが、ヒナとレイナには悪いと思ってる。最初は断ったんだが、しつこくてな…。でも、それが嬉しかったんだ。」

「だが今回はアタイはチームから抜けることに…」

「それは違う」

「マヤがまだ話しの途中だと言っのに、割って入ってきたのはユキだった。」

「この学校を卒業できれば、普通の生活ができる事が約束されている」

『マジかよユキ！じゃあマヤが卒業できれば…』

「もちろん」

と、言う事は罪が消えるって事か。

でも、そんな事許されるのだろうか？

いかに校長が元ヤクザだったとしても…いや、元ヤクザだからこそできる事なのかもしれない。

「なんだい…って事はアタイは皆に迷惑かけっぱなしじゃないか」

『ヒナもレイナも気にしてねえよ。やっぱりこの五人で組もう！』

「いいの…か？こんなアタイを」

『らしくねえって！それとも自信ねえのか？』

どうもテンションの低いマヤとは絡みにくいから、挑発っぽい口調で言ってみた。

「ふん、てめえこそ足引つ張るんじゃないぞ」

ほら、いつものマヤだ。

俺は仲直りとこれからもヨロシクの意味を込めて、握手を求めた。

マヤは、やはり男に抵抗があるのだろうか、最初は拒んだが、ガツチリ俺の手を握ってきた。

「…あつたかい。それに大きくて力強くて…頼もしい…」

『ん？なんか言っただ？』

「な…何でもねえよ！」

？？ さっきマヤが何か言ってた気がしたんだが…まあ良いか。

『それより、なんでユキがここに？』

「マヤだったんだね」

答えになってない…。

ユキは花を眺めている。

「この花は私が植えたの。今までありがとう。」

「あ、水と肥料の事？知ってたんだ」

「うん」

あ、今気付いたけど、さっきユキはマヤの事を名前で呼んでたな。

ユキが人を《あなた》ではなく《名前》で呼ぶって事は、少なくとも好意を寄せている証拠だ。

『そろそろ飯の時間だな。ユキ、マヤ、食堂行こうぜ』

その日、皆で食べた晩御飯は、今までになく美味かった。

周りの連中は、昨日まで敵対の関係にあった俺とマヤとユキが、仲良く飯を食っているのを見て、不思議な顔をしていたのが面白かった。

教訓その五、例えチーム名だろつと、名前は適当に決めるな！

「プレイボール!!」

担任のヤス先生が、右手を高く上げ、叫んだ。

「じゃあ!!」

一葵が気合いを入れてバッターボックスに入る。

ついに始まったクラス別対抗ランク昇格を賭けたイベント。今回の競技はソフトボール。

広すぎる校舎は運動場のスペースも多く、一度に試合が行われる。

俺達C・4組の五人、俺、ヒナ、マヤ、レイナ、一葵のチーム名《ダーツと行ってワ》（命名一葵）の、一回戦の幕開けだ。

一番ショート、一葵

二番キャッチャー、レイナ

三番センター、マヤ

四番ピッチャー、ヒナ

五番セカンド、俺

野球に自信がある一葵と、運動神経抜群のヒナを中心に組んだオーダーだ。

頭脳明晰で、ヒナを良く知っているレイナをキャッチャーに。

バッテリーまでは簡単に決まったが、問題は野手だ。

普通は野手は七人いる。

しかし、残り三人しかないのだ。

つまり、マヤと一葵と俺だけでグラウンドを掛けづりまわらなくてはならない。

そこで、一番リスクの少なくしたのが、この守備形。

俺はセカンドにつきながら、一葵に打球が転がった時点で、ファーストにダッシュして着く。

万が一だが外野に打球が行けばマヤに任せるが、マヤはセンターとレフトの間に守らせ、ライト方面を担当するのは俺だ。

色々と考えた一葵だったが、心配ご無用だった。

何せ一回の表は相手チームの攻撃だったが、ヒナの剛球により、あっさり三者三振という好スタートをきったのだった。

試合は短期戦。攻守回数を三回を繰り返すか、30分の時間が経つ

た時点で終了。

一回から先取点を取ればかなり有利になるのだ。

さて、気合いを入れた一葵。バットを長く持ち、一発長打の構えだ。

「よっしゃー！いただき！」

初球を迷わず振り抜いた打球は、見事にセンターの横を抜けた。

『長打コースだ！走れ一葵！』

「わーってるよ」

守備が少ないという条件は相手チームも同じである。

確実にアウトにできる内野手に二人、外野を一人という守備形にするのがセオリーだ。

センターが慌ててボールにたどり着いた時には、既に一葵は三塁ベースを回っていた。

返球むなしく、そのまま一葵はホームイン。

「プレイボールホームラン」

ホームベースの上に立ち、人差し指を立て、手を高く上げた一葵。

どうでも良いから早く戻ってこい、恥ずかしいわ。

続いて二番レイナがバッターボックスに入る。

力がないレイナは一番軽いバットを短く持ち、打席の一番後ろに立って構えた。

バットをねかせている所を見ると、確実にミートし、シングルヒット狙いのようだ。

ソフトボール未経験者が下手投げをすれば、もちろん球はフワァァンと山なりになる。

「球速およそ50キロ。真ん中高めの山なりのボールはミートするだけで……」

何やらレイナがバッターボックスの中でブツブツと呟いている。

「入射角よし、打球は……」

レイナがバットを振り抜く。

「…レフト前へ」

パコンとジャストミートした打球はレフトの手前に低い球道を描いて飛んでいった。

よく分かんないけど、なんか凄いな。

続いて打順はマヤ。

連打を浴びた相手投手は既に肩で息をしている。

相手だって昇格のために必死なのだ。

それを今の俺達の《イケイケ押せ押せ》状態の前に、すっかり顔が青ざめている。

「おうテメエど真ん中投げなかったらどうなるか分かってるよなあ
」

さらにマヤのこの脅迫だもん。そりゃ青ざめるよね。

相手投手がビクビクしながら投げたボールは、手元が狂ったのか、マヤの顔目掛けて一直線。

いくら球速が遅くても、決して柔らかくはないソフトボールが顔に当たったら無事ではないだろう。ましてやマヤは女の子だ。顔に傷でもできたら大変だ…！

『マヤ！危ねえ！！』

「この…真ん中つつつただろうが！」

マヤは避ける事なくバットを縦に振り下ろした。

一刀両断を思い出させるスイングでボールを叩く。

バットにズレもなく当たったボールは理論上、正面に飛んでいく。

マヤの正面には、もちろん相手投手がいるわけだ。

怒りを込めてフルスイングしたバットにジャストミートだ。打球のスピードも半端ではない。

しかもソフトボールは野球よりも、ピッチャーマウンドとバッターボックスの距離が短い。

当然、この打球に反応しきれなかった相手投手の顔面に直撃……！！

あらら……鼻から赤い色の水性の液体が出てますよ……。

試合は相手投手の治療を優先させるため一時中断。誰の目から見ても、明らかに戦闘不能なので、人数のハンディをなくすために俺が試合から除外される事となった。

まあ、ヒナの球は打たれないから問題ないだろう。

――試合再開。

マヤはシングルヒット扱いになったので、一塁に。レイナは二塁。

ノーアウト一、二塁と言うチャンスに四番ヒナ。

「よろしくねえっ」

新しい相手投手にニコツと可愛らしく微笑むヒナ。

「ヒナたん……萌え」

うわ、あの投手は以前ヒナに投げ飛ばされて壁にメリ込んでた奴だ。デブでメガネでキモくてオタクでロン毛だから、あだ名は《デブロン毛》に決定。

「いくよ、ハア…ハア」

すでに肩で息しているデブロン毛。まあ理由はちょっと違うけど。

「えい」

そして可愛らしい掛け声とは裏腹に、ありえない飛距離をたたき出した打球。

センターの頭上どころか、遥か彼方まで飛んでいった。

「ほえ…」

これには一同ア然。

とにかく、スリーランホームランで一気に三点追加。一葵の一点に加えると四点だ。

「ゲームセット！」

ヒナがホームインするとヤス先生がコールした。

時計を見ると、試合開始から既に30分が経過している。

どうやら、マヤが怪我させた奴の治療に思いの外、時間を費やしたみたいだ。

相手チームの攻撃を終えるまでの時間もないとの事で、試合は強制終了した。

何はともあれ、俺達は見事に一回戦を突破したのだ。
ちなみに俺は何もしてない。

「ナイスホームラン、ヒナ」

「ありがとう」

「いや、この試合の決定打は俺のプレイボールホームラン……」
「お前のはまぐれだろ」

いける……このメンバーならマジで優勝も夢じゃない。

「お前ら、まずは一回戦突破おめでとう」

「あ、ヤス先生」ヒナのホームラン凄かったでしょ」

「ああ、凄かったよ。失くなったボールの請求書が俺のトコに来たがな」

「アハハ、ゴメンなさい」

「それより、勝ったチームは体育館へ行って試合の結果を報告してこい。失格になっちまうぞ?」

「はい。行こ、みんな」

そして俺達は試合に勝った事を報告に体育館に向かった。

この学校の体育館はとにかくでかい！

もう全国大会の会場に使われてもおかしくないぐらいだ。

『すいません、え…と、一回戦、4 - 0で勝ちました』

受け付けの所にいた先生に話し掛ける。

「おめでとう。チーム名は？」

チーム名…

『ダーっ行ってワー…です』

「ダーっで行っ…プッ！おっと失礼」

ばか一葵が！ 恥ずかしいじゃねえか。

「次は30分後にグラウンドBで試合だ。遅れるなよ」

『はい！』

先生がトーナメント表に結果を書いている。次の対戦相手は…って
気になったところで、俺にはどのチームに誰がいるかなんて分
からないがな。

「おい…やべえぞ。次の奴ら」

一葵の顔色がよろしくない。どうしたんだ？

「B - 1組って…アイツがいるクラスじゃ…」

B…って、ひとランク上の奴らを相手にすんのか！？

いや、でも関係ねえだろ。ランクが上でもソフトボールだったら、俺らのチームにも勝ち目は…

「23対0…派手にやってくれるわね」

わー… たった30分で23点も取った人達が相手なんだ。

「二ノ宮 勝…このみやまのり高校二年生だ。こいつはチームを甲子園出場に導いた男だったが、不祥事を起こして、学校側から責任を取られ、この学校に来た奴よ」

甲子園出場…かあ。あ、そういえばニュースで甲子園出場を没収された学校とかで騒がれてたっけ。

次の対戦相手が…そいつがいるチームなのか…。

「もしかしたらアタシの球も通用しないかもね」

『そんな明るく言っなよヒナ…！』

「イイの！…ってかもし打たれたら嬉しいし」

嬉しい…って。

『ヒナってMなのか？』

「違う違う♪むしろS…って何言わせてんのよ！」

自分で言っただんじやないか…。

可愛い顔して何言ってるんだか…。

「アタシがこの学校にきたもう一つの目的はパートナー探しなの♪
アタシより強い人を…ね」

『パートナー？』

「殺し屋よ♪残念ながらレイナは…その気がないみたいね」

レイナが苦笑いで頷く。

殺し屋のパートナー探しか。よし、ヒナの前では大人しくしとこ。

教訓その六／チャンスに打ち勝て！（前書き）

2008年最初の投稿です。遅れましたが、皆様あけましておめでとございますm（―）m

教訓その六／チャンスに打ち勝て！

30分が経過し、グラウンドにやってきた俺達。

軽く体を温め、試合が開始した。

対戦相手は、皆男で体付きは高校生。慎重も高く、どう見たって小
グロリー
学生対大人だ。

先攻は俺達。オーダーは一回戦からずっと同じなので一葵からだ。

バットを長く持っていた一葵だったが、今回は軽いバットを短く持
っている。目付きも真剣だ。真面目な一葵はなんか変だな。

ピッチャーは噂の二ノ宮だ。さて、お手並み拝見だな。

大きなモーションから放たれたボールはズドンと音を立ててキャッ
チャーミットに納まった。

「はやつ！何今の！いや速過ぎるだろお！」

打席で一葵が騒いでいる。まあ誰の目から見ても今のは打てんわな。

マジで速い。ヒナレベルじゃないと打てねえぞ、あんなもん。

二球目、一葵はバットを振ってみるが、タイミングが合わない。ミ
ットにボールが入ってから振っている。

野球経験者の一葵がこれだ。こいつはちつと骨が折れそうだぜ。

三球目、なんとかバットに当たったが、力負けした打球はボテボテのピッチャーゴロ。

あっさり討ち取られてしまった。

ベンチに戻ってきた一葵は絆創膏ばんそうこうを手の平に張り出した。

「今の一降りで皮持ってた。手が痺れてやがる。なんて質の重い球投げやがる…！」

おいおい、マジかよ。

下手投げであんな速い球投げられるっただけでも凄いのに…。

一葵でこれだ。女の子のレイナには危ないんじゃない…。

『レイナ！俺が代わろうか？』

「……え？あ、いえ、その、大丈夫です」

…？　なんか動揺してるように見えるな。やっぱり恐いんじゃない…！

『危ないからさ、無理だけはしないでくれよ』

「本当に大丈夫です。し…心配してくれて…ありがとうございます」

「よかったねレイナ！大好きなジンく…」

「何言ってるんのヒナ！あの、違いますから。じゃあ行ってきます」

…なんだこの子達は…？

「ふんっ！デレデレしてんなよジン！」

マヤに背中を叩かれ、試合に集中した。

「あ、ジンくん。レイナなら大丈夫だよ」

ヒナはやたらと安心そうに見ている。

男の一葵だって力負けしたのに、レイナの細い手じゃどうする事も…。

そっか！二ノ宮は女の子相手だから手加減して投げってくれる…

くビュシュ！！く

わけないか…。

むしろ一葵の時より目付きが本気だよ…。

くパコーンく

それを打っちゃったよ！

「レイナって案外、力あるみたいよ。ほら、あの子も裏の世界で育ったし」

ヒナがパチパチと手ばたきしながら、顔を俺に向けて言う。

いや、え？ ああ、はい。そうですか。と、納得するしかなかった。

打球は綺麗にセンター返しでヒットとなった。

女の子に打たれた二ノ宮はショックなのだろうか、妙に苛立っている。

「次はアタイか…」

マヤが二・三回、素振りをして、こっちを見た。

「……………」

『どうした？』

「…は！？何でもないよ！」

…だから、なんなんだよ！

「まったく…アタイの事は心配してくれないのかい…」

打席に向かうマヤの背中中は小さく見えた気がした。

怒ったり落ち込んだり大変だな、マヤも。

『なあ一葵、なんかマヤ元気くない？』

「ふっ、お前鈍い上にムカつくな。殴っていいか？」

「ジンくん、レイナの事泣かしたら許さないからね！あとマヤちゃんも！」

訳分かんねって皆！

おっと、それより試合に集中しないと！

マヤからは急に怒のオーラが見えた。

だが、力んだのがいけなかった。

ランナーがいる時はゴロを打つのが良いが、フライが上がってしまった。

守備が少ない分、ダブルプレーの可能性がないのだから、これはいいだけない。

だが、一藝でも《当てる》のが必死だったのに、マヤは《打った》のだ。この差は大きい。

『女の子なのに良く頑張った』
「女の子ってのは辞める！」

随分と機嫌悪いな…。

あ、もしかして怪我でもしたか？

一葵の手の皮がめくれる程の剛球らしいしな。

『マヤ、ちよつと手え出してみ？』

俺はマヤの手を掴んで、手の平を確認した。なあんだ、無事じゃないか。よかったよかった。

「……なに手え握ってんだテメエ！」

『いや、怪我はないかと…』

「心配…してくれたの？」

『ああ、そりやまあ』

「あ…ありがと。でも礼は言わねえからな！」

言ってるじゃねえかよ。

「ジン、やっぱり殴っていい？」

なぜ！？　ってかさつきから何で一葵は怒ってんのかも分からねえ。

くズドン！！！！

ミットの音に体がビクツと反応し、試合をしていた事を思い出した。

「速い、やるね、君」

ヒナは楽しそうだった。

女の子に挑発され、二ノ宮は怒り心頭、爆発寸前だった。

プルプルと震え、今にも暴れ出しそうだ。

「二ノ宮、落ち着け。相手は女の子だぞ？」

「っせえな！黙ってる！」

チームメイトの励ましにも冷たい態度。血の気が多いな。なるほど、甲子園出場を剥奪された原因がコイツなのも頷ける。

「こんな奴らによ……」

二ノ宮は一塁にいるレイナを睨み付けた。さっきヒットを打たれた事をまだ根に持っているのか。困ったボーヤだぜ。

「ああー！ム力つく！ム力つく！ム力つく！」

まるで餓鬼だな。高校生ってこんなもんなのか？

「いいから早くうー」

ヒナの方が大人に見えるのは…気のせいだな、絶対。

「この……！」

今日一番の大きいモーションから放たれたボールを、ヒナは難無く打ち返した。

「なにっ…！」

センターの頭を越えた打球。しかし、守備の人の足が速い。

返球も手際よく、ヒナは二塁止まり、レイナはホームに帰れず、三塁止まりとなってしまうた。

でも状況は押せ押せだ。

このまま先取点も取れるぞ！

…あ、次俺か。

『さあーて、んじゃ行ってくるかな』

「バット振るの久しぶりだろ？こんな絶好のチャンスで鈍ったなんて言わせねえぞ？」

『…知ってたのか？』

「野球選手の情報は特に…な」

全く、一葵はどこからそんな情報を仕入れてくるんだか。

俺はバットを手にとり、バッターボックスに向かった。

「そのバットじゃねえだろ。お前のはこっちだ」

そう言つて一葵は持参したバットケースから、あるバットを渡してきた。

全く…本当によく知つてやがるぜ。

「え？なに？ジンって野球上手いのか？」

「まっ、見てれば分かるよ」

打席に入って構える。

…が、二ノ宮は構えようとしない。

何だよ、ヒナのヒットまで気にしてんのか？

やだやだ、そんなんでいちいち試合を中断させられちゃたまらないぜ。

「くそ…くそ！女なんかに…一回も………あ？」

お、やっと俺に気付いた。

「デメエ！舐めてんのか？この俺を！」

『いや、俺は至って真面目ですぜ？』

「じゃあ何だよ、そのバットは!?!」

『あ、これ? 《ビヨンドMAX》』

バットは木製、金属製の主に二種類だ。

だが、ビヨンドMAXとは、普通のバットとは違い、ミートする部分がゴムでできている。

指で押してもへこむぐらいだ。

ジャストミートすれば飛距離は凄いのだが、ミートできなければダメ。まさに一か八か。

…と、言うより、力があって自信があるものでないとこのバットを使おうとはしないのだ。

自分の剛球に対してビヨンドで対抗する俺に腹が立ったのだろう。

「どいつもこいつも…俺を舐めるなあああ!」

……………あ!

と、皆が気付いた時には遅かった。

二ノ宮はソフトボールの投手が禁じられている《上手投げ》をしてきたのだ。

ついにキレたか。

予想通り、下手より上手の方が球速も球質も良いに決まっている。

だからこそビヨンドなのだ。

力には力。その反動はゴムの部分でカバーしてやるさ。

「なあ、ジンってそんなに有名な選手だったのか？」

「ある意味…な」

「ある意味…？」

「中学生の頃、バッティングセンターでたまたまジンを見た事があったんだ。」

ジンは柄の悪い連中と一緒にだったが、初めて野球をやるみたいだった。

ジンは俺を覚えてなんかいなかったが、俺はジンを忘れた事なんてないさ。

だってよ…普通、右打ちの奴は左足を上げるだろ？

なのにジンの野郎は…」

『うおおおおおらあ！』

「右足上げてバンバン打ってんだからよ！」

『逆一本足打法！！』

「その時ジンに貸してやった（本当はカツアゲされた）俺のバットが…ビヨンドMAXだったのさ」

空高く舞った打球は、そのまま勢いを無くす事なく飛んで行った。

誰が見ても文句なしのホームランだろ？

推定飛距離じゃ160は行ったな、ありゃ。

「凄いですジンさん。とってもカッコイイ…あ、あの、その……」

「やるじゃんジンくん！でも変なフォームだね♪」

ホームベースについた俺を、先についたレイナとヒナが待っていて祝福してくれた。

ふう、何とか打ててよかった。内心ヒヤヒヤもんだったからな。

「二ノ宮くんには期待してたのになあ…パートナーには向いてないや」

つてか二ノ宮は人として問題があるよね。

「なんで俺の投げた球があんな飛ぶんだよ！しかも上手投げしたんだぞ？マジありえねえー！！」

マウンドで怒り狂う二ノ宮。もうホントにあの人どうにかして…。

「ゲームセット！グローリーの反則負けとする！二ノ宮はペナルティー！」

審判の先生が叫んだ。

おお、そうだ。先生がいるじゃん。

良かったあ、二ノ宮の暴走を止めてくれるよ。

……………あ？

……………俺今なんて言った？

先生がいて良かった？

こんなに先生を頼ったのはいつぶりだろう？

この学校に入ってから、カスみてえな奴を見てきた。

そいつらを見て苛々した。

真面目にやれ…って、違うだろ！

俺自身そんな偉そうな事言える立場じゃないだろうが！

今までの生活で、周りの真面目な連中から見たら…俺はカスみてえな事ばかりしてたんだな…。

先生…。この学校卒業したら、まずアンタのところに謝りに行くよ！

「うわああ！離してくれ！」

…人がせつかく気分良く語ってたのに…二ノ宮が先生二人に拉致されていった。

「仲間の声も聞かず、すぐ我を見失う。プライドばかり高いし、たいした実力じゃなかったわね…」

おわっ！？　なんかヒナがブツブツ言ってる。

キヤラ違っただろ。いつもの語尾に、マークはどうした。

「ちょっと頼りないけど…いざという時に出来るジンくんがイイ」
」

わわ！？　こら、ヒナ。抱き着くな！

「ちょっとズルイ！……じゃなくて、辞めなさいヒナ！」

「ジンくん！殺し屋やらない？」

『それは勘弁…』

「てめえヒナあー！ジンから離れろ！」

「きゃーマヤちゃんが怒ったあー」
」

もういい加減にして下さいよホントに。

「ジン…クロス！」

その声は一葵からではなく、ヒナ親衛隊によるものだった。

教訓その七 アドリブが効かない奴は勝てない！

「ヘーイ、ジンじゃないか。久しぶりだね」

『オーウ、イッパーツ！ 元氣してたかい？』

「オイオーイ、俺の名前はイッパツじゃないぜ。一葵、か・ず・き・だ。何度言ったら分かるんだい？」

『アハー。うっかり読み間違いしそうな名前だな！』

「それよりジンくん。今、俺達、波に乗ってるぜヘイヘーイ！」

『そーなんだよ！ ソフトボールで勝ち進んでるんだぜ！ しかも、優勝候補を破ってな！』

「きつとジンのおかげさー！ 君のホームランに、観客のハニー達は皆、目がハートになってたぜ！」

『辞めてくれよー。俺の恋のストライクゾーンは、一葵と違って狭いんだからさ！』

「オイオーイ、それは一体どういう意味だい？ 場合によっちゃ、俺も怒るぜ？」

『言葉の通り、君のストライクゾーンは広いつて事さー』

「オーウ待ちたまえ、それじゃまるで、俺が誰でも良いみたいな感じじゃないか？」

『この前だって、あー…あの………よく肥えたビッグな子いただろ？ その子に言い寄られてたじゃないか』

「あー、キャサリンの事かい？ 激しい夜だったぜ。…おっと、今のはカトリーヌには内緒にしてくれよな」

『ハッハー！ やっぱリストライクゾーンは、広いじゃないか！』

「どんな子にでも、バットは振っちゃうってか！ 参ったなこりゃ！」

『どうだ、一葵。俺達のアメリカンジョーク、通用してるか？』

「分からん…打ち合わせ無しのアドリブじゃ、今のが限界だぞ？」

「ジン…只野仁。許さない、許さない…許さない」

駄目だー！ 通用してねー！

なぜ俺達が出だしからこんなに必死なのかと言うと、背後から殺気大オーラを感じるからだ。

その正体は毎日毎日飽きもせずにヒナを見にわざわざ教室まで訪れる奴らだ。

ザツと十数人。しかも全員《ヒナ親衛隊》と書かれたハチマキを頭に巻いている。

そもその原因は、ヒナが俺に抱き着いた事にある。

身の危険を感じた俺は場を和ませようと、恥を承知で一葵とアメリカンジョークを言ったんだが、どうやら効果はなかったようだ。

どうも俺は変な奴に目を付けられる体質らしいな。

ああゆう奴らって…なんて言うか…ヤバイよね。

将来はストーカーだよ、絶対。もしくはアニメ見てハアハア言う人達だよ、うん。

『皆、体育館に勝利の報告しに行こうぜ』

「そうだな。ってか、早くこの場を離れた方が良くぞ、ジン」

よし、体育館行こう。すぐ行こう。

そそくさと逃げる俺だったが、なんか見られてるよ絶対。

「ふん、ジン。これで分かっただろ？ ヒナにはライバルが多いんだからお前じゃ無理だって」

マヤ、俺は別にヒナ狙いとかそういうんじゃないんだが…。

何はともあれ、二回戦も突破。しかも優勝候補のグローリーを倒してだ。

俺達のテンションも上がる。

だいぶ数も絞られてきて、残るチームはあと八チーム。

あと三回勝てば昇格ですよん。

その後、二ノ宮の球を体験している俺達にとっては、他の投手が投げる球は遅く感じた。

その事が功を征し、無事に決勝戦まで昇り詰めたのである。

決勝戦ともなれば、全生徒が見に来る。時間も30分などケチな事を言わずに、九回表裏みっちり試合をして勝敗を決める。

決勝戦は2時から。

その前にお昼タイムだ♪

緊張して食が進まないが、大事な場面で空腹で力が出なくては困るので、無理にでも胃に流し込んだ。

……そして、気のせいではない。誰かに見られているような……。

バツと後ろを振り返ると、やっぱり居ましたヒナ親衛隊の皆さん。

ウザインだけど、殴って良いかな？

だが、今回の親衛隊はなぜ全員ニコニコしている。

そして俺の所まで来て…

「いやー、さっきは悪かったね。どう？
君も親衛隊に入るかい？」

勧誘キターー！

『い、いや。俺はいいです、はい』

「そつか、残念だな。じゃあ決勝戦、頑張ってくれたまえ。これはお詫びの印」

そう言つて親衛隊の奴が、俺にジューズをくれた。

何だ、実は良い奴らじゃないか。

「ジン、そろそろ準備しに行くぞー」
『おーう』

一葵に呼ばれグラウンドに向かった。

「では、決勝戦を開始する。礼！」

「お願いしやあつすー！」

ついに始まったぜ、決勝戦。対戦相手はAクラスの奴らだ。

Aクラスの奴らは、この試合に勝てば卒業試験を受ける権利が与えられるらしい。さすがに気合いが違う。

しかも、隙がない。

今までの奴らは、俺達の体格や、Cクラスなんかには負ける訳がないなどの勝手な判断で油断している部分があった。

だがコイツらはさすがである。誰一人として気が緩んでるやつがない。

だが、それは俺達もそうだ。あっさり決勝にきたからといって、簡単に勝てると思った試合は一度もなかった。

そうゆう気の緩みがミスに繋がるからだ。

《ダーツと行ってワー》^{バン}対の最終戦が始まった。

俺達は後攻なので、それぞれ所定の守備についた。

ヒナの第一球目…今までの奴らはかすりもなかった球を難無くミートした。

打球は鋭い。だが、運良く一葵の正面へ。

「じゃああ！」

それはグローブには納まらなかったものの、体で止めた。

素早く球を拾い上げ、その隙にファーストについた俺に送球。

よし、これでワンアウトだ…！

………！！

な、なんだ……

目が霞む………？

球がぼやけ………て

くスカく

一葵の球を取りそこねた。俺の後方に転がっていく。

「ジン！ てめえ何やってんだ！」

マヤから罵声がとぶ。

慌ててボールを取りに行くが、打者は既に二塁にいた。

一度タイムをとり、マウンドに集まる。

「ジンくん。緊張しなくてもいいよ」

ヒナは明るく微笑んでくれた。本来、一番ショックなのはヒナ本人のはずなのに。

投手にとって打ち取った打球がヒットになるのは精神的に辛いのだ。

それを、あるうことか俺のエラーで…。

目が霞んだと言いつきにすぎない。

『ごめん、みんな』

ここは素直に謝っておこう。

「俺の球が速過ぎたか…ふ、罪だぜ」

くそ、調子にのった一葵を怒る事もできん。

「……………」

レイナが真剣な目付きで俺の目を見てくる。

やばい、怒ってる…？

『あ、あの。レイナ、その…ごめん。ホントに…』

「……………あ！ いえ、私の配球が甘かったから打たれたんです。気にしないで下さい」

うう、この子達は良い子だなあ。

でもその優しさが逆に傷付く。マヤみたいに怒鳴ってもらった方が気が楽だ。

こいつらの為にも、もうエラーはしねえ。

俺は守備位置に戻った。

「レイナ、ジンの奴…」

「いえ、まだ何とも言えないわ。一葵くん、次はジンくんの体に当たらないように送球してみて」

「ああ、分かってる」

「なにになに？　一葵、レイナ、お前ら何の話だよ？」

「アハハ、マヤちゃん。心配いらないよ」　一葵くんも気付くなんてさすがだね」

「ふん、俺を誰だと思ってんだよ」

気を取り直して試合が再開した。二番バッターが打席に入る。

やべえ……また目が…

（ヒナ、内角低めで）
（オツケー♪）

ヒナが投げた球を、またしても難無く打ち返すバッター。

打球はボテボテのサードゴロ。

一葵がそれを捕球し、俺に送球。

……………今度こそ…！

くスカく

…え？　また？

「審判！　この試合、放棄します！　だから早くジンくんを病

院に！」

レイナ…何言つて…ん

「どういう意味だ？ 試合放棄って、いいのか？」

審判の先生もレイナの発言に戸惑っている。

「いいから早く！」

訳も分からない内に、試合は終わり、俺は先生に運ばれて行った。

グラウンドに救急車が登場し、担架に乗せられる。

一葵とレイナが同行してくれ、救急車に乗りながら俺は訳の分からない治療を受けている。

『ちょっと待ってくれよ。試合…俺のせいで皆の昇格を…』

「いいの、ジンくん」

『何でだよ、レイナ！』

「あなた、目が霞むでしょ？」

『あ、ああ。でも、これくらいで…！』

「試合前に何か変な事なかった？」

変な事…？ 特に何もない気が…。

「視覚麻痺症状が出てるわ。瞳に視点が定まってないわ」

…何ですか、それ？

「ジン、ヒナ親衛隊からもらったジュース。あれじゃないか？」

「たぶんそれね。飲み物に溶けやすく無味無臭の薬品。だとしたらまずいわね。致死量知らない素人が扱えば、最悪失明の可能性まであるの…」

ええー！？ ちょ…何だよそれ？

「よかつたな、ジン。レイナが薬品関係に詳しくて」

「い、いえ、そんな。一葵くんこそ《表情》で気付いたじゃないですか」

…表情？

『何だ、表情って？』

「一葵くんは、《心理思考看破能力》を持っているんですよ」

「辞めろよレイナ！。照れるだろー」

とか言っている割には嬉しそうな表情の一葵だ。

しかし、何だよ。その思考……何とか能力ってのは。

「ま、そんな大袈裟な事じゃねえけどな。ただ、人の表情を見ると、そいつの心境が解るんだ。」

例えば、目の動きなんかでも嘘か本当かくらいは分かったりする。」

だから俺の表情を見て異変に気付いた…のか。

一葵にそんな才能があつたなんて驚きだぜ。

「間違いなく犯人はヒナ親衛隊の奴らだな。ジンに怨みを持ってジユースに薬を入れたに違いない…。くそ、後でぶっ飛ばしてやる…！」

『一葵、気持ちは嬉しいが…それだけは辞めてくれ』

「な、何でだよ。ジンだって暴力は——」

『それは俺が俺の為に自己責任でやったから良いんだ。でも、一葵が俺の為にしてくれても、俺は喜ばんぞ』

「……だってよ…悔しいじゃんか」

駄目なんだよ、一葵。暴力だけは…。

俺も前に、友達——いや、親友と呼べる奴が因縁つけられて集団に

リンチされているのを知った。

もちろん、ブチ切れたさ。

そして、こっちも数人連れて仕返しに行ったんだ。

だが、通報されたのか何なのかは分からないが、現場に警察登場。

あえなく全員捕まった。

あきらかに悪いのは向こうだ。先に暴力を振ったのも…全部向こうが悪い。

でも、罪は同罪。

『先に手を出したのは向こうだろうがあ！』

「結果的に暴力を振った事に変わりはない。罪は同じだ」

警察はその一点張り。じゃあ俺達はどうすればいいんだ？
しくしてろってのか？
大人

ふざけんな…腐ってやがる、こんな世の中。

…と、まあ俺がグレた理由の一つがこれなんだ。

だから、一葵には俺の為に無理をしないでほしいんだ。

『そんな悔しがるなよ、一葵』

「でもよお……」

『バツカ野郎、俺がこのまま大人しくしてると思つか？』

「……………は？」

ああー！ もうこっちは完全にブチ切れてますよ。

何あのオタクども調子こいちゃってんの？ 俺を誰だと思っ
てんの？

ふふふ、怪我が治るのが楽しみだなー♪

この失態は血で精算してもらっからね♪ 覚悟してろよオタクど
も…

教訓その八『離れても、お前達は俺の生徒だ!』

「ジン、大丈夫か？」

『ええ、気分は大分良くなりました』

「そうか。じゃあ先生、お願いします」

クラス昇格を賭けたソフトボール決勝戦。そこで俺は『ヒナ親衛隊』の奴らに渡された薬が入ったジューズを飲んでしまい、目がぼやけた事から試合は放棄されてしまった。

強制的に救急車で病院まで運ばれた時は、さすがに危機感を覚えた。

病院までもが学校の敷地内にあるのには驚きだ。しかも、ヤス先生いわく、医者は皆一流のドクターばかりだとか…。

今更ながら、このヤクザの学校には驚かされる。

一体、どこまでが敷地なのだろうか…。

だってこのレベルはもはや『街』ですよ？

そして手際良い対応と治療を受けた俺だったが、それからが大変だった。せいぜい一日二日で回復するだろうと思っていたのが間違っていた。

一日でも早く学校に戻り、オタク共にこの失態を血で精算させよう

と考えていたのだが……。

めまいはするわ、吐き気はするわでスタボロ状態。

どうやらオタク共は容赦ないくらいの量をブツ込んでくれたみたい♪

そしてあれから一週間。俺は今、目に包帯を巻いている。まるで季節違いのスイカ割りみたいな格好だ。

そろそろ視力も回復しただろうと、今から包帯を外す訳だ。

ぶっちゃけ、めちゃくちゃ恐いですよ。もし何も見えなかったらどうしようとか、悪い考えが頭を過ぎる。

心配してくれて駆け付けてくれたダーツと行ってワ一の皆と、担任のヤス先生。

そして、医者が包帯を外していく。

恐る恐る目を開けている。

『……一葵』

最初に目に映ったのは、不安そうな顔の一葵だった。

「ジン、良かった。見えるか？」

『ああ、見えるよ。ヒナ、レイナ、マヤ、ヤス先生。皆、ありがとう』

皆の顔の表情が和らいたのが分かった。

久しぶりだ。太陽の光がこんなに眩しく感じるのは。

そして、太陽の光よりも眩しい皆の笑顔が、ここにあった。

『でも、ゴメン』

「…は？」

『俺のせいで昇格が…。俺は馬鹿だ。普通は気付くだろ。少なくとも違和感ぐらい感じるはずだ。なのに、俺が馬鹿だから、何も考えずに……あいつらイイ奴だなあ。とか思ってたジューズ飲んじゃって……』

「はい死ね。そんな事考えてるジン死ね。んでもってジンの状態に気付かない俺死ね。役に立たない能力自慢してた俺死ね！」

…一葵。

「ジんくんのせいじゃありません。私も、もう少し早く気付けば良かったですよね…ゴメンなさい」

…レイナ。

「ホントにゴメンね。アタシがあの人達に強く言えないせいで、ジんくんを辛い目にあわせちゃって…」

…ヒナ。

「心配すんな、ジん。オタク共はアタイが黙らせておいたから。あ、これ、ジんに」

…マヤ。

渡された紙に震えた字で『ゴメンなさいジん様。もうヒナちゃんをしつこく追い回しません。』と、書かれていた。

「本来ならこれは犯罪だ。ジんが望むなら、ペナルティー以外にも奴らを豚箱にブチ込む事だってできるぞ？」

…ヤス先生。

素で恐い事をサラっと言わないで下さい。

『奴らはペナルティーを受けたんですよね？　ならこれ以外の罰は必要ないと思います。……そんな事よりも』

「何だ？ 俺にできる事なら何でも言ってみろ？」

『俺は構いませんから……その……皆は昇格できないのでしょうか？』

「……駄目だな。その意見を認める訳にはいかん」

『お願いします！』

「駄目だ！」

『そ、そんな……』

「貴様一人だけがCクラスに残るなんて、許されると思っているのか？」

『……………え？』

「さっき校長から連絡が入った。会議の結果、特別にダーツと行つてワ―『全員』の昇格を認める！」

……………マジ？

『マジでえー！！？』

「おめでとう、おまえ達」

そう言つて、ヤス先生は笑った。そういえば、ここに来てからヤス

先生の笑顔を見るのは初めてだ。

「うひょー、やったぜ、ジン！」

一葵が飛び付いてくる。

俺はベットに寝ている体制なので、馬乗りの状態だ。

「おまえ達には何もしてやれなかったな。新しいクラスでも頑張れよ」

そうか…クラスが変われば担任も変わってしまうんだ。

ヤス先生の生徒じゃなくなる……のか。
なんか、寂しいな。

「ヤス先生、俺達は先生に大切な事をしてもらいましたよ」

一葵がベットから降り、ヤス先生の手を握る。

「嘘が下手ですね。俺達の昇格を無理矢理頼み込んだ張本人さん」

ヤス先生は、バレたか…と、照れ臭そうにしている。

一葵に嘘は通用しない…か。

「フツ、半年でも早く卒業できる事を祈ってるぞ、『俺の』生徒達。これは俺からの内緒のお祝いだ。今晚はバレないように勝手に騒げ」

ヤス先生は袋いっぱい酒とタバコを渡してきた。
うっひゃー、こりゃ今宵はお祭りですな。

「ありがとうございます、ヤス先生！」

そしてヤス先生の車に乗って、学校まで帰って行った。

もちろん俺達は、ヤス先生が言った俺の生徒という言葉の、『俺の』
を強調されていた事を聞き逃しはしなかった。

教訓その九、一未成年者の喫煙及び飲酒は法律で禁止されている？……うるせ

お酒とタバコは体に悪いですよ。ほどほどにしましょう。

教訓その九、一未成年者の喫煙及び飲酒は法律で禁止されている？……………うるせ

「それでは皆様、準備は宜しいでしょうか？」

一葵が缶ビールを片手に持ち、立ち上がって音頭をとる。

「バッチコーイ♪」

「いつでもどうぞ？」

ヒナとレイナは、アルコールの弱いフルーツ系の缶チューハイを掲げる。

「長つたらしい言葉はゴメンだぞ、一葵」

マヤはビンに入った酒をコップに注ぎ、それをコーラで割ったものを持つ。

『みんな準備できたみたいだな。じゃあ、一葵』

俺は一葵と同じく缶ビールだ。正直、酒は弱い方なのだが、ここは男らしくビールなのだ。

「それでは…ごほん！ えー…本日は、ダーツと行ってワ一の昇格祝いということで、盛大に盛り上がりましょう！ では、提供者であるヤス先生に、最大の敬意をあらわし……………カンパーイ！！」

…と、いうわけで始まりましたよ宴会が。ちなみに場所は俺と一葵の部屋だ。

ヤス先生から頂いたものはビール、チューハイ、タバコ。よってコンビニ（学校の敷地内にある）で、おつまみも買ってきた。

もう完璧でございます。

俺は酒は弱いものの、こういったお祭り騒ぎは大好きである。

ましてや、この学校に来てからというものの、一度もこういう機会がなかったためかテンションが高ぶっている。

俺達は乾杯の後、それぞれが持っている酒を飲んだ。

俺と一葵はそのまま一気飲み。缶を空けた後、女性陣からは『ヒュー』と声があがる。

どうやらテンションが高ぶっているのは俺だけじゃないみたいだ。

その後、セブンスターに手を伸ばす。今までは一葵にちよこちよこ貰いタバコをしていた。さすがに自分じゃ買えないから仕方ないと、一葵は気前よくくれるが、やはり遠慮がちになってしまう。

自分の分。そうして吸える事が嬉しい。

セブンスター独特の味が、喉を刺激する。うーん、たまらん。

そして、その後それぞれが自由気ままに飲んだり食ったり喋ったり。

テーブル一面に広げたスナック菓子やつまみを頬張りながら酒を飲む。

これは最強の贅沢じゃ。

「一発芸いきまーす！」

顔が赤くなり始めた一葵が突然叫ぶ。

「いーぞー、かつちゃん♪」

「一発の一発芸……はい、すべりましたあ。ツルツルでございまーす！」

懐かしいね、そのネタ。むしろ一葵を一発と呼ぶ奴は最初からいなかったぞ？

「滝登り！」

一葵の一発ネタとは、口から吐いたタバコの煙を、鼻の穴に吸い込ませるというものだった。

口から鼻へ昇る煙が滝登りに見えるから、この名称になっただけらしい。

「すごーい♪」

それを見たヒナは大喜び。まるで小さい子供のようにはいでいる。いや、むしろ幼児体型だから日頃から年下にしか見えないが…。

「ジンも何かやれよー」

ほめられた事が嬉しいのか、それともヒナに『かつちゃん』と呼ばれた事が嬉しいのか、一葵のテンションは普段より遥かに高くてうざかったので殴りたいです。

しかし、パスを出されたからには答えなけりやならんな。

『よっしゃ、煙突！』

俺は吸っていたタバコを逆にくわえた。

「あ、危ないよジンくん！」

そう、つまり火の点いている部分が口の中に入っている状態だ。

それを見たヒナが、心配そうに見てくる。

そっか…ヒナは《世間知らず》だからな。何せ普通の子のように遊ぶ事ができなかったのだから。

何か子供を騙す大人って感じがするが…ヒナからかうの面白れー。

未だアタフタしてるヒナの前で、俺は逆にくわえたタバコに息を吐く。

すると、本来くわえるフィルターの部分から、白い煙がモクモクと出てくる。

まるで煙突から出る煙のように。

「お……？　　すげー」

喜んでくれました。

レイナもかなり驚いているようだ。

まあ、この二人は特別だからな。こんな馬鹿なまねする奴、周りに居なかったんだろう。

ちなみに《煙突》は初めてやる時は勇気がいります。
というか危険なので真似しないでね。

『はい、じゃあ次はマヤ。タバコで何か技やってよ』

見た所、ヒナとレイナは非喫煙者だろう。さつきから俺と一葵が旨そうにタバコを吸つてるところを信じられないような顔で見てきたし。

マヤは喫煙者だろう。まあ外見だけで判断するのは良くないが…。

俺はマヤが女の子という事を考えて、一応メンソールのタバコの箱とライターをマヤにポイッと投げる。マヤは反射的にそれを受け取ると、少し困った表情を見せた。

……しまった、既にネタ切れか？ タバコの芸なんて煙突と滝登りぐらいだからな……。

「……ああー…その…」

やはり、かなり迷ってます。素直にネタ切れと言えば、それが早いだろう。

だが、マヤにはそれができない理由があった。

ヒナがね、すっげえ目を輝かせて見てんの。

今のヒナに《もうネタないよ》なんて台詞は、子供に《今日おやつなしよ》の破壊力と同じだろう。

ガッツだ、マヤ！

「ジン、ちょっとこっち来い！」

そして、なぜかマヤに隣の部屋まで引きづられていく俺。

どうしたって言うんだ、一体…。

教訓その十、つけないのは駄目だ!! (前書き)

今回は一葵視点です。

教訓その十 つけないのは駄目だ！！

マヤとジンは隣の部屋に行ってしまった、俺、レイナ、ヒナは取り残されてしまった。

うーむ…それにしても内容が気になる。気になりまくる。

ジンの野郎は、俺が今まで出会った男の中で『鈍感部門第一位』の席に君臨する奴だ。

目や行動を見ていれば、俺には分かる事だが、ジンには少し天然の部分がある。

それで女性のアプローチに素で気付いていない。ああ勿体ない…。

男の俺から見ても、ジンはカッコイイと思う。言い寄る女も多いだろう。

美形ではないものの、顔のパーツは整っており、喧嘩で鍛えた身体も筋肉質。一際目立つ金髪の髪は、目が隠れる程長い。

不祥事が原因でこの学校に来たからには、自己中心的な性格だと思っただが、実は優しい。男にも女にも気がきく奴だから、性別問わず人気があるはずだ。

………だが。

やはり見た目が恐い分、初対面では声をかけにくい。

爽やかな笑顔を振り撒いていれば、まさにジンはパーフェクトヒーマンだ。

俺は何となく思う。ジンの不祥事は自分勝手なエゴではなくて、本当は友達の為なんじゃ……………。

「むー。何か話してるみたいだけど聞こえないよー」

ヒナが壁に耳を付けている。こやつ、盗み聞きする気か！？
その行動には賛成！！

「ヒナ、辞めなさい。何を話していようが、ジン君の自由でしょ！」

「えーっ。そうゆうレイナだって盗み聞きしてるじゃん」

レイナもヒナと全く同じ格好をしている。

「わ…私には…その……委員長としてクラスメートの不純な行為を見逃す訳にはいかないからだもん！」

ほほほっ、レイナくん。君は僕の心理思考看破能力を舐めているね。嘘がバレバレだよ。本当は不安でしかたないから居ても立ってもいられない…が答えだ。

よし、俺も気になってきた。

「一葵くんは駄目」

「なぜ!？」

「なんか目付きが嫌らしいから」

「ふふふ、お二方。これが何か分かるかい？」

俺は二人を手駒に射止めるため、ある必殺のアイテムを取り出した。

「盗聴器」
♪

「何してるのー一葵くん！ 早くセッティング！」

よし、大成功。

なぜ俺が盗聴器なんぞを持っているかは深く考えないでくれ。別にやましい理由ではない。

情報屋として、そして心理思考の勉強として、仕方なく…… 本当に『仕方なく』使っているだけだから。

そもそも俺の能力は、本当に特別な力なのだろうか？

単純に、異常に優れた『ただの感』という可能性も否定できない。

能力に自覚が生まれたのが中学一年生の頃だった。

俺は小学生の頃から始めた野球を続け、中学校に入っても野球部に所属していた。

小学生野球は、ピッチャーが投げる球種はストレートのみというルールがあったが、中学生になればカーブやフォークなどの変化球を投げる事が認められている。

これは、まだ身体の作りが幼い小学生が変化球を投げれば腕を故障する可能性があるからだ。

そして、新入生の実力を量る試合に出場した時、異変に気付いた。

ピッチャーは先輩が担当したのだが、何と言うか……分かるのだ。先輩の心境、球種、何を考えているか、全てが手にとるように分かる。

そして自分で言うのも何だが、俺は初心者ではない。小学生の頃から継続させた練習は決して嘘は付かなかった。

理想的なバッティングフォームを身につけたからには、読み通りに来る球を打ち返す事に難はなかった。

だが、俺はそれを秘密にしてきた。

気味悪がられるかもしれない。それが怖かった。

俺がこの学校に来た理由。それはまさにこの能力にあるのだが、それはまた別の機会にでも…。

俺は盗聴器から伸びた線の先端を壁に取り付ける。
そして三本のイヤホンを用意し、それぞれに渡す。

まずい、余りにも手慣れ過ぎていて二人は若干ひいている…。

「一葵くん……」

「まさかとは思うけど、私達にもそれを……」

「……お、ジンの声が聞こえるぞ！」

「ホント！？」

……セーフ

さて、ようやくジン達の会話が聞けるぞ。

『そうだ、まずはこいつをくわえて…』

ん？ ジンがマヤに『何か』をすすめているようだが……。

『はっ、初めてなんだからな！　　うっ、上手くできなくても笑うなよ！』

それにマヤは恥ずかしそうに返事をする。

「レ、レイナ？　　こっ、これってもしかして…」

「いつ、いえ、決め付けるのは早過ぎるわ！」

そっ、そうだよ、うん。

ジンはそんな事をマヤにさせるわけ……。

『違う違う、マヤ、齒を立てちゃ駄目だよ』

あの野郎『フェラーリ』させてるのかー！！

「そんな…ジんくんの事…し…信じてたのに…」

ジンの台詞を聞いたレイナは、全てを悟ったようで、涙を流し崩れ落ちる。

「レイナ……もー、ジんくん許さないよー！」

「待つんだ、ヒナ！ 頼む…ジンを…自由にさせてやってくれ」

「で、でも…」

「きつと、ジンは溜まってるんだよ…。しかも俺と同じ部屋だ。きつと…ジンは…」

「そっか……思春期の男の子だもんね…」

ヒナは苦笑いをし、部屋への突入を諦めた。
ただ、その顔からは怒りよりも悲しみが伺えた。

『マヤ、ゆっくり…ゆっくりで良いから、くわえて…吸ってみな？』

『う、うん。……うえ。苦いよ…変な味がする…』

『初めは誰でもそうだって。慣れれば快樂になってくるから』

……………あの野郎。

やっぱり『カプリコ』させてやがるー！

『さて、そろそろ本番だ』

『もっ、もう!?!』

『だってマヤ、いつまでもくわえてるからさ…濡れてきてるだろ?』

『……………うっ、うん』

『しかもそれやりすぎると先っば黒くなるぞ?』

やばいやばいやばい!

何がやばいって…そりゃ何つつかもっお前らやばいよ!

ってかこの小説やばいよ!

間違えるとノクターン行きになっちゃうよ!

『じゃ…………私からは怖いから…ジンから…な?』

『仕方ねえなあ』

体位か!?

貴様ら体位の話をしてるのか!?

『あ…あれ? 付かない…この、つかねえな畜生』

ジンくん、君はナニに何を付けようとしてるのです?

それは、もしや『アレ』ですか?

安心安全を誇る最強の輪つかですか？

『付かないな…まあ、いいや』

よくねえー！ー！！！

「ヒナ、突入するぞ！」

「え！？」

「このままじゃジンは人として過ちを犯す事になる！ レイナもいつまでも泣いてないで、行くぞ！」

俺達は手遅れになるまえに、隣の部屋を突入することを決意した。

あわよくば、マヤのイヤーンな姿が見れてニヤニヤ……いや、今のは忘れてほしいです。

とにかく、『つけない』のは駄目ですぞ、ジンくん。

俺は意を決すると、ドアを開けた。

「ジンてめえ何考え……て……なんだ？」
『かつ、一葵…皆！？ マヤ、どうやらバレちまったみたいだな』

な…何て事だ…。

俺達の予想は華麗に裏切られた。いや、この場合は良かったと言っべきか…？

ジンがマヤにくわえさせていたモノ…それは……

「タバコ？」

『ああ、何でもマヤの奴、タバコは吸った事ないんだとよ。それでヒナやレイナに、《普段は大きい態度なのにタバコも吸えない》って思われたくなかったんだって。馬鹿つつつか…マヤも可愛いトコあるよなあ……いてて！』

「うるさい！ それ以上言うなー！」

初めてなんだから笑うなって……

そ…そういう事？

マヤのくわえたタバコを見ると、フィルターの部分に歯を食い込ませたような形跡があった。

歯を立てるなどは…そういう意味ですか…。

「ぬ…濡れるとか黒くなるって…？」

『ああ、それはマヤがタバコをくわえたままで、いつになっても火
い点けないからさ。フィルターの部分が唾で濡れちゃって……ほら、
メンソールって、フィルターが濡れると先っぽが黒くなるだろ？』

こ……こんなオチなのか？
そうなのか？

「じゃ…付ける付かないって……」

『このライター点かないんだよね。……ってか、何で会話を知っ
てんの？』

は…はは…ははは。

「ヒナ、レイナ、どうやら俺達の勘違いだったみたいだな…」

「ええ」

「そだねえ」

「まさかテメエら盗み聞きしてやがったのかー！？」

「マヤちゃんが怒ったー」
♪ 逃げろー♪

『勘違いって何だ？ なぁーレイナー。何を勘違いしてたんだー
？』

「そつ…そんな事私の口から言えるわけじゃないじゃないですか！」

さすが鈍感男だ。その発言、わざとだったらセクハラになるぞ。

ふふふ、まあいい。

ジンよ、お前が一線を越えなくて良かったぞよ。

これから友達でいられそうだ。

教訓その十一ゝ女の子の買物長い！（前書き）

訂正しました。

・ 日曜日↓土曜日

・ 兄弟↓姉妹

・ 5時間↓4時間

教訓その十一　女の子の買い物は長い！

打ち上げの次の日、目が覚めたのは午後２時を回ってからだった。昨日飲み過ぎた…頭がガンガンする。二日酔いってやつか？

しかしここで倒れては、なめられる！

俺はなめられたくないの、気合いで立ち上がった。

まだ一葵は寝てるようだ。まあ学校は休みだから、のんびりしていても良いよな、うん。

さすがにこの学校でも、毎週土曜・日曜は休み。今日は土曜日なので、二連休だ。最近は慌ただしかったり慣れなかったりで、俺はまだこの学校の事をよく知らない。

特に《街》については、まだ詳しく回っていないのだ。

広すぎる敷地に建てられた店。少し探検してみたい気持ちもある。

一葵でも誘って、案内してもらおうとするか。

『一葵ー、起きろー。買い物でも行こうぜー』

幸せそうな顔で爆睡している一葵の体を揺すってみるが、起きる気配は一向に感じられない。

「うあー…あと１０時間…」

どんだけ寝る気だよコイツ。

『一葵なめられるって！　早く起きろよ』

「サターンか！？　サターンになめられるのか！？」

どうやら一葵は睡魔がサターンに見えるらしい。

『あ……あぁ、そうだ！　今もサターンがお前の頭上でほくそ笑んでるぞ！』

「くそ……！　閻魔の女に手を出して《サターン》から《ジョーカー》に降格された奴なんか……なめられてたまるか……！」

そうだ、いいぞ一葵！　そのまま起きるんだ！

「……え？　うん、……は？　マジで！？　腹いせにアサガオの前に仁王立ちして朝日を浴びせなかった？　お前マジかよ……ぐうう」

……。

えええええ！？

大丈夫かよ一葵？　何か俺はお前が凄く遠い世界にいるような気がするよ……。

しかも寝やがった。どうやら、一葵はジョーカーになめられたらしい。

今気付いたら、俺って男友達って一葵しかないんだもんなあ。

べつ、別に淋しくなんかないんだからー！

…誰なんだ俺は。

よし、俺も腹いせに花の前で仁王立ちして日光を浴びせないようにしよう。

とりあえず一葵に腹が立ったので、暖房の設定温度を最大の30。に設定してあげた。

はっ、口の中の水分を奪われるがいいさ！！

――――

寮に南側にある花壇。季節はまだ冬だというのに、なぜか花が綺麗に咲いている。

うーん…何て名前の花だろう？ 見た事はあるんだが、いかなせん俺は花に関しては無知である。

ふふふ、せっかく咲いている所悪いんだが、君達に太陽の光は拝ま
せん！

俺は花達に日影を作るように立ち、腕を組んでいる。

ああ、何て淋しいヒマ人なんだろう…。

お花さん達、水はいるかい？　ちよつとしょっぱいかもしれない
けど、俺の体内から搾り出してあげるよ。

「……ジン。何してるの？」

涙で潤んだ瞳で、声の主の方向に振り返る。

『ユキ？』

「何してるの？」

ふっ、花に日光を浴びせないように仁王立ち……

あ、やばい。確か、この花壇を作ったのはユキだった気がする…。

『み、水でもあげようかなあ…なんてさ』

「そう。私も」

ユキはそう言って、水が入ったゾウさんのジョウロを前に出す。

『ユキは真面目だよな』

「そう」

『ああ、頻繁に水やりしてるのか?』

「うん。昨日はマヤが。だから今日は私」

マヤ…そうか、アイツも花が好きだからな。あれからも手入れをサボらないとは、マヤもまめな奴なんだな。

『でもさ、冬の寒い時期に、そんなにたくさん水をやって大丈夫なのか?』

まあ、ユキもマヤも花に詳しいんだろうが…

「……………さあ?」

知らねえのかよ!

萎む、萎んじゃうってユキさん。

「よし」

何が良いのか分からないが、とにかく良いのだろう。

ユキはジョウロに入った水を全てやると、立ち上がった。

「それじゃあ」

そして、とことと歩き出して行った。

あ、そうだ。ちょっと買い物でも付き合ってもらおっかなあ。

『ユキ、この後なにする予定？』

「予定は未定」

『じゃあさ、買い物付き合ってくんない？ 俺、まだどこに何があるのかとか分からなくてさ』

「構わないよ」

ユキから承諾を得られました。今になって後悔したけど、俺は今日一日、必要最低限の言葉しか喋らないユキと会話がもつだろうか…？

とりあえず街に向かって歩き出す事にした。

「何が欲しいの？」

おお、ユキから話題を振ってくれたぞ。何だ、俺の心配のし過ぎかそう、そうだよ。ユキだって普通の人間だもん。何も変わった事なんてないんだ。ただ、人より口数が少ないだけ。話題があれば喋るし、問い掛ければ答えてくれる。

当たり前な事だよ。

『うーん、とりあえず春服が欲しいかな。家から贈られてきたのってほとんど冬服だからさ』

「そう」

………前言撤回、会話終了。

『どっ、どこかオススメの店とかある？』

「……………」

考えてるのはわかるけど、何か返答を下さい。

こっとなったら話題出しまくってやるぜ。

とりあえず褒め殺しだ！

『その服どこで買ったの？ 可愛くて似合ってるよ』

「レディース店だけど？」

僕の服はそこにはないですね。

そっぴや、今になって気付いたけど、ユキの私服を見るのは初めてだな。

服装は小柄な体格と、幼い顔立ちにマッチしている。

無理に大人びた雰囲気を出しているのではなく、セクシーよりも可愛い派だ。

下は、名前の通り雪のように白い足を膝上から露出するスカート。

上は手触りが心地良さそうなモコモコのジャンバーを羽織っている。ジャンバーのチャックは全開に開け、その下に着ている黒のシャツには白と紫のラメが入っている。

そして気付きました。ユキ以外と胸あるな…。普通、ヒナのような幼児体形じゃペツタンがお決まりなのに…。

前に一葵が言っていた。マヤはE。レイナはDだと…。どこで調べたのかは知らないが、とりあえず一葵は気持ち悪いね。

「……」

突然ユキが立ち止まり、ある店を指差した。

《W I N P S》と書かれた看板を下げた店。窓越しから店内の様子を伺うと、ズラリと並ぶ洋服。

一先ず、ユキが選んでくれた店なので中に入る事にした。

明るいうッドが漂う。とりあえず気に入った服はないかと、ウロウロする。

『あ』

「あ」

気付いたのも、声を上げたのもほぼ同時。なんと、店内にはヒナがいた。

『偶然だな、ヒナ』

「そだねー」　一葵くと来たの？」

『いや、一葵はまだ寝てるからー』

「……………ん？」

ヒナの存在に気付いたユキが、ひよっこりと顔を出す。

「あ、ユツキーじゃん」　……………つて、え？」

『ああ、ユキに買い物付き合ってもらったんだ』

「そつ、そうなんだ。ユキの事誘ったんだ…」

ん？　何か変な事でも言ったか？　ヒナの表情が曇って見えるが…。

「姉さん、その服より、こっち」

ユキが、ヒナが手に持っている服を取り上げ、別の服を渡す。

「ホント」　ユツキーが言うなら間違いないかもね」

ユキとヒナ、二人が並んで喋っていると超和むんですけど。

……………ん？

姉さん？　さっきユキはヒナの事…姉さんって言った？

『え？　二人って姉妹なの？』

「あはは、違うよー。アタシとユキは従姉妹なの。アタシが小さい頃って、お盆と正月の時しか同年代の子と会わなかったし、その子達って、レイナとユキだけなんだ。それで仲良くなって、ユキはアタシの事姉さんって呼ぶんだよね」

「私より一つ偉い。だから、姉さん」

レイナとヒナとユキは従姉妹なのか…。

なるほど…しかし、ヒナの幼少時代の話は想像がつかないな…。

この明るい笑顔の裏側には、何が隠されているのだろうか…。

つついて確かめるつもりはないんだが、やはり気になるのが人間の性。

でも、きっと辛い過去なのだろうから、俺は言葉を飲み込んだ。

過去に何があるうが、ヒナはヒナ。そして、ユキもユキだ。レイナもレイナだ。

何も変わらない。俺は、今のままの三人でいい。

「お待たせ、ヒナ……あ」

そこに、ヒナと一緒に来ていたと思われるレイナが現れた。

うおお…レイナの私服姿、めっちゃ可愛い…。おっと、思わず見とれちゃったぜ。

格好的にはユキと似ている。下はスカート、上はジャケット、そしてチャックを開け、中にはシャツ。

うう…胸が強調されておる…。

「ジッ、ジンくん」

『よお』

レイナは俺に気付くと、軽く頭を下げた。手には紙袋。きっと、さっきまで会計をしていたのだろう。

「レー姉、その服だと、こうした方が良い」

ユキはレイナの事をレー姉と呼ぶのか…。

ユキはレイナのジャケットのチャックを閉め始めた。

あーあ……いや、何考えてんだ俺は。

「そう？　でも、ユキちゃんがそう言うなら間違いないね」

「そだねー」　　ユッキーはファッションセンス抜群だからね」

ふむ、そうなのか。では、俺の服選びもユキに協力してもらおうとするか。

俺は自分なりに気に入った服を手取る。

春服を買いに来たとは言え、まだ寒い事を予想しての少し厚めの生地にした。

下はジーパンを何着か持っているので、買う必要はない。

シャツと、その上に着るやつ、まあ俺なりのファッションセンスってやつで選んだつもりだ。

『これとこれだ。ユキ、どう？』

「……びみ」

びみ！？ 美味？ それとも微妙の略？

「下は？」

『あ、ああ。下は持っているジーパンに合わせよう』

「ジーパンってどんなの？」

『普通に薄い青っぱいので、膝にダメージが入ってるのかな』

まあ膝のダメージは、実はオシャレであらかじめ入っているのではなく、バイクで転んだ時に擦りむけたやつなんだが…。

良い具合にダメージがついたので、男の勲章として、そのままにしてたりする。

「……………。シャツはそれで問題ない。でも上はこっち。あとこれとこれも…」

服の事になるとどうだろう…？ 無口なユキが急に輝き出したではないか。

しかも、俺みたいな他人の為に、選んでくれている。

気が付くと、ユキが選んだ服をカゴいっぱいを持っていた。

「きっと全部似合う」

『そっ、そうか？』

そこまで言われちゃ、買わないわけにもいかないな…。

そのカゴをレジに出した。

「……………円でーす」

うーん、今月ピンチ

「ありがとございましたー」

店員さんの優しい声に見送られ、俺達四人は店を後にした。

「じゃあ、私はこれで」

『帰るんだっただら送ってくぞ?』

「いい。この後、寄る所ある」

『そつ、そうか。今日はサンキューな、ユキ。おかげで良い服が手に入ったよ』

かなり予算オーバーだけど、それはおいといて…。

ユキはコクリと頭を下げると、スタスタと歩き出した。

「ジンくんはこの後どうするの?」

『いや、特にやる事ないけど?』

「私達、これから買い物行くんですけど、良かったら一緒にしません?」

うむ、この辺りに何かあるかもまだよく分からないし…部屋に戻っても一藝はまだ寝てるだろうし…。

『おつ、良いなら一緒にさせてもらおうかな』

—————

『ただいまー……』

「おっせえーよジン! ところで誰と何やってた!?」

部屋に戻ったのは夜の8時。かれこれ4時間程、彼女達の買い物に付き合っていた。

女の子の買い物って長いよね。別にヒナもレイナも、買う物を悩んで長くなった訳ではない。

次、次と欲しい物を買いきり、気が付けば手荷物いっぱい。

『重そうだから俺が持つよ!』

調子乗らなければ良かった…。

もう膝も腕もプルプルです。

「俺の事放置しやがって! まあいいや、俺起きたのついさっきだし。たくさん寝たから夜寝れないし。よし、今から何やる?」

勘弁してくれ…。俺は寝るぞ。

その夜、寝ようとした俺の横で、一人で騒いでる一葵がつるさくて殴った事は言うまでもない。

ヒナ外伝『名前』と呼ばれたい！（前書き）

ヒナの過去の話となります。『高校生六人』とは、チヨメディーに出てきた奴らですが、読んでなくても問題ありません。明くんのキヤラや、やり取りが気に入ってくれた方は読んでもらえたら嬉しいです。

他にも一葵、ユキ、レイナ、マヤの過去の話も書いてる途中ですので、ちょこちょこ投稿するかもです。

ヒナ外伝『名前』で呼ばれたい！

「No:15、今回の任務は大島家の財宝を手に入れる事だ」

『はい。現在の状況は？』

「すでにエージェントを送つてある。現在、大島家には長男が一人。両親は海外にいるため、今が絶好のチャンスだ」

『了解しました。お父さ…』

「父と呼ぶなと言つただろう！何度も言わせるな！」

『は…はい。すみません』

「では早速行つてこい！」

『…Yes, Boss』

はあ…私は何の為に人生を送っているのだろうか。

父が組織の長なため、幼い頃からそうゆう教育を受けてきた。

私は同年代の子達と同じ様に、外を走り回る事も、買い物、カラオ

ケ、デート…それらの行動は皆無とされていた。

毎日毎日、勉強や肉体強化。《トレジャーハンター》なんて格好良い事言っておきながら、結局はただの泥棒じゃない。将来的には人を危める仕事になる。

まだ17歳。年頃の女の子なのに…私だって学校行きたいよ。

どうして？ 私は周りの子と違うの…？

パパからちゃんと《ヒナ》って名前で呼ばれたいよ…。

ナンバーで呼ばれるのなんてヤダよ…。

でも、パパ…いえ、ボスは本名は外部に漏れる危険があるから駄目だ、なんて…。

でも、私は泣かないもん。

頑張って、パパに認めてもらうんだ。

そうすれば、注目してくれる！ もっと私を見てくれるかもしれない！！

ミスは許されない、今回の任務。

いつも通り、コンパクトパソコン、針金、スタンガン、煙玉を入れた鞆を持ち、大島家に向かった。

――――

…大きい。それは予想をはるかに上回る豪邸。組織の基地と同じく
らしい広さを一般人が持っているっていうの？

これだけの豪邸だ。セキュリティも凄いのだろう。

でも大丈夫。エージェントが上手くやってくれている事を信じる。

私は高い塀を乗り越え、庭の状況を確認した。

…これまた広い。

綺麗に整った人工芝は円を描き、その中心に噴水。
草木が絶えず見えているだけで癒される。

――私もこんな家庭に…

いや！ 仕事…任務に専念しないと！

そんな事を考えている場合じゃない。

最近はブルーな気分になる事が多い。青春の一つも味わった事がな
いからだろうか？

塀を乗り越えようとした時、表門の前に六人の高校生が見えた。

表情から見て、かなり仲が良さそう。…羨ましい。

しかし、その高校生に視線を移したのが間違いだった。

どうやら、対人センサーに触れたらしく、屋敷にブザーが鳴り響いた。

私らしくない…こんな単純なミスを…。

いくらエージェントの手が回っていようと、こんな一方的な展開では《あの手》を使えない。

まず非がある私を、ためらいなく捨てるだろう。

…どうしよう。

「侵入者発見、射撃班、重装歩兵は表門へ」

そんな放送さえ流れている。

――終わった。私の人生は、華咲く事なく、終わりを告げようとしていた。

「てめえリョータ！ お前の地球儀が武器として見られてんぞ！
？ どうすんだよ！？」

「仕方ない…みんな、先に行ってくれ！」

「って、漫画みてえな事言っな！」

「すいません、僕達は友則君の友達で…」

どうやら、ブザーを鳴らしたのが、勝手に門を開けた高校生のせいになっているらしい。

間一髪、セーフ。

出足からこんなに汗をかいたのは初めてだ。

護衛が高校生に意識を移している間を見計らって、私はなんとなく屋敷に侵入する事ができた。

さて、エージェントが一階の角の部屋の鍵を開けておいてくれる筈だ。

…よし、開いている。

中に入ると、そこは…たぶん、同年代くらいの女の子の部屋だと思う。

ぬいぐるみで飾られたベッド。主にベースとなる色はピンクでハート形の物を所有している。

クローゼットを開けると、高級そうな素材のドレス。

それに触れてみた。

…着てみたい。

タンスの引き出しを開ければ、可愛らしい下着が綺麗に収納されている。

今の下着とは…こんなにも可愛らしいのか…。

生活に必要な最低限の物しか与えられない私は、上下常に白の下着しか着けない。

普通の女の子なら、ここまでじゃなくても、ファッションに気を遣ったりするのだろう。

お気に入りの服を着て、遊びに行くのだろう。

化粧だって楽しむだろう。

綺麗に、可愛くなっていく自分が嬉しいだろう。

好きな男の為に、外見から努力するだろう。

…私は？

黒のパツパツした、動きやすいスーツ。

化粧もした事がない。

髪型も気にしない。クセのない直毛だから、なんの手入れだってしていない。

この違いって…。

全身鏡に映った今の自分の姿が、なんだか悲しくなった。

『着てみたいなあ…そうだよ！この格好じゃ、もし人に見られたら怪しまれるもん。ドレス姿なら…うん、そうそう！着ちやえ！』

多少強引な理由を自分に押し付けて、着てみる事にした。

スーツを脱ぎ、下着姿になった私。

――しかし、その時…

「まずはこの部屋からだあゝ！…って、うわあゝお…メツチャラツキー！！」

『…え？キヤー！』

さっきの高校生が部屋に入ってきた。

やだ…見られたくない。

…こんな、情けない私を。

慌てて近くのリモコンのボタンを押してしまった。

すると、高校生が居た位置の床にパカッと穴が開いた。

「――落ちちやう！」

私の反応よりも早く動いたのは、落ちかけた高校生の友人だった。

「明あ……」

「た……匠い！俺が落ちたら……いや！主人公は死なないって決まってるよな、うん」

なんか変な事を言っている。今時の男のコってこうなのだろうか？

匠……くんに手を掴まれ、なんとか耐えているけど、あんなのは時間の問題。いずれ落ちるわ。

私の事を見られている訳だし、このまま落ちてくれた方が都合良い……

「匠！スマン！」

「え……？ちよつ……明！てめええええ……」

グイッと手を引っ張り、その反動で床に手が届いた明くん。……でも、代わりに引っ張られた匠くんは落ちてって……

……えええええ！！！？

この人、自分が落ちるのヤダからって、助けてくれた友達身代わりにして自分助かったー！！

「ふう、危なかった」

そしてケロッとしてるわコイツ。

『あの…今の人は友達じゃ？』

「ああ、アイツは…まあ…こうゆうキャラー!!」

ウィンクして私に向かって親指を立て、グットのパーズをする明くん。

いや、…ええええ!!???キャラ? それだけで友達見捨てるの!?

ああ、私、今時の高校生が怖いです。

「あ、最初六人だったけど、皆落ちちゃってさあ…ってか君だれ?」

むしろお前が誰だよ!

何自分助かって安心してんの!?

名前…私の名前…?

本名は駄目だ。誰か、誰でも良い。名前を名乗らなければ…。

誰…名前って?

友達の…?

いないよ、私には…。

いや、居た…。

『私は《ユキ》…友則お兄ちゃんは外出してますよ?』

こめん、ユキ。名前借りるね。私には、ユキとレイナしか、女の子

で知ってる名前ってないの…。

しかも妹って口からでまかせまで…。信じてくれるかな…？

「妹…？」

首を傾げる明くん。ヤバイ…妹がいないって知っていたら…バレる。

「…………グ、ググ」

メツチャ肩プルプルいってますけど？

怒りのオーラが出てますけど？

あ、これバレましたね。

「ちつくしゅ…こんな可愛い子から《お兄ちゃん》って…ああもう！《お兄ちゃん》って！羨ましいなチクショオ…！」

…どうやらバレてないみたいです。

「…と、それはまあ良いや。それより、可愛いお嬢さん。よろしければ、この迷える子羊めに、光と言う名の道案内をしてくれないかい？アト、ボクノコトもお兄ちゃんツテヨンデ！」

……最初から最後まで変過ぎて何だか分からない。

『え…と？　なんですって？』

「だからあゝ、君可愛いね。僕の事もお兄ちゃんって呼んで」

友達助ける気ねえー！！

…って、え？ 今…私の事、可愛いつて？

『可愛くないです…よ』

「ホラ、見てみなよ！」

明くんは全身鏡を指差した。そこに映ったのは、いつの間にか、ちやっかりドレスを着ていた私だった。

『え…コレ…ええええ！！？？何着てんの私？馬鹿みたい！』

「あの…もしもし？」

はっ…あまり不審な行動は控えないと…。

『失礼しました。お友達は第二の部屋です。付いてきて下さい』

この屋敷の図形をあらかじめ知っている私には、地下さえも記憶している。

これで屋敷の住人と思わせる事ができたはずだ。

しかし、バラバラになった高校生はどうする？

任務遂行に最も邪魔な存在だ。

屋敷を守る兵なら、躊躇わずに攻撃できるが、何の関係もない一般

高校生を巻き込んで良いものかどうか…。

「…ちゃん！…ユキちゃん！」

…！！

『はい！！』

いけない…考え事をすると周囲の音が聞こえなくなるのが悪い癖だ。

「この扉、鍵が掛ってるみたいだぜ？」

『はい、まかせて下さい』

私は鞆から針金を取りだし、鍵穴に差し込んで開けてみせた。

中に入ると、暗くて何も見えない。地下に何かあるかは、まだ未調査だったのが不味かった。

遠くから何か光が見える。…四つも。

しかも、それが徐々に近付いてくるではないか…！

『あれは…一体』

不思議がる私の背中に、グッと重みが掛った。

『え？何？？』

よく見ると、明くんが気絶していた。

『ちよつと！…ねえ！』

まさに最悪の事態だ。

敵はいつ明くんを襲ったのか…この私ですら気配を感じなかった。

しかも四つの光は、すぐ目の前まで迫っていた。

「……明？」

光の正体はさっきの高校生だった。携帯電話の明かりだったみたいだ。

『気を付けて下さい！…何かいますよ、ここ！』

高校生を傷付けるわけにも行かない。ささいな正義感が私を煽った。

「大丈夫だよ。明は怖いのが苦手だから、勝手に気絶したんだろ」

表門で地球儀を持っていた人…確かりョータくんと言ってた気がする。

『な…なんだ、そうですか…』

今思えば、これはチャンスではないか？

幸い、明くんの気絶で高校生の足止めはできた。

なら、この地下室に閉じ込めれば……

「えつと…君は？」

『あ…私は…ユキです。友則の妹です』

「へえ…可愛いんだな…いててて」

「あんた…私が居ながら女の子口説く気？」

「誤解だつて舞！」

この人達はカップルだろうか…？

それにしても、仲が良さそうな人達…。羨ましいなあ。

「んで、ユキちゃんはさあ…」

「マジ！？ウチと気が合いそうケロ」

「じゃあ、今度はユキちゃんも一緒に……」

『フフ…アハハハ』

………はっ！！

私…今、笑った？

何だろう…この人達と喋ってるのが、凄く楽しい…。

「う…ん」

「明、やっと起きたか」

あ、明くんの事忘れてた。

「皆無事だったか!？」

「てめえが言うな!」

五人の高校生が無事を確かめ合い、また笑みがこぼれた。

羨ましいなあ。

「あとは匠だけだな、じゃあユキちゃん。案内よろしく」

私は頼られている…？

いや、違う。

利用されているだけかもしれない…。

任務の邪魔だ。

この人達は今ここで…。

早くしないと…もっと一緒に居ると…仲良くなってしまいそうで…
私は…それが逆に怖い。

『はい、まかせて下さい!』

…私は笑顔で言った。

――――

匠くんの部屋に向かう途中。組織からメッセージが届いた。

《準備完了》

それは高校生と別れを意味していた。

『ここが…匠くんが居る部屋です』

…楽しい時間を…ありがとう…。

くガチャンく

皆が部屋の中に入ったのを確認すると、私は部屋のドアを閉め、鍵を掛けた。

「おい！何の冗談だよ！」

明くん、ゴメンなさい。

やはり、私とあなた達では住む世界が違うの…。

「さよなら」

そう一言言い残し、私は任務に戻った。

すでにエージェントが屋敷に乗つとる計画を進めていた。使用人全てを味方につけた。

後は友則を叩くだけだ。

『友則はどこに?』

「地下室だ!全員そこに集合せよ!」

地下室? さつき高校生を閉じ込めた所じゃない。

不安を胸に戻つてみると、鍵が外されていた。

『嘘でしょ…パスワードを掛けたのは私なのに…』

ありえない…友則にハッキングされたとしても言うの?

この地下室のドアは特殊で、鍵はコンピューターで八桁の暗証番号を入力して解除するタイプだ。

私が開けた時はパソコンでハッキングした。

それは小さい頃から訓練を受けた私にだけできるものであり、友則のような高校生に成せる技じゃない。

室内には、明と友則以外は、床に倒れていた。

…なんで? なんで倒れているの?

『…毒ガス？』

かすかな残り香に気付いた。間違いない、これは有毒のガスだ。きつと、室内に仕掛けられた罠だろう。

見た所、明くんは無事の様だ。…あの人、本当に人間なの！？

『私が…閉じ込めた…せい？』

一人、頭を整理しているが、屋敷のエージェント達が友則を襲う。

「させるかよ！」

だが、手玉にとった筈の使用人が、ここにきてまさかの裏切り…。

銃弾を鎧で弾き、明くんを助けた。

「拓哉…和也…？」

どうやら明くんの友達だったようだ。

組織を裏切れば、その代償は半端ではないのを知っているはず…。

それでも、自分の命より、友達を優先したって言うの！？

……分からない…。

今時の高校生の友情が……

私には分からないよお!!

「ユキ!どこへ行く!援護せんか!」

暴走した明くんに、次々と倒される兵達。

…本当に、明くんは人間じゃない。

『私の任務は財宝を手に入れる事。ここはあなた達の仕事でしょ?』

「この…小娘が…!!」

私は逃げ出すようにその場を去った。

もちろん財宝を手にいれずに。

高校生…同い年…理解不能だわ。

特に、友情。

これが私にとって一番の謎だ。

ただ、見ていて悪くないと思った。

むしろ、羨ましいとまで見とれてしまった…。

私も…いつかは明くんみたいな友達を持ちたい…。

そう決意し、私は基地へと帰って行った。

『パパ!!』

「何度言ったら分かるん…」

『学校行きたい!』

「……馬鹿な事を言うな」

パパはハアと深いため息をついた。怒ってるだろうなあ…。

『だって…ヒナだって16才だもん…高校一年生だもん…友情なんて感情は任務の邪魔…? ヤダよ…そんなの…私だって…カラオケとか…シヨッピングとか…デートとか…色々したいんだもん!』

私は、いつのまにか泣いていたようだ。涙など久しぶり…。感情は捨てるという教育をさせられていたはずなのに…。

「……はあ、仕方ない。デートは駄目だが、18才までは殺しの仕事もさせなかったつもりだ。待つてろ、今、孤羽井さんの所に連絡を入れてやる」

…それって、ユキが住んでいる学校の事?

ある事情で預けられた生徒だけという、学校…？

やはり、私は《普通》の高校生にはなれないんだ…。

……でも

「承諾を得たぞ。寮に住み込みらしいから、準備できしだいすぐに出る」

でも、何だろう。この嬉しい気持ちは。

『行つてきまーす、パパ♪』

「パパと呼ぶなと…」

『アタシ今は高校生だよ？ だから、パパ♪』

「ふう、困った娘だな。行つてらっしゃい……ヒナ」

パパが名前で呼んでくれた……！

涙が出そうなのを堪え、アタシは校舎に走って行った。

ヒナ外伝『名前』で呼ばれたい！（後書き）

先日、友人がチヨメディー読みまして、『…で、結局ユキってどうなったん？』とツツコまれた事から、今回の話が出来上がりました。

ユキがヒナだった

んだよぉ…なんて、我ながら無理過ぎますね（笑）

教訓その十二 花言葉ってスゲエんだな！（前書き）

更新遅れました…。それでも待つてくれた方（いるかな）・・・；
（？）ありがとうございます！　今回は文字数少なめですが、次回
の伏線ということにしておいて下さい。

教訓その十二『花言葉ってスゲーんだな！』

チャリン

『……ひもじい音だ』

俺は財布の中身広げ、我が全財産の全てを床に落とした。

もう金って金貨だよね？ 紙じゃないよね？ って勘違いして
しまいそうです。

昨日の買い物が響いたな…まあその分たくさんの服に囲まれている
のだが…。

さすがにヤバイ。ってか月一の仕送りの日に親が金を送ってくれる
とも考えにくいし。

「どうしたあ、ジンくん」

『いや、今月……ってか金がピンチ』

「ふむ、仕送りの見込みがナシ…か。それは辛いな」

この野郎、人の心読むんじゃねえやい。

『その通りだ。ここじゃバイトとかできねえのか？』

「できる事はある。…が、ジンはまだ15才だろ。年齢制限があるため……アウツ」

…ちつ、確かにここじゃ年齢をごまかす事もできないしな。

ここに来る前は、金に困ったら日払いのバイトなんかをよくやってたんだけどなあ。

周りの連中はカツアゲや万引きをやっていたが、俺はそういった行動だけはしなかった。

グループの中には居たから、先生や親に、俺も犯行者の一員として見られていたが、実際は手を出していない。

連中の行為を止められなかったのだから、罪は同罪扱いでも、何も文句は言えない。

ちなみにカツアゲや万引きで得た物でも、俺は一切受け取らなかった。

理由としては、なんかカツコわりいからだ。

特に深い理由ではない。ただ、プライドが許さなかっただけ。それだけの事だ。

しかし、プライドだけじゃどうする事もできない時もある。

つまり、今の俺の状況だ。いつまで居るかも分からない様な所に預けられ、金の収入源もない。

これはリアルに困ったな…。生活する事自体に金はないが、無一文ってわけにもいかない…。

そう、俺には《希望》なんか……ないんだ。

「じゃあ、稼ぎに行くか？」

突然一葵が立ち上がり、外出の準備を始めた。

『稼ぎって……まさか、カツアゲとかか？』

もしそうだったら、一葵を少し見損なうぞ。

「俺はそんな事しねえよ。…いや、まあ…下手したらカツアゲより質^{たち}わりいかもしんねえ」

不気味な笑い方をしやがった。一体、一葵は何をやるつもりなんだ？カツアゲより質が悪いだと…？

「今日は日曜だからな、昼間でもヒマしてる奴がたくさん居るだろ」

一葵は私服に着替えると、とっとと玄関に向かって行った。

俺も慌てて後を追う。

寮から出ると、冬にも関わらず眩しい太陽が俺達を迎えてくれた。

ああ太陽よ、眩しいのは構わないが、どうせならもっと暖かくしてくれ。

と、まあ日本の四季を無視した様な発言は辞めておくか。

「おはよう」

『お、ユキ。おはよー。今日も花に水やりか？』

「うん」

寮を出たすぐ裏には花壇があるため、外出の時には必ずしもここを通る。そのため、花壇に通うユキとの遭遇確率は極めて高いのだ。

まあ…高いと言っても《他の生徒に比べれば》だがな。それに部屋の窓からは花壇が見える。ユキは知らないだろうが、俺は結構ユキを見ているのだ。

『水のやり過ぎには注意しろな』

「平気」

『じゃあ、俺は一葵と出かけるから。またな！』

ユキに軽く手を振り、振り返ろうとしたーその時

グイッと服を掴まれた。

『なっ、何だ？』

「スノードロップ」

『……………はい？』

「花。スノードロップ」

『この花の名前が、スノードロップっていうの？』

ユキは、コクリと頷いた。でも、何で今それを俺に…

あ、もしかして、この前聞いたからか？

それをいまさら？

「スノードロップ。綺麗？」

しかしユキはホントに無表情だな…。こわいら声色も淡々としてるし、一定の高さだ。

そもそも疑問詞なのかも分からない。綺麗だと言いたいのか、綺麗かと聞いているのか…。

『綺麗だな。冬のクソ寒い時期に頑張って咲いてるよな、うん』

なんとなく話を合わせているものの、俺はそこまで花が好きなわけじゃない。

「花言葉は《希望》」

『…希望？』

「ー俺に希望はない。

ついさっきまで、そう考えていただけに、その言葉に敏感に反応してしまった。

「冬、寒い。遭難した旅人は、諦めた。でも、その時妖精が現れた。《もう少しで春だから、希望は捨てちゃ駄目》。妖精は、そう言つて、一面の雪を花に変えた。その花が、これ、スノードロップ」

俺はユキの台詞をポカーンと口を開けて聞いている事しかできなかった。

驚いた。もう驚いた事が山ほどある。

とりあえず、ユキが一度にこんなに喋るのが珍しかった。

それに、妖精つて…まあ、このスノードロップのおとぎ話みたいなものなんだろうが、ユキがこんなにメルヘンチックな子だったとは…。

そして一藝じゃないが、まるでユキは俺の心を見透かしているようだったからだ。

『希望は捨てちゃ駄目…か。ありがとな、ユキ』

「……………」

ユキ何故感謝されたか分かっていないような顔をしていたが、俺にとっては励みになった。

スノードロップ…か。良い響きだ。

小さくて真っ白い雪が、ドロップのように丸く咲いてるからこの名称になったのだろうと思う。

不覚にも、下向きに健気に咲くその花に、一瞬心を奪われた。

照れ臭いが、今度水やりに付き合わせてもらおっかな。

「あのー…俺の事忘れてません？」

ああ、一葵の事すっかり忘れてたよ。

『わりい、行こうか。じゃあな、ユキ』

「うん。また」

今度こそユキに別れを告げ、不機嫌そうな一葵と一緒に街へと出掛けて行った。

教訓その十二『花言葉ってスゲエんだな！（後書き）』

スノードロップ：別名、『松雪草』というらしいです。 さ

て、次回のヤクザの学校は――今まであやふやだった一葵君の能力がフル活用されます。さらにジン君が暴走します。遅くとも20日までに更新しますので、暖かい目で見守っていて下さいm――（

m

教訓その十二でギャンブルの必勝は勝つまで辞めねえ！（前書き）

なんか長くなっちゃったので、二つに分けて投稿します。

教訓その十三　ギャンブルの必勝は勝つまで辞めねえ！

『…かつちゃん？』

「なんだい、ジンっち」

お互いを呼ぶ名称が多少変になってしまっているのは、一葵に稼ぐぞ、と連れて来られた場所が余りにも意外だったからだ…。

『ゴメン、俺の記憶に間違いがなければ、ここは…アレだよね？』

俺達は…と、いうか俺は、店の前で立ち尽くしている。呆れてものも言えないとは、まさにこの事を言うのだろうか。

その店は、ここに来るのが初めての俺にとっては、かなり入りにくいのだ。

「ジンっちの予想は合っている。俺達はここに金を貰いに来たのさ」

一葵の堂々とした態度を見ると、こやつ…ここには来慣れていると読んだ…。

『だって…ここって…その…パ…、パイを…』

「うむ。その通りじゃ少年よ。この店の中へ勇気を持って入店し、パイを弄ぶのじゃ。そして指…特に親指を使い、パイの感触を楽しむが良い」

『逆に金払うかもしれないだろうが…』

「俺達は稼ぎに来た。貢いでもらえば良いのよ」

一葵の自信は、一体どこから来るんだ…？

『つてか…十八歳未満は…』

「その点はモーマンターイ。ここじゃ別に表の様なルールはないの。とにかく、さっき俺が言った事だけ注意してくれ。じゃあ入るぞ！」

『まっ…マジかよ…』

未だにテンパる俺を置いて、一葵は入店してしまった。仕方なく後を追う。

…ふう、ここまで来たら引き下がるか。漢^{おとこ}見せてやらあ！

「いらっしやいませえ！」

ドアを開けると、俺達を迎えてくれたのは、若い女性の店員だった。

「あ、かつちゃん！」

「久しぶりだね」

女性店員は一葵を見るや否や、態度を応変。《客と店員》の仲から、まるで《親しい友人》になったようだった。

「すぐ打てる？」

「うん、ちょうどツーカーの卓あるから、そこへどうぞ」

「さーんきゅ」 行くぞ、ジン」

俺は言われるがままに席に座った。

そう、俺と一葵が来た店とは、雀荘だった。

目の前の全自動麻雀卓には、136個の牌が、ちりばめられている。^{バイ}

本来雀荘などの遊戯場と呼ばれる場所は、十八歳未満は立入禁止なのだが、一葵が言うには《ここ》では大丈夫らしい。

ちなみにツーカーとは、二人同時に抜けた時に使う用語である。

麻雀は主に関四人で行うテーブルゲームなので、面子が欠けてしまつては始まらない。

一見の俺は女性店員から店のルールを聞かされると、早速ゲームに取り掛かった。

麻雀のルール自体は知っていたから、ゲームをやるに抵抗はなかった。

俺、一葵、……あとメガネと坊主の人。とにかく、この四人で面子が組まれた。

二人とも老けて見えるが、歳は十代後半あたりだろうと思われる。

「じゃ、よろしく」

「……………そこはラス固定席だ。無駄にあがかない方が身の為だぞ？」

一葵が気さくにあいさつするものの、メガネが精神を揺さぶる先制攻撃を仕掛けてきた。

なんかコイツ暗そうだな。ってか暗いな。つーか危ないってか普通にキモいわ。

銀縁メガネをかけ、長く伸びた髪は目を隠し、ひょうひょうとした身体付きだ。

理科系？　ならば数字や確率で攻めてくるだろうな。

「俺はモタモタする奴が嫌いだ。打牌は素早く頼む」

坊主は……………せつかち、か。ゴツイ顔立ちに太い眉毛。店内の暖房機具で暖かいというものの、冬にタンクトップを着ちゃってる。

腕ぶつといなあ…。ムンってやったらムキッってなるような筋肉と血管だ。

『じゃ……………じゃあ、始めますね？』

俺は苦笑いをしながら、卓の中央のボタンを押した。

四人の手前から横に十三枚並んだ牌が二段になって、卓から上がってくる。全自動は便利だ。

その隣のボタンを押すと、ドームに閉じ込められた二つのサイコロが回る。

この二つのサイコロを足した目によって、どこから取るか、誰から始まるかが決まる。まさに、運命のダイスだ。

親決め。起家^{ちーちゃ}は一葵に決まった。

麻雀は親と子の二手に別れる。親が一人、残りが子。

麻雀は個人戦の為、グループなどは存在しないが、ギャンブルは親が有利な展開になる事が多い。

麻雀でいう親の特権とは、点数が本来（子）の1、5倍も貰う事ができる。

さらに和上^{あが}れば、ビリヤードや神経衰弱の様に、連チャン機能付きだ。

とにかく親は良い。それだけ言っておけば充分だろう。

「さーて…じゃあ、いきますかね！」

その親を初っ端に持ってきた一葵。気合いを入れて、第一打を切った。

――――

「ふう、こんなもんかな。ジン、そろそろ帰る？」

『そうだな、もう夕方になってきたし。腹も減った』

「まっ、待ってくれ！　あ、後一回だけ……！」

結果から言おう。一葵の圧勝。

まあ、こうなる事は何となく分かっていた。

おそらく、一葵はコイツらの心を読んでいたんだろう。

誰でもギャンブルは熱くなる。特に、あと一手となれば尚更だ。欲しい牌を、頭の中で自然と強く望んでしまう。

そんな状態、一葵にとっては美味しいカモというわけ……か。

「んーと、テンピンのゴツトーだから……坊主の兄ちゃんがマイナスー」

「ふざけるな！」

突如、坊主が卓を力いっぱい叩いた。その音の大きさに、店内は静まり返る。

「明らかにおかしいだろ！　俺達には一度も振り込まないで、こ

んな待ちもバレバレのような素人に振るなんて！」

うわっちゃー…どうする一葵？　　ってかバレてる…。

入店する前に一葵に言われた事…。それは、敵には一度も振り込むな。馬鹿みたいに逃げろ。んで、張ったら即リーしろ。

…と、いうものだった。

つまり俺は、一葵に勝たせてもらっていたのだ。

一回一回、手札は違う訳だから、自分が良い時は攻める。悪い時は無理せずに逃げ回る。

すると、あーら不思議。一葵の八百長によって、見事に連戦連勝を飾る事ができた、というわけです。

「んー…ギャンブルは何があるか分かりませんからねー。それよりお宅の負債額がー」

「…ぐっ、……………ぐうう！」

やばい、坊主がブチ切れ寸前だ…。顔を真っ赤にして、身体中から血管が浮き出している。

「……………覚えとけよ」

なんとか自力で怒りを鎮めたのだろうか、坊主は金を置いて、出て行ってしまった。

同じくメガネも、金を置いてその後を追う。

『ふう…暴れられるのかと思ったあ』

「あれ、ジンともあろう男がビビったのか？　それより、ほれ、ジンの取り分だ」

一葵は、さっき二人から受け取った半分の金を渡してくれた。

『受け取れねえ。一葵、俺に勝たせようとしてくれるのは嬉しいんだが、もう辞めような？』

「いいから受け取れ」

『受け取らねえ。勝ち分はほとんど一葵のдар』

そう、俺は座っていただけで、実際のところ、ここぞという時に活躍したのは一葵なのだ。

「ギャンブルで勝った金、だからか？」

『馬鹿言え。ギャンブルは悪い事だと思っていない。もし俺達が負けたら、向こうは金を取るつもりで勝負してたんだ。だったら、勝ったんだったら、貰うさ、そりゃ』

「じゃあ何が気にいらねえのさ？」

『《一葵の金》は貰わない。俺の勝ち分は、これだけだ』

俺は出された金の、正規の額だけを受け取り、残りは一葵に返した。

「……ぶつ、アハハハハ！ やっぱジンは面白れえわ！」

何が可笑しいのか、一葵は大声で笑っている。

俺、そんな変な事したか？

「根っからの良い奴だな、お前！ だから好きなんだよ、お前の事！」

『あー…返事は後で良いか？』

気持ちわりい…。男に好きなんて言われたって嬉しくないやい。

「よし、今日は学食じゃなくて、旨い飯食いに行こうぜ。今日は付き合わせたから俺が奢る。それなら良いだろ？」

『じゃ、お言葉に甘えて、ご馳走になろうかな』

外食か。そっぴや初めてだな。

寮の食事は確かに旨い。食費は学費に含まれており、親が払ってくれている。

前払いとして払っているため、寮の食事を食う食わないは自由。

朝に弱い俺達は、朝食の時間を逃してしまうこともしばしばだ。

だが、外食となれば別で、普通ファミレスとかのようにその場でメニュー分の料金を支払う。

学費を出してくれている親には申し訳ないが、今日は贅沢という事で。

「今日はありがとな、一葵くん」

「お、店長」

店を出ようと通り掛かったレジの前で、店長と呼ばれた男が一葵の元へやってきた。

先ほどの女性店員もそうだが、一葵はこの店じゃちょっとした名の知れた打ち手らしい。

「また困った時は連絡するよ」

「ああ、俺で良ければ、いつでも来ますよ」

俺達は店長さんに軽く頭を下げ、店を出た。

『一葵、ここにはよく来るのか?』

「いや、頼まれた時だけ」

『頼まれる…?』

「質の悪い奴が居るから、客として打って金巻き上げて追い出して、みたいな?」

あー、なるほど。通りで店長や店員が一葵を見ると態度を変えるわけだ。

どうやら、この雀荘じゃ一葵はヒーローみたいだな。

「んーな事より飯だ飯! 何食いたい?」

『ファミレスで良いよ』

「ファミレスってファミリーじゃないと入れないらしいよ?」

『この学校の生徒はファミリー居ねえよ!』

なんてくだらない事を話しながら、ファミリーじゃない俺達はファミレスに入っていった。

教訓その十三　ギャンブルの必勝は勝つまで辞めねえ！（後書き）

麻雀の話は、もっと詳しく… 特に対局中の事を書きたかったのですが、麻雀知らない人が読んだらつまんねだろうと思い、辞めました。一葵の本当の覚醒と、ジンの暴走は次回に持ち越しです（ゴメンなさい。

あ、もちろん次回はコメディー入ってますよ？

教訓その十四「安全靴は安全じゃねえ！」

その後、近くのファミレスで食事をする事にした。

一葵が奢ってくれると言うので、ありがたくいただくとう。

店内の様子、メニュー、料金、それら全てが普段と変わらない造りとなっている。

働いている店員ですら、愛想も人柄も良さそうな人達だ。

それに、ここだけじゃない。さっきの雀荘も、昨日のショップの店員も、普通の人達だった。

今になって分かった事だが、この学校も自宅に帰れないという事以外は、特に普通の生活と変わらない。

住む家もある。環境も整っている。勉学を学ぶ事もできる。今もこうして、自由に街で買い物や飲食が楽しめる。

初めは戸惑っていたが、住めば都…と言ったところだろう。

「お待たせいたしました」

そこに店員が、旨そうな料理を運んできた。

俺と一葵は、和牛ステーキを注文した。香ばしい匂いに包まれたミディアムステーキの登場だ。

「いただきます！」

一葵は早速、ナイフとフォークを丁寧扱い、ステーキを頬張っている。

『一葵、食べながら良いんだが、いくつか質問させてもらえるか？』

「今は肉が先。俺からも…まあ、ジンが聞きたい事と同じだろうけど」

俺が一葵に聞きたい事…それはズバリ、コイツの《能力》とやらについてだ。

心理思考……なんたらかんたらとかいう、人並み外れた読心術。

何故一葵にそんな能力があるのか、そして、一番気になるのは一葵がこの学校に来た理由だ。

以前俺に《万引きとか窃盗》と言っていたが、あれは嘘だと思う。

今日それに気付いた。何故なら、単純に共同生活をしていて、一葵はそんな事をする人間じゃないと思ったからだ。

だが、この学校に来て改心したという可能性もある。一葵の過去を全て読める程、俺は頭が良くない。

――改心

それは、心を改める事。悪が善に変わる瞬間。

この学校に来てからは、別に教師達に強制される事なんてなかった。ちゃんと授業に出る事、掃除などをサボらない。

その辺りの事なら注意されるが、そんなもの、普通の学校でも当たり前だ。

なぜ俺は、この学校に来てからじゃないとできなかったのだろう…。

なぜ俺は、あの時に先生の注意を受け入れられなかったのだろう…。

今まで通っていた学校の生徒達が、今の俺の姿（真面目に授業を受けたり、掃除している所）を見たら

《ジンって改心したんだなあー》

と思うのだろうか？

この違いって何だろう…？

なぜ普通の学校じゃできなかったような事が、この学校だと当たり前のようにできるのだろう…？

「親を想う気持ちだよ」

肉を食いながら、一葵がふいに言ってきた。

……コイツ、また人の心を…。

一体、どこまで読めるんだ？

「だから言つたる？　俺達はサボリアリなんだ」

働きアリの話は覚えている。必ず七割と三割に分かれる……と。

「不真面目な奴つてのは、周りに真面目な奴が居ると不安になるんだ。その結果、挫折……。でも、不真面目だらけになれば、自分の真面目さに気付く時もある。人間誰でも、一つくらい良い所はある。それに普通の生活じゃ気付けない。でも、この学校に来れば………
…な？」

俺が真面目……？

俺の良い所……？

確かに、今まではそんな事考えた事なかった。

自分はとうしようもない馬鹿だと。クズな人間だと。

それがこの学校に来てから、見方が変わった。

同じような奴がたくさん居る。

安心した。でも正直、不安だった。

ここだけで、こんなにも不真面目な奴がいるのかと。

「確かに教師の外見は恐い。だが、それを武器に脅されるような事はされてないはずだ。用は、自分が成長するにも変わるにも、経験が大切って事だな」

俺は色んな事を学んだ。

そして、これからたくさんの事を学べるのだろつ。…この学校で。

「しみりしちゃったな。寮に帰ろつ。話は、そこでゆっくりするさ」

『そうだな。ステーキ、ご馳走様』

俺達はファミレスを出た。

夜空は空気が澄んでるおかげで、星が綺麗だった。星を綺麗だと思
う事も久しぶりだ。

—————

寮に戻ると、人影が四つ、固まっているのが見えた。嫌な予感がす
る。

『……………一葵』
「……………《また》か」

また？ 知り合いなのか、アイツら？

一葵は、ふう、とため息をつく、と、覚悟を決めたように人影の元へ
近寄っていく。

俺も慌てて後を追う。徐々に近づくと、相手の顔がハッキリ分
かるようになった。

……………坊主の兄ちゃん？

さっきまで麻雀をやってた…。そいつが仲間と思われる奴を三人も連れてきやがった。

「ボウズ、さっきの金、返してもらえるか？」

坊主の奴にボウズって言われたくねえよ。

これは、あれか。仕返してやつですか。あらやだ、物騒な世の中になったもんねえ奥さん。

「渡さねえよ？」

一葵が言った。なんかちょっとカッコイイのが釈だな。

「じゃあ痛い目みてもらうぜ」

坊主が走ってくると同時に、相手全員も押し寄せてくる。

二対四かよ。一人頭二人相手って事かな。

ってかコイツらもここの生徒だよな？ 顔見た事ないけど。

だったら、喧嘩がバレた時のペナルティー（前にレイナが言ってた）とか気にしないんかな？

まあ今は暗いし、周りに人はいない。

人はいないって言っても、ここは寮の裏庭だぞ？ 絶対通報されるだろ。ってかコイツら馬鹿だろ。待ち伏せは良いとしても、場所

を選べって感じだよ、全く…。

……いや、待てよ。

そうか、ここはCクラス用の寮だ。俺達はBクラスになったが、それは明日の月曜日から。今はまだCクラスという事になっている。

この学校はクラスによって寮が分かれている。それは勉強する校舎も同じ事。

つまり、この学校は第三校舎まで存在する。

それに、地域で区切られている。

ここら一帯はCクラスの地域だ。A、Bクラスの人には滅多に出来ない理由がないからだ。強いて言うなら、クラスが違う友人に会う時だけ、だろうか？

そして……今、この時間帯は… Cクラスの連中は

… 食事の時間だ。

今は寮に居る生徒は居ないだろう。

食堂だけは全クラス共有なので、三つの寮の中心に食堂が存在する。

無料で飯を食べる（食費は学費に含まれ、払うのは一般的に親）のだから、今日の俺達のように外食していない生徒は必ず利用する。

毎回毎回外食ってわけにもいかないからな。

通りで部屋が暗いわけだ。外から見ても電気の明かり一つ付いていない。

静まり返った寮はなんか不気味だ。でも、外出時の戸締まりと電気の付けっぱなしは注意しなくてはならないから仕方ない。

あながち馬鹿ってわけでもない…か、うん。

「ジン、俺の能力に疑問持ってるよな？」

『こんな非常事に何だよ？』

「よーく見とけ。そしてカッコイイ俺の姿をムビツとけ！」

ムビるって…。こんな暗いのには携帯の動画じゃ無理があるだろ。

「らあああ！」

坊主が一葵目掛けて右ストレートを繰り出してくる。

金を持っているのは一葵だから、まずは第一の標的とされているのだろう。

「甘〜い！」

とかふざけた口調で言いながらヒラリと避ける一葵。もう少し緊張感を持ったらどうかね？

「……………このっ、このおー！」

「……ふっ、ほっ！」

坊主のパンチラッシュを余裕で避けまくる一葵。…スゲーなアイツ。この暗い視界でよくやるよ。

一方的に攻撃している坊主の方が、既に肩で息をしだしている。

かたや一葵は息一つ切らず、反撃もしない程。反撃の余地などいくらでもあるはずなのに。

まあ、ポケットに手え入れてんだから反撃は無理か。

そのスタイルが気に入らないのか、坊主はさらにムキになってる。まあ当たり前だね。自分が必死で攻撃してんのに、相手はポケットに手え突っ込んで余裕こいてんだからさ。

「うああああ！」

視界の不良により、いつの間にか坊主の仲間の一人が一葵の後ろに忍び寄っていた。

花壇のレンガを一葵の頭目掛けて振り下ろす。

…危ねえ、一葵！

「知ってたよ」

クルッと後ろを振り返り、レンガが頭上に落ちる前に一葵の拳が相手の腹を撃ち抜いていた。

「こはあ！」

殴られた相手は口から変な汁を吐きながら後方へ飛ばされていく。

殴られた拍子に、相手はその反動で無意識に手放したレンガをキャッチした一葵。

やべえ。ちょっと……いや、めっちゃカッコイイ……！

そしてそのレンガを高く掲げ……！

「ジェンガーー！」

ゴメンやっぱ馬鹿だコイツ。

「この……」

相手は仲間がやられた事で、さらに頭に血が上っているようだ。

坊主がまたしても一葵目掛けて突進していく。

「左フックは劣り。本命はそのまま一回転した後に勢い付けた右回し逆蹴り」

一葵の一言で、走っていた坊主の動きがビタツと止まる。

「……は！？」

「何言ってんだコイツ。なんで俺の考えてる事が分かんだよ」

「なっ、なっ……」

ちなみに、言葉にならない事を言ってるのが坊主で、何言ってるんだコイツは一葵だ。

どうやら、一葵が今まで避けられていたのは、能力のおかげらしい。相手の考えが分かるって事は、どんな攻撃をしてくるかも分かるって事。

これは、喧嘩にとって頼もしい能力だ。

「やべえ、コイツやべえよ。人の心読めるとかマジかよ」

「やつ、辞めろ……」

そして、読み切った心の声を一葵は本人の前で声に出している。

坊主からしたら最高に気持ち悪いだろうな。

「もし本当に俺の心が読めてるとしたら、俺の秘密がバレちまう」
「辞めろー！　これ以上言っなー！」

じゃあ坊主もわざわざ考えなければ良いのに……と、思うが、考えるなど意識すればするほど考えてしまうのが人間の性ってやつだ。

「妹萌え……か。ぷぷつ。まあ……ぷつ。性癖は人それぞれだぷぷー」

「いやあああー！」

うわあードン引きー。

坊主ってそういう人だったんだ！。

おそらく、坊主の仲間達も俺と同じ事を思った事だろう。

一葵、笑い堪えるも、台詞の途中で何回か吹き出してるし。

坊主は耳を塞いで首を横にブンブン降ってる。ちょっと可愛い。

「くそ…ちくしょう…よくも…！」

坊主の雰囲気が変わった…？

《ブチ切れ》ってやつかな？

その時、一葵が何かに気付いたように反応した。

「ジン！ そっち行くぞ！」

一葵が叫ぶと同時に、突然坊主が俺目掛けて突進してきた。

「うらあ！」

全力助走の勢いを付けての回し蹴りだった。

一葵の助言のおかげで反応ができた。視界が悪いから助かったぜ。直撃は痛いからね。

でも、避けられる程の余裕はなかった。と、いうか、蹴りは避ける事は難しい。理由としては、目線より下から来るからだ。

やはりどうしても体が反応できないのだ。

さっき一葵はホイホイ避けてたが、勘違いしないでいただきたい。
一葵は異常だ。

となれば、受け止めるしかねえ…か。
右蹴り？ ならば…！

俺は一瞬で状況整理を行う。

坊主は体格は良いが、身長は低い。
髪型は坊主。

縦よりも横に広い。
足短い。

髪型は坊主。
朝とかセットいらすずで楽そう。
デブって言ったら怒りそう。
やっぱり髪型は坊主。

何回見ても坊主。
一瞬髪伸びた気がした。
気のせいだった。
やっぱり坊主！

そしてあの短い足じゃ俺の顔まで足は届かない。

結論、狙いは腕だ！

この無駄に速い計算と判断を勉強に使いたいものだな。

予想通り、坊主の足が腕目掛けて飛んでくる。

本当なら肘をぶつけてカウンターを入れたところだが、視界の悪い今、一点張りのカウンター行為は危ない。

無難に筋肉の部分でガードするか。んで、その後に反撃しよ。血で精算してもらうんだ♪

足が肩と衝突する瞬間、俺は腕の筋肉にグッと力を入れる。

ちよつと痛いけど我慢しーーーー

『ぐわああ!』

蹴りを喰らった瞬間、文字通り俺は《ふっ飛んだ》。

尋常じゃない痛みが腕を襲う。

え、何？

何で？

何だ、この蹴り？

人間の蹴りの威力じゃ…

………!!!

暗くて気付かなかった。

あの野郎…《安全靴》なんか履いてやがる…。

安全靴とは、主に工事現場などで使用する靴の事で、普通の靴に比べると特殊な造りになっている。

つま先の部分に鉄板が仕込んであるのだ。

これは本来、工事などで重い物が落下しても足が守られるようになっている。

そんなもん履いて蹴って…くんな…よ…。

「ジーン…！」

一葵の声が聞こえる。なんか周りの景色ゆっくりになってる。

おー…スローモーション。

あー…地面コンクリートなんだよな…。

頭打ってアバババってなるのかなー…。

《希望は捨てちゃ駄目》

そんな声が聞こえた。

誰の声？

女？

ヒナ…じゃないな。

レイナでもマヤでもユキでもない。
でも、若い女性の声だった。

地面にたたき付けられる。

その衝撃はたいした事はない。

『花壇…』

偶然にも、すぐ横には花壇があった。

土が衝撃を吸収してくれたみたいだ。

………スノードロップ？

ああ、そうか。ユキが作った花壇が…そしてスノードロップが守ってくれたんだ。

さっきの声って、もしかして………。

俺は起き上がる。腕がズキズキと痛む。が、幸い俺は右利きだ。左腕を負傷しても問題ない。

ゴメンな、ユキ。
ゴメンな、マヤ。

お前らが大切に育ててたスノードロップ、潰しちまったよ。

丁寧に手入れされていた花壇、ぐちゃぐちゃに壊しちまったよ。

あーマジ最悪。
暗くて視界が悪いのに…

さらに変な汁が目から出てきて視界が悪くなりやがった。

「あれ？ コイツ泣いちゃってるよ！ そんなに俺の蹴り痛かった？」

痛みで流れてきたんじゃないか……！

『ぶつ殺す!!!』

俺は勢い良く坊主に突っ込んで行った。

「正面からくるとは…おもしれえ！」

ばーか。正面から行くわけねえだろ。

体格的に不利だ。たぶん、力は俺の方が弱い。

でも、喧嘩つてのは力だけじゃない。技によって力は活きる。

一葵のおかげで分かった。坊主の戦闘スタイルは力で押すだけの、ただのパワー馬鹿。

ならば、坊主には動いてもらうよん♪

『らあ!』

俺は坊主の前でしゃがみ込み、左すね目掛けて蹴りを突き出した。

「おっと」

坊主はそれを、足を上げて避ける。

『ふっ!』

続けて突き出した足を左に捻り、坊主の右足に向けて水平蹴りをする。

「よう」

坊主は俺の足が通り過ぎた場所、つまり最初に立っていた位置に上げていた左足を下ろし、今度は右足を上げてそれを避ける。

デブのくせに、機敏な動きをする…のは、《させている》からだ。

そう、わざと避けさせている。

そろそろフィニッシュだな。

水平蹴りを避けられ、俺はそのまま遠心力で一回転する。

体制としては、蛙が座っている姿と全く同じ格好だ。

計算通りだ、問題ない。

俺はこの体制のまま、隙を……チャンスのタイミングを計っている。

そして、坊主の上げた右足が、地面に下りてくる。

地面に足が着きそうになった、その刹那――

俺は蛙体制から坊主のあご目掛けてアッパーカットを繰り出した。

坊主は後ろに避ける。

なーに、これも予定通り。

問題は、ここからだ。上手くいってくれ…！

次の瞬間、坊主は後ろに倒れていた。

――計算通り！！

なぜ倒れたのか分からない坊主に、馬乗りの体制になりタコ殴り。

……と、しようとしたが、一発殴っただけで一葵に止められた。それに坊主も意識が朦朧もうろうとしている。

「な…んで？」

『安全靴って滑るんだぜ？』

「……すべ……」

『特に、地面が濡れてると…ね。しかも、お前が今まで立っていた場所は…』

「ま…マンホール…」

俺は歳をごまかして、工事現場でバイトをしていた事があったのだ。その時に安全靴を履いていたから知っている。

普通の靴より、安全靴は滑りやすい…と。

さらにさらに、マンホールは濡れている。まあ、濡れてるからこんな手段を取ったんだけどね。

マンホールは濡れてると滑りやすい。その上、安全靴。このコンボなら滑って転ぶだろうと思った。

そして、足が着く瞬間に、あご目掛けたアッパーで相手の重心を後ろに傾けさせる。

すると、意識的にアッパーを避けようとするため、足は無防備になる。

結果、かかとから着地。そのままツルンというわけです。

「雨なんか降ってねえ…のに…なんで…ここだけ…」

『それはな、花壇の前だからだよ』

さつき花壇に突っ込んだ時に気付いた。スノードロップと、土が濡れている事に。

おそらく、ユキが食堂に行く前にスノードロップに水をやりに来たんだろう。

《水のやり過ぎには注意しろな》

《平気》

ユキは、じょうろに組んだ水を全部花にくれていた。

でも、今日は違った。

昨日ヒナとレイナと買い物に付き合う前にユキは《寄る所がある》
と言って帰った。

俺の勝手な読みだが、あの時ユキは、スノードロップについて調べ
に行ったのではないだろうか？

だから昨日は知らなかった花の名前を知っていた。

そして、水のやり過ぎには気をつけなくてはいけない事を学んだ。

これも俺の勝手な読みだが、余った水を花壇の外に流したのではない
かと。

だから、花壇の外も濡れている。

坊主は暗さのせいで気付かなかったみたいだったが、俺は蛙体制の
時に、手を地面に着けているので、濡れている事を察知した…と、
いうわけだ。

「いや、普通に倒せば良からうに。ジンなら、こんな面倒な事しな
くても勝てるだろ？」

一葵が不思議そうに尋ねてくる。

『悔しかったんだ…。だから、『ユキの毎日の水やりの努力』で勝ちたかった。ただ、それだけの事だ』

「今のジンを、ユキが見たら惚れるんだろうなあ………ん？（あー！ ユキ居たー！ 物影に隠れてこっちジーンと見てるー！ まさかのジンとユキのフラグが立つのか！？）」

ユキが俺に惚れるだって？

馬鹿言っなよ。むしろ、この状況見たら悲しむだろ。

それより、花壇どうしょ…。

マヤには怒鳴られるだろう…。

ユキはもつと無口になるだろう…。いや、下手したら口きいてもらえないかも…。

「…能力発動。ユキの思考を読み取る」

（ジン…あ、り、が、と）

（ユキから好意キターー！）

うわーやべー。

どうしよ…よし、とりあえず花壇を直して…しばらくユキから距離を置こう！

ユキ見かけたらすぐ逃げよう！

んで、直した花壇見たユキが違和感なさそうだったら、また話しかけよう！

（ジンの馬鹿ー！ フラグ折れるー！ ってか既にユキにバレてるからね！）

「正直にユキに言った方が良いと思うぞ？」

『いや、ユキってさ、ああ見えて根に持ちそうだからさ』

（…………ムカツ）

「（馬鹿ヤロー…！）い、いやあゝユキは許してくれるって！」

『でもさ、ユキってまだ子供じゃん？ 同い年に見えないってかさ、まー幼児体系だしね』

（…………嫌い）

「ジン、お前これから大変だぞ？（色んな意味で）」

『そつだよ、大変だよ。よっしゃ、気合い入れて花壇直すか！』

「お、おう…（…あ、ユキ帰っちゃった）」

『良く見るとさ、スノードロップってユキに似て可愛いよな。健気で純粹で…』

「そうだな…（もっと早くその台詞言えよ!）」

その後、坊主と仲間達にも強制的に手伝わせ、なんとか花壇は元通りになった。

潰してしまったスノードロップを取り除き、そのスペースに無事だったスノードロップを埋め変える。

やはり本数が少なくなってしまったため、違和感があるのは否めない。

毎日見るユキはすぐ気付いてしまっだろうなあ…。

でも待てよ…。

俺がやったって分かるわけないもんな、うん。

よし、これからは今まで通りにユキと接しよう！

次の日からと言うものの、ユキに話し掛けても態度が冷たいんだが、

俺は何かしたのだろうか…？

教訓その十四、安全靴は安全じゃねえ！（後書き）

やっと投稿できました。ちょっと一葵とジンをかつこよく書きすぎたかな…（^ー^；）？

次回は一葵の過去話です。

一葵外伝、俺、ここに居るよ！

鏡。風呂場にある、何の変哲もない全身を映し出す鏡。

それに反射している人間。斉藤一葵。俺自身そのもの。

そう、俺は人間だ。姿形は皆と同じ。人間だ。

日本人特有の黒い髪、黒い瞳。平均より少し高めの身長に、それ相
当の体重。

普通の中学生。ごく普通の…『見た目だけ』なら、どこにでも居る
様な、中学生じゃないか。

……………何なんだよ、この能力…。

何で俺は…………

人の心が読めるんだよ…。

—————

「まーた一葵の一人勝ちかよー」

『ふはは、俺様に勝とうなんざ一万年と二千年早いわ!』

平凡な学校生活。その昼休みにて、俺は友達とトランプでゲームをしていた。

もちろん金を賭けて。リスクや刺激がない勝負など、やっても意味がないからだ。

とは言え俺らは中学二年生。バイトができない年齢だから、当然金もないわけだ。賭けているのは、ほんの僅かな金額。まあ元をただせば親の金になるのだが…。

「おーおー、昼休みだつてのに、休む事を知らない馬鹿が一人いますぜ」

窓から校庭の様子を眺めていた友達が言った。

俺も外を見る。

『翔太…』

「いいのかよ? 《バッテリー》」

『《元》、バッテリーだ』

昼休みだというのに、翔太は校庭をランニングしていた。

さっき言われた通り、俺と翔太はバッテリーを組んでいた。

俺がキャッチャー。翔太がピッチャー。

人の心が読める俺にとって、キャッチャーというポジションは、まさに天職だった。

《ヤマ》を外せるからだ。

強打者となれば、狙い玉を決めてから打席に入る。

ストレートに絞った奴には変化球を織り交ぜる。さらに左右高低。

コントロールの良い翔太は、俺の配球通りに投げてくれたから、ほとんど無敵のバッテリーだった。

でも、俺は野球部を辞めた。

喧嘩とか、そういう理由ではない。

むしろ、俺と翔太は仲が良く、お互い信頼し合っていた。

こう言っちゃ何だが、翔太はコントロールが良いだけの二流ピッチャーだ。球も特別速いわけでもないし、変化球もキレが悪い。

それでも打者は打てないのだから、翔太は周りの連中から、一流ピッチャーだとチャホヤされていた。

もちろん、その翔太の姿が気に入らないわけじゃない。

《お前の球が打たれないのは、俺の配球が良いからだ》
など、利己的な事を常日頃から思う程、俺は馬鹿じゃない。

それに、翔太はいつも言ってくれていた。

「俺の球は三流だ。でも、一葵のおかげで、三流は一流に勝てる」
その言葉が、どれだけ俺を救っただろう。

翔太から信頼を受けている。それだけで十分だったのだ。

「相方は昼休みにも努力。対する一葵は……落ちぶれたもんよのお」

さつき翔太を小馬鹿にした口調だった奴が、俺の肩に手を置いて言った。

大悟^{だいこ}は生意気でムカつく奴だ。でも、こいつはそういう性格だから仕方ない。

『落ちぶれたとか言うなよ』

「だってよ、アイツの為に野球辞めたのに、肝心のアイツが……」

「大悟、言い過ぎだ、辞めろ！」

連中同士で止めてくれなかったら、おそらく喧嘩に発展しただろう。

でも、確かにこいつの言う通り、俺は落ちぶれたかもしれん。

華々しく、野球に青春をかけていた俺が、今は不良仲間と一緒に不良と呼ばれる行為をしているのだから。

「噂をすれば何とやら……。一葵、彼女が来たぞ」

『《元》、だつつつのに!』

大悟は俺をからかうのが趣味のようだ。…と、いつか人をイジって周りから笑いを取る奴だ。

その為、もちろんイジられた人からすれば、大悟を良い奴だとは思わない。どこにでも居るような、実は嫌われ者のお手本だな。

その嫌われ者が指差した方には、一人の女の子が居る。

及川 さくら。中学二年生の、同級生。そして同じクラスだ。

さくらは常に笑顔を絶やさなかった。前向きで、明るくて、人に優しく、そして周りにはたくさんの友達がいた。

黒い髪は癖がなく、肩より少し長い。整った顔のパーツは化粧をしなくても見栄えが良い。

学校で間違いなく上位に入る程の可愛さを持っていた。

だが、それは一年前の話だ。さくらが人気で、可愛くて、俺の彼女だったのは、中学一年生の冬まで。

俺はさくらと別れた。

理由としては、お互い部活も忙しいし、何よりまだ中学一年生。

人生経験が不足している者同士。そこまで長く続かない事は分かってた。

そして中学二年生になって、さくらは変わった。あれだけ輝いていた瞳は、光を失い、まるで死んだ魚のようだった。

常に下を向き、ブツブツと何かを呟いている。歩く時も、ゴリラのように手を力なくブランとさせている。

見ているのが辛い。わずか一年。その年月は、人をここまで変えてしまうものなのだろうか？

一年生の頃は、散々いた友達も、今となつては周りに人はいない。

唯一の救いとしては、さくらは『いじめ』を受けなかった事だ。

その理由は、明らかだ。

余りに行動が不気味すぎる。

生徒も…教師までもが、さくらとは距離を置いていた。

決して『シカト』をしているわけではない。

話し掛けられれば答えるし、必要ならば声をかける事もあった。

ただ、誰しもが『友達』の一線だけは超えないようにと考えていた事は確かだろう。

――何かしてやりてえなあ

みんな、そう思った。思っているはずだ。本来のさくらの姿を知っているから、尚更救いたい。

だが、行動には移せない。

所詮は俺達の、可哀相だと思っ気持ちちは偽善でしかなかったってことだ。

「さくら、変わったよな。良いのかよ、一葵」

大悟が言った。

『俺だって、何かしてやりてえって思っけどよお』

でも、俺とさくらは終わった仲だ。

身を徹してまで首を突っ込む事じゃない。

もし、さくらに絡んでいる連中が質の悪い奴らだったらどうする？

「んじゃよお、放課後さくらを尾行しようぜ！ アイツ引っ越し

たらしいじゃん？」

「まったく…なんで大悟の思考回路はこうなんだろうか…」

「俺は辞めとくよ。なんか…可哀相じゃん」

「俺もパスするわ」

周りの連中は気乗りしていない様子だ。

見た目は性格は確かに悪い。まあ、不良なのだから当たり前か。

でも、こいつらにはその残された最後の慈悲が、さくらを馬鹿にする行動を取りたくないと判断したのだろう。

「何だよ…ノリわりいな。んじゃ、一葵と二人で行くわ」

待て、俺の意見は無視なのか。

『俺だつて行きたくな…』

「私達からもお願い、一葵くん」

断ろうとした、その瞬間。いつの間にかクラスの女子達が俺の周りに集まっていた。

『……何で？』

「さくらを助けてあげて。もう、頼れるのは一葵くんだけなの…だから……」

…はあ。

大悟の様に、面白半分で誘われたんなら断るが、さくらの為を思ってお願ひされたんじゃ、断れねえよな。

俺だって、さくらを助けたいと思っっていたさ。

『分かったよ。んじゃ大悟、放課後な』

「おう！」

大悟と二人つてのが嫌だが、まあ仕方ない…か。

――――

放課後になり、大悟と共にさくらを追った。

家は引越したと聞いているが、場所は分からない。

以前は学校から徒歩10分の場所に建てられた一軒家だった。

「見てみる一葵。さくらとすれ違う人全員が振り返ってるぜ」

『ああ、そうだな』

さくらは、相変わらず歩く時も不気味だ。

今にも死ぬんじゃないかと心配してしまうほどに。

その姿を見て、哀れに思う者、けなす者、笑う者…。

誰一人として、手を差し延べる者はいない。

変わった当時は違った。誰もが心配した。

でも、張本人のさくらが、まともじゃない状況。

原因を聞き出す事はできなかった。

「見失うなよ！」

『分かってるよ...』

大悟は生き生きとしている。こいつ、何が楽しいんだ？

俺達はさくらの後方十メートル以内をキープした。

電柱に隠れながら追跡する。なんかドラマの刑事みたいだな。

ふと、さくらが足を止めた。俺達も距離を保ちつつ、さくらの目線を追う。

古ぼけたアパート。木造のそれは誰が見ても『ボロい』と言えるだろう。

風が強い日なんかは屋根が飛んでいってしまうのではないかと心配してしまうほどに。

さくらは、そのボロアパートに入っていった。

「マジかよ!？」 ここが家か？ こんなとこに人が住めんのか

よ？」

『どうする大悟。さくらの住まいは分かったが……問題はこの先だ。まさか不法侵入するわけにもいかないし、覗くなんて以つての外だぞ？』

「うーん……そうだな」

「何やっとなじゃ、ボーズ？」

この瞬間、俺達は固まった。

さくらの家の前で立ち尽くしていた俺達の前に現れたのは、テレビなんかでよく見る借金取りの方達と格好が同じだったからだ。

まさか、本物？

現実にも……ましてや目の前でこんな事が？

『えーと……僕達は及川さんに用事がありまして』

とつさに言った。その場の雰囲気飲まれて、後先考えていない台詞を……。

「用事ー？　どんな用件だー？」

やべえ、やっぱり聞き返されたか。どうする……。

『……うわっ！？』

「どっ、どうした一葵!？」

『いつ、いや…何でも…』

…何だ、この感情？

溢れてくる。…それがそのまま俺の頭に流れ込んでくる。

痛てえ…。めっちゃめっちゃ頭が痛てえ。

誰だ、この感情は……。

『……く……ら?』

「かつ、一葵…? 大丈夫ですかー…?」

『さくら……さくらのだ、コレ』

「何がだよ!」

俺は目を閉じて精神を集中してみる。

今までにない、特別な何かが、俺の中で目覚めようとしている。

ここまでハッキリと、人の思考が読めるのは…初めてだ。

「――そっか。

そんな事があつたのか。

辛かったな、さくら。

今まで、頑張ったな。

んじゃ、俺が親父さんの敵を討ってやるよ。

指だろうが、命だろうが、何だって賭けてやる。

お前の…借金を返すために。

『オッサン、俺と麻雀打たない?』

「――あ?」

「一葵い――!!?」

――――

「なぜ、人の思考が読めるのか、分かるかい、一葵?」

『分かんないよジーちゃん。でも、大体読める時って、皆困ってる』

「まだ五歳で、そこまで読めれば将来が楽しみじゃわい」

『ねえー、なんでー?』

「ワシらのご先祖様は『サトリ』という妖怪じゃった。サトリは人の心を、何でも読んでしまうんじゃ」

『僕…よーかいなの？』

「いやいや、一葵は人間じゃよ。だから、この能力は悪用しちゃ、いかんぞ」

あの時のジーちゃんの笑顔、忘れねえ。

何で読めるのか…そんなもん分かんねえ。

霊媒氏が、霊を見えるのに理由があるか？

読めるから読める。それしか言いようがねえんだ。

最近になって気付いた。強い想い程、読めるのだと。

人間には思考の壺があると想像してほしい。

その壺は、普段は空っぽだ。ただ、想いにより貯まっていく。

そして強すぎる想いは、壺から溢れる。その溢れた想いを、俺は読み取る事ができるのだと…。

だから、誰にでも、好きな時に読めるわけじゃない。

《助けて、かー君！》

…まかせろ。

一葵外伝、俺、ここに居るよ！（後書き）

更新遅れましたm（――）m 外伝…というか、過去話だと暗くなっちゃいますね…。さて、一葵くんの対戦結果は次回の本編の出だしでちょこつと書く予定です。

教訓その十五『愛』とは名ばかりだ！

「つてわけでき、俺はさくらつて子の為に、借金取り相手に麻雀打ったわけよ！」

一葵の過去の話。それをようやく、本人の口から聞く事ができた。

俺が今まで疑問に抱えていた、一葵の能力。どうやら一葵自身もよく分かっていないらしい。

読めるから読める。

おそらく天性の才能なのだろう。

『そ、それで結果はどうなったんだ？』

「うーん…勝つてはいない。でも、負けじゃない。……引き分けかな？」

『……引き分け？』

「ああ。一対三の状況で俺は圧勝してた。でも、相手が相手だろ？中学生に負けるなんて許されない。ましてや大金がかかってりや尚更な。それで暴力で圧をかけてきやがった」

…そうか、よく考えりゃ中学生がそんな集団の中に自ら行くなんて、

自殺行為も良いところだ。

『でも、引き分けってどういう意味だ？』

「ああ、俺が殴られてるところに、相手団体の親玉さんが登場してな。筋を通す人だったから助かったんだ。それで、さくらの借金はなくなった」

『すげえ！　　一葵すげえよ！』

つてかいくら賭けてたんだろう？

廃人化するくらいの借金って事は……んー、何千万くらいかな？

それを賭ける一葵は凄い。負けたら命だってなくなるかもしれない状況だったのだから。

『んじゃ、何で一葵はこの学校に来たんだ？』

この話はまだ聞いていない。そもそも、最初に疑問を抱いたのが一葵がこの学校に来た理由だからな。

「言つたろ？　俺は勝つてはいない。勝負は中断したんだからな。だから、さくらの借金がなくなる代わりに、俺も何かリスクを背負わなくてはならない。…と、親玉さんに言われてな」

もし勝負が中断しなかったら、一葵は圧勝だったのだろう。俺は、そう信じている。

「その条件は、俺に機会を与えてくれるというものだったんだ」

『機会…？』

「ああ。奴らとしても、さくらの借金がなくなれば、大きな負債額が出る。だから、その負債額を、俺が代打ちという形で雇ってもらう」

確かに…。相手は、まさか負けるとは思わないだけに、借金帳消しを軽い気持ちで約束したんだろう。

でも、負けそうになった。だから暴力…か。

「大金を賭けるなんて事ができるのは、滅多にない。だから、俺はこの学校に代打ちとして来たんだ。借金分の金額を勝つために…」

一葵の抱えていたもの。

それは俺の予想を遥かに上回るほどだった。

おちゃらけた性格の一葵が、まさかこんな事になっているなんて、思いもしなかった。

辛さを隠す為に、わざと明るく振る舞っているのだろうか？

だとしたら、俺に何かできる事は…………。

『一葵…あの…』

「心配すんな。もう借金返したから」

『……………へ？』

「ここに来てすぐに、代打ちの場を授けられてな。それで勝ったから、俺は自由の身だ。でもこの学校の校則は破れない。一度入学したら、卒業するまではここの生徒だからな」

『そうか…良かった』

それじゃ、一葵自身は悪事を重ねてここに来たんじゃないのか。

なんか、急に自分が情けなくなってきたぜ。

『でもさ、何で野球部を辞めちゃったんだ？』

「……………っ！」

突然、一葵の表情が曇った。やばい、これは聞いちゃいけない事だったのか？

『あ、ごめっ…言いたくないなら別に』
『いやああー！』

一葵は両手で頭を覆い、奇声をあげた。

どうしよう、コイツ壊れちゃったよ。

俺のせいかな。俺のせいなのか？

どうやら触れちゃいけない過去に触れてしまったらしい。

『かつ、一葵…落ち着け！』

「あつ…愛の…キャッチ…ボー…いやあああー！」

『一葵ー！ー！ー！』

一葵の乱れ様は異常だ。

一体何があつたんだ！？

かろうじて聞き取れた言葉を繋ぎ合わせると、『愛のキャッチボール』だ。

どういう意味だ…。

それが一葵が野球部を辞めた理由と関係があるのだろうか？

「あつ…愛のキャッチボール…。先輩の命令は絶対服従が暗黙の了解となっているのが、我が校の野球部だ…。

後輩である俺達は、飲み会に強制参加をさせられ、後輩全員で『回し飲み』をさせられた。

その行為を…通称、愛のキャッチボール…！」

『回し飲みって…。用は間接キスだろ？　まあ確かに男だけでなく…しかも後輩の部員全員ってなったら気持ち悪いのも分かるけど…』

「ちっ…違う！」

一葵は息を乱しながら、尚も取り乱している。

違うって…間接キスが嫌じゃないって意味か？

一葵くんにモーホー疑惑浮上です。

「いや、回し飲みって言い方が間違ってた。正確には、『口移しだ』」

『……………は！？』

「だから…部員が一行に並び、端っこの奴がビールを口に含む。その含んだビールを、隣の奴に口移しをする。

そして、それを端から端へと回していく…。そして、『アウト』と言われた時に、口に含んでいた奴は…そのビールを飲み込まなくてはいけないという恐ろしいゲームなんだ…！」

どうしよう。想像しただけで、もの凄く気持ち悪くなってきた。

一葵は当時の出来事を思い出しているのか、顔色が芳しくない。体は奮え、視点が定まっていない。

愛のキャッチボール…。恐ろしい競技だ。

『でも、よく辞められたな。普通、先輩にボコられるだろ』

「ああ、そもその始まりは、俺にレギュラーを奪われた先輩の発案だったらしい。部員の皆には悪い事をした…」

さっきまで怯えていた一葵の目が、急に淋しそうな目になった。

つまり、一葵は野球部を追い出されたって事か。

きつとコイツ…野球やりたかったんだろうなあ…。

昇格戦のソフトボールをやっている一葵は、本当に楽しそうだったから…何となく分かる。

一葵は野球が好きなんだ…と。

『今度、ヒマな時にでもキャッチボールするか!?!』

「…え、『愛』の？」

『馬鹿、ちげえよ！ 普通に、だよ。どうせグローブとか持つてんだろ？』

「お…おつよ！」

一葵の顔が、パアと明るくなった。まあ俺としては、そこまで野球が好きじゃないが、たまには付き合ってやるとしよう。うん、俺って優しいな。

『それにさ、さくら…ちゃんが待つてるんだろ？ 頑張つて、早く卒業しようぜ！』

「ああ。あれ依頼会ってないからな。元気になっていれば良いけど…」

一葵には、待つてくれている人が居る。それは羨ましい事だ。

……俺にも、帰りを待つてくれている人は居るのだろうか…？

「さて、そろそろ寝るか。明日からBクラス用の寮に移動だ。準備だの忙しくなるぞ」

『そうだな。…おやすみ』

電気を消し、ベットに横になる。

今日一日で色々な事があったな。

でも、一葵を見直した。

俺は、こいつとは親友になれそうだな…と思いながら、眠りについていった。

――――

『起きろ一葵――！ 時間！ 遅刻する――！』

「むにゃむにゃ…」

見直した俺が馬鹿だったのだろうか？

一葵の周りでは馬鹿みたいに大きな音の目覚まし時計が二個、さらに携帯電話のアラーム音が鳴り続けているのに、全く起きる気配はない。

こうなったら、あの手でいきますか…。

『愛のキャッチボール』

「うわああああ！」

おっ、速効だよ。

重度の寝坊症候郡の一葵が一発で目覚めるおまじないだな。
よし、覚えておこう。

「嫌だ…嫌だ……いやあああー！」

ただし、寝起きは意識が朦朧としてるので、精神を崩壊する恐れあり…と。
よし、覚えておこう。

教訓その十五『愛』とは名ばかりだ！（後書き）

久しぶりの更新です。なんか会話だけで終わっちゃいましたね。さて、次回からBクラスになり《ヤツ》が再登場します。まあ早めに更新できれば良いなあーぐらいの気持ちで書きますんで、気長にお付き合いして下さい。

教訓その十六、頬を伝う雫は輝いた星の色をしているけど、これは汗だ！（前書）

ヒナ視点です

教訓その十六ゝ頬を伝う雫は輝いた星の色をしているけど、これは汗だ！

「今日からBクラスの仲間入りする五十畑ヒナです」

「速水レイナです。宜しくお願いします」

「船渡川マヤ。よろしく」

アタシとレイナとマヤちゃんが自己紹介を終えると、新しいクラスの皆は、拍手で迎えてくれた。それも、笑顔付きで。

むー、ジンくんと一葵は何やってるんだろっ？

もしかして、また寝坊かな？

今日も朝食の時間に居なかったし…。

「はい、それじゃ皆さん仲良くしてあげてください…っ」と

新担任の雄二先生おにいは、いつ見てもやる気ナッシングな表情です。

歳は若く、髪の毛も明るいオレンジ色に染まっている。

眠そうに、そしてダルそうに欠伸をしながら頭を掻いてる。

でも、それが馴染みやすい。この学校の教師とは思えない程に。

「んじゃまー適当に空いてる席に座ってもらって…」

「先生、空いてる席ないんですけど…」

さすがやる気なしで有名なユウジ先生。新入生が入る事は事前に知らされているはずなのに…。

「レイナさん！　俺の隣どうぞ！」

「は！？　え、ちょ…ここ俺の席だから！　つかお前が退けよ

！　レイナちゃん、俺の隣に！」

「あーもう！　お前ら退け！　ヒナちゃんが座れねえだろ！」

えっと…何故か男子全員が喧嘩し始めたんですけど。

頼りのユウジ先生は、『どーでも良いよ』みたいな顔してるし。ユウジ先生に頼ったアタシが間違いだったのかな。

「おい」

喧嘩している男子の中にマヤちゃんが割って行きました。

「ここアタイが座るからどいてもらえる？」

「……っ！ あ、はいどうぞ」

一瞬、マヤちゃんと喋ってた男の子の顔が恐怖に引き攣った様に見えるけど気のせいだね。

「レイナ、アタシ達どうしよっか？」

「しかたないから、他の教室から新しい机と椅子を取りにいこ？」

「そだねー」

えっと、確か…階段を下りたところに空き教室があつたはずだ。

うーん…ってことは、戻ってくる時に机を持ちながら階段を上るのが。

別に机が重いつてわけじゃないけど、アタシ身長が低いから前が机の上に椅子を乗せて持つと前が見えにくくなるんだよねー…。

ま、いつか。授業が始まる前に行つてこよーっと。

「あ、あ、あ、あ」

「……ん？」

「あ、あ、あぁ…」

なんか『あ』しか言わない人に話しかけられました。

「何かな？」

「あああ、あ、ああ」

……はっ！

もしかして…この人…。

『あ』しか喋れないんじゃない？！

「ああああのですね。ハアハア、も、も、ももしよよよろしければですね。ぼぼぼ、僕の席にすすハアハア、すー座って下さい。あの、ああ、新しい机はぼぼ僕が持つてきまますんで」

…あ、よかった。ちゃんと喋れるんだ。

でも凄い早口な人だなー。

セリフの最初つつかえてるし。

なんかハアハア言ってるし。

「あなたの席に座って良いの？」

「ははははい。もも、もちろんです。あああ、でももしかしたら僕が座ってたから凄いあの汚いかもしれませんしだからあのその」

この人、もしかして怯えてるのかな？
なんか奮えてるし。汗凄いし。

「良かったね、ヒナ」

「うん。でもレイナの机がないから私も一緒に行く」

「ああああそ、それでしたらですね、僕がレ、レ、レイナさんの
ですね、ハアハア……いい椅子になります」

「……………え？」

うわっ、レイナが凄い怖い顔してる…！

「あああああ、じゃじゃじゃ僕がふふふ二人の分の机持ってきてま
すんでちよっとままま待ってて下さい」

それだけ言って、早口で拳動不審で暑がりさんなその人は教室を飛
び出して行った。

「面白い人だねー」

「うん。あと、とても良い人だね」

でも名前分かんないや。
戻って来たら聞かなくちゃ。

「おおおお待たせ」

速っ！

「あ、ありがとう」

凄い嬉しいよ。凄い嬉しいはずなんだけど…。

その人の異常なまでの汗が机にポタポタと垂れて浸透してるんですけど…。

しかも手汗も凄いから、持っていた部分の両端なんて大変な事態になってます。

でも、善意を無駄にしちゃ駄目だよね。

暑がりさんなのに、私達を待たせまいと急いで持ってきてくれたんだもん。

「ありがとね」

アタシは精一杯の笑顔を、その人に向けた。

でも、すぐにまた教室を出て行ってしまった。きっとレイナの分の机を取りに行ったのだろう。

一分と掛からず戻って来た彼の手には、アタシの机以上の汗がついていた。

木製の机は、汗を吸収しきれずに、もはや水溜まりのようになってしまっている。

ドンマイ、レイナ。

「あ、ありがとう」

それでもレイナは、笑顔を保っていた。

「そそそそれじゃぼぼ僕はこのへんで」

あ、名前聞いてないけど……まあ良いか。同じクラスだし、その内分かるでしょ。

とりあえず一時限目の授業は、ノートと教科書を出せそうにない。

「それにしてもジンくん遅いなー。何やってんだろー？」

HRが終わってもジンくんと一葵くんは来なかった。
ありゃりゃ、罰として掃除当番決定だな。

「ふふ」

「ん、何笑ってんのレイナー？」

「んーん、別に。ただ、珍しいなー…って思っ」

「珍しいってー？」

「ヒナも、男の子に興味が出てきたんだなー…っ」

「かつ、勘違いしないよね！　べっ、別にジんくんの事なんか心配してないんだから！」

「昨日ツンデレ雑誌読んだから早速使ってきたわね」

「えへへー」

「んー。でも、確かにレイナの言う通り、少し興味が出てきたかもしれない。」

「アタシは同年代の人達と一緒に居るだけで、凄く楽しい。」

「それに、皆アタシと仲良くしてくれる。」

「でも…それって、皆アタシの過去を知らないからなのかもしれない。」

「アタシの過去。そして、この学校を卒業してから待っている生活。」

それを知らないから、仲良くしてくれる。

もしそれが知られたら、皆アタシから離れていくかもしれない。

凄く怖い。

もしかしたら…友達が『ターゲット』になるかもしれない。

可能性はゼロじゃない。

組織から依頼されれば、任務の遂行は絶対だ。

その為に幼い頃から人としての感情を殺すように教育されてきたんだ。

でも、今のアタシには…情が蘇ってしまっている。

「こら、ヒナ。顔が暗いぞ」

レイナがアタシの頭をこずいた。

「…うん」

「すいやせーん、遅刻しましたー！」

その時、教室に勢い良く入ってきた二人がいた。

「愛の……愛のキャッチボール……へへへ……」

「いやー、ちよつとコイツ馬鹿なんで気にしないで下さい。って……あれ、俺達の席くない？」

「へへ……俺らの席ねーからー」

「……ゴメンー葵。俺が悪かったから、いい加減に目を覚ましてくれ」

でも、何だろう。ジンくんを見ると、なんか楽しい気分になる。

「レイナ、ジンくんって素敵だね」

「えっ！？ ヒナ……まさかジンくんの事……」

「ううん。まだアタシには、好きって感情は分かるけど『愛しい』って感情は分らないみたい。それに……」

「……それに？」

「ジンくんはレイナの………おとー」

「あー、てめえデブロン毛じゃねえか！ まさか同じクラスなの

か!？」

「ききき、来ましたねジジジン君。せせせ、先日はほほほ本当に申し訳なかった」

アタシ達の机を持ってきてくれた人を、ジンくんは『デブロン毛』
と言い出した。

確かにちよつと体脂肪率が高くて髪の毛も長いけど、さすがに直接的すぎるよ。

「てめえよくも俺に薬なんか」

「ごごごごめんなさい。ヒイイー」

「ま、もう済んだ事だし良いや」

早速、ジンくんとデブロン毛さんは仲良くなれたみたい。

そういえば、どこかで見たなーって思ったら、アタシの周りにいつも居た人だった。

それにソフトボールの時に対戦したっけ。

「…ヒナ」

「んー、なにー、レイナー？」

「もしヒナがジンくんを…いえ、男の子を好きになったら、まず最初に私に言っただけ？」

「もちろんだよ。約束する」

レイナ、もしかしたら…もしかしたらだよ？

もしアタシにも『愛しい』って感情が分かって…いや、本当は気付いてるのかもしれない。

愛しさを素直に認めて、本気で好きって言えるようになったとしたらね…？

たぶん…アタシの好きな人ってさ…。

レイナの『弟』かもしれないんだ…。

教訓その十七、告白は言葉の前に勇気だ！

くそ…。まさかの新クラスになった初日に遅刻で、罰として放課後の掃除をする事になっちまった…。

そもそもの遅刻の原因は一葵の寝坊＆精神崩壊にある。

まあ精神を崩壊させたのは俺なんだが、元をただせば起きない一葵が悪い。自業自得だ。

結局一葵は午前中いっぱい、譫言のように愛のキャッチボールと呟いていた。

俺まで巻き込まれるんじゃ、一葵の前で愛のキャッチボールという用語は禁句にしようと思う。

さて、新クラスになったが、まあ特にやる事に大差はない。

一葵、ヒナ、レイナ、マヤ。皆一緒のクラスだし、Cクラスにはコイツらの他に特に仲の良い友達も居なかったからね。

Bクラスになって変わった事と言えば、デブロン毛の再登場といったところだな。

俺に薬を盛ったお詫びとして、今掃除を手伝って貰っている。

あ、別に脅したり強制とかはしてないからね。

デブロン毛が自主的に参戦してくれただけだ。

んで、大体の掃除は終わってきたところだ。まあ毎日昼休みの後に掃除の時間があるから、そこまで汚れてるわけじゃないし。

生徒が下校した教室で一葵とデブロン毛の三人きりってのが、異色コンビだけど。

「ジジジ、ジンくん」

窓を拭いていたデブロン毛が、俺に話しかけてきた。

「し、親衛隊は解散したんだ。そこで、そつ、相談があるんだ」

ほー、ヒナ親衛隊が解散したのか。まあ、あんな騒ぎになっちまったんだから仕方ないか。

「ヒッ、ヒナちゃんに、こっこっこっ、告白をしししようとおお
お思ってる…！」

『ふーん、そうか頑張れよって……えー！？』

デブロン毛がヒナに告白？

うん、普通にフラれるだろ。

だつてお前正直キモいもん。デブだもん。常時汗かいてるもん。まともに喋れてないもん。

ヒナとデブロン毛が付き合ったら…。

駄目だ、想像がつかない。バランスが明らかに釣り合っていない。

天変地異の前ぶれ。もしくは少女拉致監禁罪のどちらかと思えん」

「ジン、全部声に出てるぞ？」

「ひっ…ひどい…」

おっと、声に出てたか。

まあ別にヒナとデブロン毛が付き合う事に異義はない。

そこはヒナの判断だしね。俺にとにかく言う権利はないわけだ。

『悪いな、…で、相談って何だ？』

「こっ、告白って…どうすれば良いのですか！？」

『んなもん自分で考えろ。
つてか何故俺に相談する。』

別に俺達は仲の良い友達でもない。というか友達じゃない。友達だ
と思いたくない。認めたくない。知人でもヤダね!』

「ジン、だから声に出てるつてかお前絶対ワザとだろ?」
「ひっ、ひどい…」

あ、バレたか。

『まあヒナを呼び出して、素直に好きって言えば良いじゃん』

「そつ、それができないから困っているのです…」

うーん。まあ確かにデブロン毛は挙動不審な一面もあるし、会話の
時に相手から目を逸らすし、とにかくヘタレだね。

「親衛隊の頃は、会長を通さなくてはヒナちゃんと会話する事もで
きませんでした」

『はあ? 何でヒナと喋るのに許可が必要なんだよ?』

つか会長つて誰だよ。

「抜け駆けだと思われるからです。ヒナちゃんを影から見守る…そ
れが、僕達の努め。でも、それは告白の勇気がないから逃げている
だけでした。」

でも…! 親衛隊も解散し、元会員にも告白の権利を持つ事がで

きたんです！　ただ、誰一人として告白をした人は居ません。みな、あと一歩が踏み出せない。だからこそ、僕が最初に告白してやろうと決めたんです！　ヒナちゃんへの想いなら、誰にも負けませんよ！」

なんか熱く語ってるよ。
正直めっちゃウゼエ。

「見事だ…お前のその心意気…！」

一葵よ、何故に貴様は泣いているのだ？

はあ…まつ、仕方ねえ。フラれりや諦めるだろ。
ちつと励ましてやるか。

『デブロン毛よ…』

「はっ、はい…」

『普段は会話につまるし、人の目を見れないお前が、今はどうだ？
ヒナについて語る時は、やけに生き生きとしてるじゃねえか。
その調子で、素直なそのままの気持ちを伝えりゃいい』

「…っは！」

『告白は言葉の前に勇気だ』

「ジンよ…それはちと臭いセリフだよ」

一葵よ、何故に貴様は俺にケチをつけてくるのだ？
つか語尾がウゼエ。

「分かりました。ありがとうございます…！」

ふと一瞬だけ、ほんの少ーーーーしだけ、決意したデブロン毛の表情が『男』の顔になった気がした。

「じゃあ早速、行ってきます！」

『おう、無残に散ってこい！』

「待て、まだ掃除が終わってな…」

『じゃあ俺も行く。後はまかせたぞ一葵！』

そして俺とデブロン毛は、ヒナの元へ向かった。

教訓その十八『付き合う』って難しい！

『なあ、ヒナどこに居るんだ？』

「ええ！？　いまさらですか！？」

さて、掃除を一葵に押し付けて飛び出したものの、肝心のヒナの居場所が分からない事に気付いた。

いや、デブロン毛が歩き出したから、俺はてっきり居場所を知っているのかと思ってついでにきただけだし…。

まさかデブロン毛も知らなかったとは…どうしようもないな。

せっかくデブロン毛が告白する気まんまんなのに。

「仕方ありませんね。ヒナちゃんの寮に行きましょう」

『おつ、それが一番でつとり早いな！　…で、ヒナの部屋ってどこだ？』

「そんな事も知らないんですか？　基本ですよ、基本」

何の基本だよ…。

俺はヒナの部屋に行った事がないんだ。知らなくて当たり前だろうが。

飲み会は俺達の部屋だったし、買い物荷物を持ってあげたのも途中までだ。

「ちなみに今日からヒナちゃんはBクラスの寮に入る事になっているので、こっちですよ」

……あ、そういや俺達も今日から寮が変わるんだった。

帰ったら準備しなくちゃな。まあある程度は一藝がやっといてくれるだろう。

「さっ、着きました。ここです……」

寮の前で、デブロン毛は言った。何だ、妙に落ち着いてるじゃねえか。まあ汗はかいてるけど。

瞳に迷いが無い。

まるで、これから死に行く戦士のように、割り切った表情をしている。

そして、何故ヒナの部屋を知っているのでしょうか？

Cクラス用の寮ならまだしも、今日からのBクラス用の寮の場所さえも知っているのは明らかにおかしい。

さすが、ストーカー。

『準備は良いな?』

「いつでも」

『呼び鈴鳴らしたら俺はこの場を離れるからな』

「ありがとうございます。僕なんかに付き添ってくれて」

『いってことよ』

デブロン毛は笑った。

正直キモかったが、それは言いつこなしということだ。

くピンポンく

ダッシュ!!

若かりし頃によくやったピンポンダッシュ。

まさか中学三年生にもなってやるとは思わなかったが、俺は呼び鈴を押した後、約束通りその場を離れた。

とは言っても、ヒナの部屋は一番端の部屋だったため、角に隠れている。

ここなら様子どころか声まで聞こえるぜ。まあはたから見たら俺もストーカーに間違えられそうだがな。

後はヒナが出てきて、デブロン毛が告白するだけだ。

さあ、デブロン毛の恋は実るのか!?

――

「ふう、これで荷物は全部だね」

「ねえ、レイナ。『付き合う』って、どういう事なのかな？」

「えっ、どうしたのいきなり？」

「アタシ、まだ一度も付き合った事ないしさ」

「私だつてないわよ？」

「でも何となくレイナなら知ってるかな？　　って思つてさ。手を繋ぐ事？　　チューする事？　　一緒に遊ぶ事？」

「うーん。それは人それぞれじゃないかな？　　ヒナが『一緒に居て楽しい、この人を独り占めしたい』って思える男の子が居たら、自然に手も繋ぎたくなるし、キスだつてしたくなるわよ」

「そうかなあ…。あ、マヤちゃん！」

「ちょうどいいわね。マヤちゃんなら付き合った事あるから、聞いてみたら？」

「ねえマヤちゃん、『付き合う』って、どういう意味？」

「（何だコイツら、この年になってまだ未経験者かよ）
えっと…ヒナは好きな男ができたのか？」

「ふふ、ヒナはジンくんがお気に入りなのよねー」

「違うよレイナ!」

「（なっ…よりによってジンが好きだと!? しかも付き合う意味? って事は…だっ、駄目だ! いくらヒナでもジンは渡せない! よし、ちょっと意地悪してやるか…）」

『付き合う』ってのはね、こういう事をするんだよ」

「…え? ちょっ…マヤちゃん…どこ触っ…キャア!」

「なるほど…付き合うというのは、胸を触っても良いという事なんですね?」

「（うわっ…マジで信じてるし。でも面白いなコイツら）
まだまだ、こんなもんじゃないぞ? 次にココをこうして……」

「いやー!」

くピンポーンく

「あ…誰か来た…アタシが出るよ…」

――――

がちゃ

お、ヒナが出てきた。

なぜか涙目で。しかも顔真っ赤で。

中で何があつたんだ…？

「あつ、アタシとレイナの机を持ってきてくれた…」

「こつ、こんちは」

良かったじゃないかデブロン毛、お前の事覚えてもらえてるみたいだぞ。

「あの、僕と『付き合つて』下さい！」

やつふうー！

ついに言いやがったぜー！

さあ、ヒナの反応は…？

「付き合つ…？」

うん？ ヒナの表情が曇ったが…？

「絶対対っ嫌っ！！！」

「ーっ!!」

フラれんの速っ!

「この変態っ!!!!」

「ふぐう!!」

しかもデブロン毛殴られた!!

好きな子に『変態』と呼ばれたデブロン毛は、その場に崩れ落ちた。

…が、落ち込む暇など与えないとばかりに放たれたヒナの異常なスピードと破壊力パンチを浴びたデブロン毛は、後方へ吹っ飛んだ。

ヒナひでえな。

いくら何でもそこまで拒否らなくても…ってか殴る事ないのに。

しかも涙目で。顔真っ赤にしながら。

そんなに嫌だったのか…。

そういえばヒナの怒った表情を見るのは初めてだな。

ヒナは冷たい目をデブロン毛に向けると、ドアを閉めてしまった。

俺はデブロン毛の元へ駆け寄る。

何て声をかければ良いのだろうか？

自信がなかったデブロン毛が、勇気を振り絞って告白したのに……ヒナから返ってきた返事は『絶対嫌』『変態』『拳』だもんなあ。

もしこれが俺の立場だったら泣くね。

『ああー…デブロン毛？ その…なんつうか………大丈夫か？』

倒れていたデブロン毛を何とか起こし、俺なりに気を使って声をかけてみたが、まあ自分で聞いたという何だが大丈夫じゃないだろうなあ。

「やばい、目覚めそう…！」

……………。

『この変態がつー！』

「ほぐう！？」

心配して損したぜ…。

その後、デブロン毛は諦めたのか、『あ、じゃあ帰ります…』と言ってトボトボと帰って行った。

さて、俺も帰って引越しの準備をしなくては。

荷物整理もしてなかったから、今頃一葵も必死だろうし。

その時、ヒナの部屋のドアが開いた。

「ジッ、ジン君!？」

中から出てきたのはレイナだった。

「何してるの?　ここ女子寮だよ?」

『えっと…デブロン毛の付き添いで…』

「ヒナ泣いてたわよ?　まさかジン君が勧めたの?」

『……………っ。いつ、いや、デブロン毛の自分の意志ですね』

何か一瞬レイナが俺を見る目がメッチャ怖かったんですけど…。

「なら良いんだけど…。あつ！　この前の飲み会の時ね、ヒナがジン君達の部屋から『ツンデレ雑誌』を持って来ちゃったんだけど…」

ツンデレ雑誌…あ、そういえば一葵がなくなっただって騒いでたっけ。

『あれ一葵のだから、別に問題ないけど』

「うーん、でもほら、一応返しますね。ちょっと上がってきます？」

え！？　　おっ、女の子の部屋入っちゃって良いんすか！？

……なんて、どつかのハーレムネタの清純主人公じゃあるまいし。

『おっ、おっ。じゃあちょっとお邪魔しようかな…』

ええ。でも僕チキンなので緊張はしますよ。

「それに…ちょっとジン君に言いたい事もあるし…」

こっ、これはまさか…。

デブロン毛の失恋は伏線で、俺とレイナにフラグが立つのか！？

こうして緊張しまくりの俺は、部屋の中にお邪魔したのだった。

教訓その十九、KYって何の略が知らなかった！

「どうぞ、上がって下さい？」

『お、お邪魔しまーす！』

俺はレイナに誘われるがままに、部屋へと上がらせてもらった。

うん、部屋の造りにたいした差はないな。

女の子の寮だからと言って、この学校は特別扱いなどはしていないわけだ。

…と言っても、男子部屋にも十分過ぎる程の設備が施されているので、これ以上はいじりようがないか。

「あれ、レイナ早かったねー。コンビニ行くんじゃないか？……あ、ジン君！？」

「何！？ ジンが来たのか！？」

玄関にヒナとマヤが出てきた。え？ 三人部屋なの、ここ？

ここじゃなんだから、と言って、レイナは俺をリビングまで案内してくれた。

花柄模様や、ピンク色などが主体となった飾りは、女の子らしく可愛いらしい。

今日この部屋に来たはずなのに、ぬいぐるみなどが綺麗に飾られている。

「はい、雑誌。あと紅茶で良かったかしら？」

ソファーに座っていたところに、レイナが例の雑誌と紅茶を持ってきてくれた。

『お、いただきます』

俺はコーヒーより紅茶派なので嬉しかったりする。

…うん、うまい。

しかし何だな…。

雑誌を取りに来ただけなのだが、ちゃっかりと紅茶まで飲んでいる。俺も帰って準備をしないといけないのだが、すぐに帰るのも悪い気がするな。

「んで、何しに来たんだよ」

マヤが俺の向かい側の床に腰掛け、同じ紅茶を飲みながら話し掛けてくる。

『いや、この雑誌を取りに…』

「ジンはツンデレが好きなのか？」

『これは一葵のだ！』

誤解されては困る。そもそもツンデレとは普段はツンツンしてるけど、稀にデレっとした態度を取る、という様と認知しているが、そのような性格を好むようなら、マゾではないか。

『俺はツンデレなど好きじゃないのでね』

「えー、本当に？」

ヒナが意地の悪い笑みを浮かべ、俺の顔を覗き込んでくる。

『本当に』

俺がそう答えると、ヒナは表情を曇らせる。

「じゃあ帰れば？」

『……え？』

俺の中でのヒナのイメージは、常に明るく、人なつっこいというものだった為、急変した態度を取られ何やら怖くなってきた。

ヒナが俺に浴びせた視線は、先ほどデブロン毛に向けられた冷たさ

と似ており、物凄く悲しくなってくる。

『……え、ちょっとヒナ…いきなりどうしー』

「だからもう帰りなよ！ どうせ一葵君に部屋変えの支度任せっきりなんでしょ！？ 馬鹿、カス、この穀潰しが…！」

うわー何か知んねえけど俺ボロクソ言われてるよ駄目だもう死にてえ。

『わっ…分かったよ。帰るよ…』

「………え、本当に帰っちゃうの……？」

くはあ！

な、なるほど…これがツンデレの破壊力というわけか…。

「あははー、ビックリしたー？ この雑誌に書いてあったの真似してみたのー」

いや何かもうビックリしましたよ。

「ちなみにマヤちゃん、ツンデレ度百点満点だったよね」

「いつ、言うなぁー！」

なんだツンデレ度って…。

あ、この雑誌のページにあるのか？

俺は手元にある雑誌をパラパラとめくってみた。

すると、出てきましたよ。

《あなたのツンデレ度チェック》

という記事が。

なになに、えーっと…

『好きな人の前では見栄を張ってしまう』

「ふん、そんなもん《イイエ》に決まってる」

「マヤちゃん昨日と解答が違ーっ」

「見えっ張りですねー」

『よし、そんなマヤを今日から三栄晴みえはると呼ぶ事にしよう』

「誰だよ！　ふざけんな！」

その後一時間程雑談を交わし、一葵の事が気になったのでそろそろ帰ろうかなー…と思い、腰を上げた。

『じゃあそろそろ帰るわ。紅茶、ごちそうさま』

「あ、ジン君…ちょっと待って…」

レイナに呼び止められた。
何か俺に用でもあるのか？

はっ…！　　もしか本当に俺とレイナにフラグが…！？

「ヒナ、マヤちゃん。ちょっと…」

「うん。分かったよレイナー」

レイナがヒナに目をやると、ヒナとマヤはそそくさと部屋から出ていった。

リビングに残されたのは俺とレイナの二人つきり。

まっ、まさかの展開ですか？

「あの…今日ジン君に来てもらった本当の理由はですね、大切な話があるからなんです…」

レイナが、どこかしら緊張の面持ちで話し始める。

どうしよう。俺まで緊張してきた。

『はっ、はい。なんででしょうか？』

なぜか俺まで敬語になってしまった。

「じっ、実は…私はジン君の…」

事が好きなんです！
って来るのか！？

「おねー」

「ジーーーーーん！……！……！」

レイナとの会話は、突然現れた一葵によって遮られた。

うわマジKY。

ホント空気読めてないわこのオッサン。

ん？ もはやKYって使う人いないか？

そうさ、時代は常に流れていくのさ。

きつと後数年も経てば、流行語なんて死語になってるに決まってる。

そんで俺の存在も、死後には忘れられるに決まってる…。

お、上手い事言っただな、俺！

『そんな慌ててどうしたKY』

「KYって《一葵・ヤベエ》の略だって知ってた？」

知らなかった！

『まあ冗談はさておき。本気でどうした？ そんな汗びっちょびちよのぐんにやぐにやのべったべたで。今ならデブロン毛と五分る勢いだぜ？』

「ジン…落ち着いて聞けよ…？」

『何だよ、そんなマジな顔して』

「ユキが……………誘拐された」

――え？

教訓その二十〇取り乱すな…その感情を静かな怒りに変えろ！

「ユキが誘拐された」

・・・ざわ・・・

『まさか…ありえない』

ざわ・・・ざわ・・・

「残念ながら、本当なんだよ、ジン…」

ざわ・・・ざわ・・・ざわ・・・

冗談は顔だけにしろ

できるなら、そうツツコミてえ。

ただ、その一葵の顔は真剣そのもの。とても嘘をついているようには見えない。

それに圧されてか、汗が頬を伝う。

『……ところで』

「……ああ、なんか俺達の周りに、どこかで見た事がある字体の《ざわ》があるよな」

『心なしか、顎が尖ってきた気がする……』

「気にしたら負けだ。それに今はフザけている場合じゃない」

『そうだな。…で、ユキが誘拐されたってのは…ガチか?』

「ガッチガチ」

ちなみに《ガチ》とは《マジ》と対等の意味合いを持つ。

『何で? 誰に? いつ? どこで!?!?』

「おっ…落ち着けジン」

『これが落ち着いてられるかあ!』

俺は一葵の胸倉を掴み、大きく揺さぶる。

「落ち着きなさい」

ふと左頬に刺激が走る。

我に返った俺の目の前で、一葵が涙目になりながら咳をしている。

そして、レイナにビンタされた事を認識する。

「ゴメンなさい。でも、落ち着いて」

レイナが俺を真っ直ぐ見つめてくる。

どこか懐かしい眼差しだ。

不思議と……レイナに見られていると安心できる。

女に殴られた事は初めてじゃない。

中学時代の俺は荒れていたから、喧嘩相手が女なんてケースもあった。

ただ、殴られた時に感じるのは当然、痛みと怒り。

俺はデブロン毛とは違うのでね。女に殴られて喜ぶような趣味はない。

なのに、今感じるものは、自分の情けなさ。

取り乱したところで、何一つ変わりやしない。いや、それどころか、一刻を争う緊急事態だ。話のストッパーになっている場合じゃない。

「落ち着いた？　はい、一葵君に何て言つの？」

『ゴッ、ゴメン…一葵』

今のレイナは、まるで悪戯した子供を叱る親のようだ。

ありがとう、レイナ。落ち着いた。

『一葵、ユキが誘拐された事をどこで？』

「ああ、コレを見てくれ」

一葵はポケットから手紙を取り出す。そこには、こう書かれていた。

《孤羽以 雪は我々が預かりました。無傷でお返しする事は、まずありえません。今から指定する人間は、ある場所に来ていただきま

す。

只野 仁

斎藤 一葵

速水 玲奈

五十畑 妃名

最後に、孤羽以 厄丸

警察に連絡しても構いません。
指定された人間が来なくとも、逃げたとは思いません。

ただ、その時はこちらもそれ相応の行動を取らせていただきます。

地図を備え付けさせてもらいます。時間に間に合わない場合も、お分かりですね？

では、楽しみにしていますよ《

『なっ…何だコレは？』

誘拐は退廷、《目的》があるはずだ。

この手紙を読む限り、身代金が請求されていない事から金が目当てではない事は確かだな。

じゃあ目的は何だ？

犯人が要求するのは、指定した人物に来てもらう事だ。

それは、俺、一葵、レイナ、ヒナ、校長の五人。

俺達を引き寄せる為の《餌》として、ユキを誘拐しやがったのか？

しかも文頭に書かれてある事が気になる。

ユキを無傷じゃ返さねえだど…？

「調子こいちゃってるよねー。アタシ達の友達誘拐するなんてー」

話が聞こえたのか、隣の部屋のドアを開き、ヒナが出て来た。

全身黒のスーツを着ている。

まるで闇に溶けるスパイの格好だ。

様子から見るに、相当お怒りの様だ。

「行きましょう、ユキを助けに」

レイナが俺の肩に手を乗せる。

またしても迷いのない、強い瞳。

見ているだけで安心する瞳だ。

「人気者は辛いな…。俺の指名料は高けえぜ」

一葵が調子に乗っているが、危険が伴う可能性がある以上、頼もしい仲間である。

「アタイも行くよ!」

『いや、マヤは駄目だ』

「何でだよ! ダチが拉致られてんのに黙ってろって言うのかよ!」

「ジンの言う通り、マヤは辞めた方が良い」

俺の意見に一葵も同意する。

「まず指名された人間以外が行くのは犯人の機嫌を損ねる可能性がある。そうなればユキは尚更危険だ」

「――あれ…?」

ちよつと待てよ…？

「それに、私達も痛い目に合う可能性が高いの。マヤちゃんが頼りない訳じゃない。けど、貴女は私やヒナと違って、何の訓練もしていない普通の女の子だわ。顔に傷でもできたら大変なもの」

――そうだよ…何故俺達が指名されているんだ？

「アタシ達に任せといて♪ 絶対に無事にユッキーを助け出すから」

――皆不思議じゃないのか？

…おかしい。

よく考えろ。

俺達の共通点を探せ…。

犯人は俺達を指名した。

つまり、金以外が目的なら、何か用件があるはずなんだ。

犯人は俺達に恨みがあるのか？

この学校に来てから恨みを買うような真似はしていないはずだ。

強いて言うならば、クラス昇格戦のソフトボール…か？

さらに言えば二ノ宮辺りが怪しい。俺達に恨みがある人物は二ノ宮以外考えられない。

ただ、この推理は違う。

二ノ宮がそこまでするだろうか？

ユキを誘拐し、さらには校長まで…指名だ。

事が大きすぎる。

それに、もしそうなら同じチームだったマヤを外す訳がない。

いや、そもそも《恨み》程度で、ここまでするだろうか？

もし理由が恨みだとするならば、かなり膨大な恨みのはず…。

俺達は恨まれているのか？

身に覚えはない。

――それとも、気付いていないだけなのか…？

「あー、もう…分かったよ。アタイは留守番だ」

全員の説得の甲斐あって、マヤは諦めたようだ。

「はっ、実は今日アタイ生理だったんだ。体調が良かったら無理矢理着いて行っただが…あー残念だ残念!!」

ふふ…本当にマヤは素直じゃないというか何というか…。

そんな自虐的嘘をつかなくても良いのに。

皆が本気でマヤを心配したもんだから照れ臭かったんだろうな。

「犯人、ぶっ飛ばしてこいよ」

『任せときなさい』

「よし、じゃあ行こう。ここに来る前に校長には話してある。場所は少し遠いからヤス先生が車を出してくれるらしい。おそらく、すでに校門で待っているはずだ」

指定された場所は学校の敷地外…か。

外部の可能性が高いか…？

じゃあ何故俺達を指名した…？

とにかく、今の時点では分からない事だらけだ。

危険を承知で行くしかない。

「時間まであと一時間…。距離的に車で30分もあれば着くだろう。皆、覚悟は良いな？」

一葵を先頭に、部屋から出る。

ふと、マヤから心配そうな眼差しを感じた。やはり自分だけ力にならないのが悔しいのだろうか？

『ユキが帰って来るまで、スノードロップの世話は任せたぞ』

俺は振り返り、マヤに精一杯の笑顔を見せた。

「……………おい」

マヤの事だからどうせ、こんな時に何へらへら笑ってたデメー…
とか言うのだろう。

「本数が足りねえ。ジンの仕業だつてのは分かつてる…弁償しろ」

こんな時に何言つてんだ…。

あ、俺の台詞になっちまったじゃねえか。

つてか例の件バレてるー！

「分かったな！ 弁償しろよ！ 約束だぞ！」

『ああ、分かったよ。約束する』

「男なら約束ぐらい守れよな！？」

『おう！』

絶対に破れない約束をしてしまったな。

まあ、破る気なんてないけど。

「素直に《帰って来い》って言えば良いのに」

「ほら、マヤちゃんツンデレだから」

「え！？　今のが《デレ》なの！？　どっちかって言ったら

《ツン》じゃない！？」

『いやマヤは三栄晴^{みえはる}だし』

「ツンデレじゃねえしうるせえし三栄晴って誰だよ！　テメエら
さっさと行け！！」

こうして、《ダーツと行ってワー（・１）》の、ユキ救出作戦が決定された。

教訓その二十一　天国に行けるって胸張って言える様な生き方をしろ！

――地獄絵図

人は死ぬと《天国》か《地獄》に行くという説がある。

生前に善行又は良心を持っていた者は天国へ。

逆に悪行を犯した者は地獄。

こういう言い伝えは凄いと思う。作り話にしろ、発案者は相当昔の時代のはずだ。

それが、現代の今にも言い伝えられている。

この話を信じようが信じまいが、天国と地獄があるのではないかという仮説を知らない人間は居ない程だ。これは凄い事である。

また、人間という生き物は思考力が実に豊かであり、架空上の発想ならば底知れぬ想像力を誇る。

その人間が、例えば千人いたとして、《天国》と《地獄》という言葉葉を聞いたら何をイメージするだろうか？

おそらく、千人全員が同じ解答になるだろう。

それは既に、天国と地獄のイメージが頭の中で出来上がっているからである。

もちろん、天国に《何があるか》という想像は千人それぞれが違うであろう。

例えば俺にとっての天国とは《旨い飯》《可愛い彼女》《友達との遊戯》など、まあ実にくだらないものなのだが。

自分にとっての天国に何があるかは別として、大半は《極楽》という一つのグループにまとめる事ができるだろう。

では地獄とは？

それ即ち《恐怖》

よくある絵本なんかでは、《血の海》《針山》など、拷問的印象が強い。

故に、天国と地獄、どちらに行きたいかと聞かれたら十中八九天国と答えるだろう。

地獄絵図——それは、まさに己の恐怖感を絵図に表したものである。

そして、それが今まさに、俺の目の前に広がっているのだ……………。

「マヤ置いて来る時、俺何て言っただけ…?」

一葵が引き攣った顔で聞いてくる。

「たっ…確か…《指定された人間以外が行くと、犯人の機嫌を損ね

る可能性がある』……だっただと思います」

一葵の質問にレイナが答える。

また、レイナの顔も引き攣っている。

「……………えっと……って事は、犯人さんは今機嫌悪いかも……ね」

こちらも引き攣った顔のヒナ。

そしてたぶん俺の顔も引き攣っているだろう。

『……………何、これ？』

「……………さあ？」

俺達はユキが誘拐され、それぞれが覚悟を決めて指定された場所に
来たわけだ。

その場所というのも、学校から車で約一時間の距離にある、小さな
ビルだった。

学校の校則にある通り、敷地外に出る場合は目隠しをしなくては

けないので、ここがどこだかは分からない。

ただ、不気味である事は確かだ。

何故ここにビルを建てたのだろうか。

周りは背の高い木に覆われている。

森の中にポツンとそびえ立つビルは、不気味としか言いようがない。

そして、俺達は木の影に隠れているわけだ。

どういう訳か、ヤス先生の車で来た時点で既にこの有様。

飛び交う銃弾。

血を流し倒れている人。

それは、まさに地獄絵図。

『何で先生全員来てるんですか！！！？』

「まあ…あれだ。ユキさんが誘拐されたとなっっちゃ来ない訳にもい
かないだろ」

ヤス先生はこの現状を見ても、至って冷静だった。

『いや、だからって…』

「お前達は、何でこの学校に来たんだっけ？」

俺がこの学校に来た理由…？

そんなの、悪事を重ねたから…という理由だったはずだ。

それを何で今更聞いてくるんだ？

「俺もそうなんだ。この学校の教師も全員な。孤羽以校長に助けら
れたと言っても良いぐらいだ。……………だから」

ヤス先生はスーツの内ポケットに手をつ込むと、物騒な物を取り
出した。

「恩人の一人娘が誘拐されたなんて知ったら、黙っちゃいられねえ

んだよ」

そしてヤス先生までもが、お祭り騒ぎに加勢して行った。

……………いや、何ていうかさ、俺ら来た意味なくね？

「馬鹿共が…後始末の苦勞も知らんで…」

さすがに校長は、この光景を見て、やれやれと言わんばかりの様子だ。

『あつ、あの…後始末って言いますと…その…死体の…でしょうか？』

さつきから凄く気になっていたのだが、銃弾を喰らって横たわっている人は死んでいるのだろうか…？

かなり怖くて直視できないんですけど。いや、っていうかマジでこの展開は笑えないんですけど。

「安心せい。奴らの持っている銃じゃ死に至るまでの威力はない。それに、こっちのもんは殺す気などないじゃろ。…見てみい？」

校長が倒れている人を指差す。

俯いているから顔は分からないが、腹部から流れた血が地一帯を赤く染めていた。

見てみると言われても死体なんか怖いってばよ…。

「急所は外してある。まだ死んどらん」

…確かに、微かに動いている。息はあるようだ。

「向こうさんは銃を持っとらんからな。丸腰相手を殺す程、うちの連中は腐っとらんよ」

そういえばそうだ。犯人グループの武器といえば木刀やナイフといったものだ。

「じゃが、けじめってもんは付けなきゃならん。お前達、ついてきてくれるか？」

校長はこちらを向くと、静かにそう言った。

校長のその瞳には凄みがあり、見る者全てを圧倒する威圧感がある。

思えば俺は、この学校に来た初日以外に校長との絡みがなかった。

と言つのも、なぜか校長は学校に居ないのだ。

まあ、あの敷地の広さだ。単純に遭遇率も低い。

でも行事にも顔を出さないし、そもそも生徒集会の時にも居ないのは明らかに変だ。

それに、ヤス先生が言っていた事も気になる。

ここの教師全員が校長に恩があると言う。

一体、校長は何者なのか…？

誘拐事件に校長が絡んでいる事は間違いないだろう。

「幸い、奴らのおかげで道は開けた。もう一度聞く。ついてきてくれるか？」

「はい、もちろんです！」

先生方のおかげで、門番をしていたであろう人の意識が、こちらから薄れている。

建物の中に入る絶好のチャンスだ。

……しかし、門番だけで何て人の数だよ。軽く50人は超えているぞ？

まあそれもヤス先生達のおかげだ。もし俺達五人だけで来ていたら、あっさりゲームオーバーだっただろう。

「っしや！　行くか！」

『声でさえよ一葵！』

一応、身を潜めている身分の為、一葵に向かって人差し指を鼻に当てる。

建物の中へ侵入できる入口は、どうやら真っ正面からのドア一つのみらしい。

俺達が待機している場所から、距離にしておよそ百メートル。

そこまでを一気に、全速力で駆け抜ける。

中高校生の百メートル走の平均タイムは、男性で十六秒台。……だと思う。女性は知らねえ。

ヒナもレイナも足が速いので問題ないが、校長はどうだろうか？

言っちゃ失礼だが、いくら門番の意識がこちらから薄れているとは言え、老人に百メートルもの距離を俺達と同じスピードで走り抜けると言うのは無理だろう。

だが、危険を省みないと…一番覚悟を決めて来たのは、校長自身のはずだ。

俺達の後ろについて来て下さいなど言えない。

否。それどころか、一番危険な先頭を、校長自ら走り出した。

『遅れるな、行くぞ！』

校長に続き、俺達も後を追う。

この十六秒が勝負だ…！

俺達が侵入しようとしている事に気付いた先生達が、道を開ける為に援護してくれた。

いける…ドアまで残り十メートル。

だが、ここで問題が起きた。

お約束と言つか何と言つか…あろう事が一葵が転びやがったよこのハゲ…！

辺りは薄暗くなり、視界が悪かった。足元が不注意だったのか、地面に倒れている人に足を躓けた一葵は豪快に転倒。

「一葵くん超KY!!」

確かに《一葵・ヤベエ!》

教訓その二十二丁 覚悟を決める！

『かつ、一葵ー！！』

最後尾を走っていた一葵は、地面に倒れている人に足を躓けて転んでしまった。

くそ…ドアはすぐ目の前なのに。

既に校長、ヒナ、レイナはドアまで到達していた。

俺もあと一步の所まで来ていたのだが、一葵一人置いて行く訳にもいけない。

急いでUターンし、一葵の元へ駆け寄る。

幸い、門番は俺達に気付かなかったのか、邪魔者は居なかった。

『怪我は？』

「すまん。特に問題なしだ。行こう」

一葵は立ち上がり、ドアまで残った僅かな距離を全力で駆け抜けた。

「早くー！」

ヒナ達がドアを開け待機。俺と一葵が建物の中に入った瞬間にドアを閉めてくれた。

なんとか侵入成功だ！

「……ぷっ、… あは、あはははは！」

安心するのもつかの間。建物の中には、一人の女の子が座っていた。椅子に腰掛け、俺達を見て大声で笑ってる。

『何か面白い事でもあったのか？』

「ゴメン…無理！ アンタ達必死過ぎてさ…ぷっ…」

相変わらず笑う事を辞めない女の子に、苛立ちを感じた。腹立たしいとはこの事を言うのだろうか。

女の子は俺達と、さほど年齢は変わらない顔立ちだった。なのに、どこか人を見下した様な冷たい瞳だ。

「何笑ってんだテメエは！ 俺か？ 俺がコケたのが面白かったのか！？」

「うん、まあそれもあるよね」

「うん、もう立ち直れねえ！」

とりあえず一葵は無視しておこう。

この女は敵だ。

そう判断して良いだろう。

「アナタ達、ホント馬鹿よねー。もう最っ高に面白いわ！　その
必死な顔！　あーん、写メ撮っとけば良かったよー」

どうやら俺達が可笑しくて仕方ないらしい。

『友達を助ける為に必死になる姿が格好悪いか？』

「違う違う！　　ってか勘違いし過ぎ！　　そんな必死に走って来
なくても《アナタ達》は普通に入って来られるっての！」

…は？　　何言ってるのか全然分かんねえよ。

「《マスター》はアナタ達に用があるの。なのに建物に入る事を邪魔する訳ないでしょ？　　なのに、何を勘違いしたか、アナタ達の先生は馬鹿みたいにはしゃいじゃってさ！　　いい？　　門番に下された命令は《指定された人間以外の侵入を阻止する事》。つまり、アナタ達の努力はぜーっーんぶ無駄なの。わかる？」

女の説明を聞いて絶句した。それでは、本当に先生方の努力が無駄になってしまっているのか。

……はは、マジ……かよ。

「うんうん、良いよその絶望感に満ち溢れた顔！　じゃあね、あとね、もっと良い事教えてあげようかー？」

笑いを堪えつつも、その女は聞いてくる。

語尾を伸ばす口調が気に入るらねえ……。

「なんでウチの門番は、銃を使わないか、分かるかなー？」

そう、それは俺も疑問に抱いていた事なんだ。

これだけ大掛かりな仕掛けに人数。

なのに銃を所持していないのは変だ。

もはや誘拐の犯人グループの一員なのだ。この時点で既に犯罪の領域に達している。

ならば銃だろ。現実的に最強の武器だ。

入手できなかったなんて事はあるまい…。

という事は所持していないのではなく……

『使わないだけ…か？』

「ピンポン。正確には使えない。万が一、流れ弾がアナ達に当たったら大変なもの…」

つまり、俺達は勞せず侵入できたんだ。だがいかんせん空回り。自滅も良いところだ…。

一葵が転んだのに、門番が俺達の邪魔をしないのも変だった…。

「でもねー、アナタ達はもう入ってきたでしょー？　ってことはね、《ウチの連中も使うかも…ね？》」

『先生！！』

慌てて振り返り、ドアノブに手を伸ばす。

先生達は関係ないんだ！

ユキは俺達が連れ戻す。

だから、先生達はもうー

『開け…開け…おい、開けるよこのドア!』

開かない。どんなに力を込めても、ドアノブはピクリともしない。

「無理無理。そのドア外からじゃないと開かないし」

その時、外から大量の銃声が響き渡った…。

先生方の使っていた銃の音とは違う気がする…。

「無駄死に…っていうのかな?　でしゃばるから悪いんだよー」

――あ?

今なんつったこの女?

無駄死にだと?

「ジン。俺もうダメだ」

『一葵落ち込み過ぎ。いくらこの女に馬鹿にされたからって今はそれどころじゃ…』

「俺我慢できねえ。コイツぶっ飛ばす」

……冷静になれって注意した張本人のくせに。

ま、さすがに限度つてもんがあるよな。

俺の堪忍袋もとつくに限界突破してるし。

「罨は全部で三つ」

俺と一葵が一步前に足を踏み出した時、それを阻止するように女が言う。

「私が預かったマスターからの伝言よ。《罨は全部で三つ。それに気付かなければ友達は死ぬ。私と答え合わせできるのは一人》……以上。残念ながら罨の内容は私も知らない。脅しても無駄よ?」

トランプ
罨……?

しかも三つ……ってか死ぬ!?

おい、冗談じゃねえぞ!

友達は死ぬって……まさか、ユキを殺す気なのか!?

無傷で帰さないと言われ、ある程度の暴行は覚悟していたが、殺す

までは予想外だ。

この野郎…マジで許せねえ…。

『マスターの所まで連れてけ』

「さっきから男共うざーい。私があるのはー」

フツ……と、風が通り抜けた。

一瞬の間に、ついさっきまで目の前に居た女の子が消えた。

『ーなっ!?!』

「雑魚に興味はなくてよ?」

いつの間に俺の背後に…?

有り得ない。人間が熟せる業ではない。

俺達五人は女の子に対して《平行に横一列》に並んでいる。ましてや、俺は中心に居るのだ。

しかもコイツは椅子に座っていたんだぞ?

それを、あの体制から一瞬で背後まで回り込んだと…？

動きが全然見えなかった。何者だよ…。

「あんま調子のらないでよ。《人間暗機のサキ》」

「あら、居たの？　ゴツメーン。アンタちっちゃいから見えなかったわ」

やべえやべえ。

何か俺の背後で修羅場。

一瞬で背後まで回り込んだ女のさらに背後にヒナが回り込んでるよ…。

もう何て言つかやべえとしか言えねえよこの状況。

「アナタ達、その階段で上の階に行きなさい。私の任務は《指定された人間を一人だけ排除する事》。ま、相手がチビヒナじゃ不足だらけだけど……ねっ！」

ヒナとコイツは知り合いなのか、お互いの実力を知っているみたいだ。さつき《サキ》とか呼んでたし。

「アタシの事ご指名か。ま、良いよ。サキには色々と仇返しがあるし」

仇返しか。恩返しじゃないあたり、どうやら二人はライバル的存在らしいな。おそらく過去に何かあったのだろう。

「ヒナ一人置いて行くのは危険だよ！」

レイナがヒナに言う。確かにそうだ。

サキが相当な実力者である事は、先ほどのスピードを見て一目瞭然。今の状況からして、明らかに話し合いで解決できる展開じゃない。

しかも、サキの口から殺すと言う言葉が軽々しく出たのだ。危険すぎる。

確実にサキはヒナを殺す気でいる。

マスターとやらの命令が絶対的だとしたら、門番とサキに与えられた任務に不安要素が浮かび上がる。

門番は先生方の侵入を阻止。つまり、食い止めれば良い。建物の中に入れないければ良いのだ。

相手の動きを止める。動けなくする。方法は様々。

だが、サキの任務はヒナを排除する事。この違いは大きい。

さらに、そんな重要な任務を託されている。門番よりレベルは遥かに上のはずだ。

それを、こんな同年代の女の子が…だ。

「大丈夫だよ、心配しないで。すぐ追い付くから!」

「ヒナ…お前それ死亡フラグって言っただぜ」

「一葵くんは黙ってて。ヒナ、私達も残って、皆で進みましょう」

うん、なんか一葵スルーされてたね。

ま、レイナの意見には俺も賛成だな。別に王道通りにサシの勝負じゃなくても良いはずだ。

女一人に五人掛かりは卑怯かもしれない。

だが、コイツは誘拐犯グループの一員だ。卑怯だなんて言わせない。

「うつん。ユキが酷い目にあってるかもしれない。こんな所で足止め喰らう訳にもいかないでしょ？」

……確かにヒナの言う通りかもしれない。

でも、だからと言って友達を置いて行くわけにもいかないだろう…。

「へーき。こんな外道、アタシ一人で充分だよ」

言葉とは裏腹に、表情に優しさはなかった。

それがヒナの覚悟。

普段の優しさを怒りに変えた。その怒りは、そのままサキに向けられた。

ヒナが言うのだ。一人で事足りると。

ならば任せる。それも、俺達の覚悟なのならば。

『行こう、レイナ』

レイナの肩に手を掛け、上の階へ通じる階段の方を向く。それはつまり、ヒナに背を向けるということ。同時に敵に背を向けるということ。

任せると言われた。だから、ここはヒナに任せるんだ。

敵に背を向ける事は怖くない。なぜなら、ヒナが居るのだから。

「……………分かりました。行きましょう」

レイナも表情を決める。

そして、敵に背を向けた。

俺達は階段へと向かい歩を進めたのだった。

教訓その二十三丁割り切るのには勇気が必要だ！

「畏って何なのでしょうか…？」

階段を上る最中に、レイナが言った。

畏についてもだが、やはりヒナが気になるのだろう。どこかそわそわしている。

「まず一つ目の畏は、門番の件で間違いないだろうな」

珍しく一葵が真剣に考えている。

俺もその推理は正しいと思う。

と、いうことは残り二つの畏が仕掛けられている。

事前に予想ができれば良いのだが、そんな簡単に思い付かないものだ。

ただ一つだけ、はっきりと言える事は、畏は危険だと言う事。

「しかし…長い階段じゃのう…」

校長は既に肩で息をしている。ってか建物の中に入って初めて喋った気がする。

うん。確かに長いよ階段。

二階へと続くはずの階段なのに、もう五階分くらいの段は上ってるぞ？

小さいビルだと思ったが、どうやら案外高かったみたいだ。

何せ百メートル先から見だし、何より辺りが暗かったからな。

『僕の答え合わせって、どういう意味なんだろう…しかも、答え合わせは一人だけって…マスターに辿り着けるのは一人だけって事か？』

「うむ…それは今の時点では何とも言えんじやろ。とにかく、どこに罠があるか分からない以上、気を引き締めてー」

その時、階段の床がパカッと開いて校長が落ちました。

……………。

「じつ、校長……!」

言ったそばからコレかよ!?

「これが二つ目の罠か!？」

「おそらくそうだと思います」

『罠はあと一つか…』

ありがとう校長。貴方の犠牲は無駄にしない…！

「さて、行きますか」

皆冷静を保っているが、ぶっちゃけ顔中汗だらけです。

うん、校長はきっと生きている。今はそう信じるしかない。

「お、ドアがある」

階段を上って行くと、ドアがあった。ここにマスターとやらが居るのだろうか。

汗ばむ手で慎重にドアノブを回す。もはや罠を警戒し過ぎと言われ
ても良いぐらいに。

ドアノブは普通に回り、あっさりと部屋の中に入る事ができた。

だが、まだ油断はできない。さきほどの落とし穴が脳裏に焼き付いている。いつどこから罠が発動するか分からない。

「ジンくん…誰か居ますよ？」

部屋の中には、またしても一人の女の子が居た。

部屋の中心にポツンと棒立ちをしている。

だが、どこか様子が変だ。

俯いているので、顔はよく分からないが、黒い前髪がダラインとしているのも、ホラー映画の貞さんを想像させる。

まして、手もブラインとしていて、ピクリとも動かない。

不気味だ。怖い。誰だよコイツ。

俺達は恐怖に駆られ、一歩も動けずにいた。

一葵にいたっては、金魚の様に口をパクパクさせている。

そして、俺達が真に恐れている物を、彼女は持っていた。

右手に拳銃。

それは、俺達に使用する武器だという事が解る。

一葵が震えている。拳銃を見て脅えたのだろう。
無理もない。俺だって怖い。

「……………く……………ら？」

一葵が小さな声で呟いた。何と言ったのか、聞き取れない程の小声で。

しかし、一葵の様子も異常だった。

拳銃を手にした敵が怖いのも分かる。だが、それにしても脅え過ぎである。

尋常じゃない程の汗。
体中が震えている。

まるで、信じられないものを見たかのように。

『一葵、大丈夫か？』

「さくら……………さくらだ、あいつ……………！」

さくら……………及川さくら？

一葵が通っていた中学校での元カノか？

確か、一葵がこの学校に来た理由が、さくらという女の子を助ける為……………だったはずだ。

一葵の話では、さくらを救う事ができたと言っていた。

まさか、目の前に拳銃を持って立っている不気味な女が、及川さくらだと言っのか？

「さくら…俺だ…一葵だよ…斎藤一葵…覚えてるだろ…？ お前こんな所で何やって…」

『おっ、おい一葵！』

俺の呼び止めが聞こえていないのか、一葵はフラフラとさくらの元へ歩み寄って行く。

さくらが、顔を上げた。

やつれた顔だった。もはや生気を失っている瞳をしている。

そして、手に持っていた拳銃を一葵に向けた。

「さくらだ…やっぱりさくら。どうしたんだよ…さくら」

標準が自分に合わせられているのにも関わらず、一葵は自ら寄って行く。

さくらの人差し指が引き金に当てられた。

それを引いてしまえば、銃弾は間違いなく一葵を直撃するだろう。

『一葵！　一葵危ねえって！！』

「さくら…さくら…」

駄目だ…聞こえてねえ！

そして、何の躊躇いもなく、さくらは引き金を引いた。

「馬鹿っ…！」

間一髪。レイナが一葵を突き飛ばして、銃弾の直撃は避けられた。

「……あっ！」

ようやく一葵は事の重大さと、自らの過ちに気付く。

一葵を庇ったレイナの肩は銃弾が掠り、僅かな出血をしていた。

「ごっ、ごめん。俺…一体…」

「私は大丈夫。一葵くん、しっかりしなさい」

「あっ、ああ…」

『危ねえ、また来るぞ！』

さくらは既に二発目の発砲の準備をしている。

まずい。こっちは丸腰なのだ。武器も防具も、何も持っていない。

浅知恵だった。何しろ治療道具も無いのだから、レイナが受けた傷から流れる血を止血する事もできない。

敵陣に乗り込むのだから、役に立ちそうな道具くらい持ってくれば良かった…。

今更後悔しても手遅れである。まずは、このピンチを乗り越えるのが先だ。

一葵としては、何故救ったはずのさくらが誘拐犯の一員なのか気になるところだろう。

だが、悪いが…さくらは敵だ。

「ジン、レイナ、先に行け」

一葵が起き上がり、俺達を見ずに言った。

「俺達はユキを助ける為にここに来た。さくらは俺が責任を持って相手する」

良かった。一葵が正気に戻ってくれたみたいだ。

そして、これが一葵の覚悟なのだろう。

『ああ、任せる。元力ノを庇う様な事言い出したら殴ってるところだったよ』

「おお怖い怖い。……あ、そだ。これでレイナの血を止めてやってくれ」

一葵が上着を脱いで渡してきた。

薄い生地服だったので縛りやすく、包帯代わりに調度良かった。

『勝算はあるのか？ 相手は拳銃を持ってるんだぞ？』

「人の考えが読める俺様にとっては、赤子同然ですわ」

まあ、一葵がそう言うなら大丈夫なのだろう。こいつの人並み外れた読心術は恐ろしいからな。

戦力としてはかなり頼りになる奴だ。

一度、共に喧嘩のピンチを乗り越えている俺には分かる。

一葵は強い。大丈夫だ。

「三つ目の罠に気をつけるよー」

『人の心配してる場合か?』

「なーに、既にさくらの思考は読めている。任せなさいって」

最後に、一葵は俺達を見て笑った。

一葵に勝機あり…か？

まあ、人の思考が読めているのなら心配ないか。

敵の攻撃手段、方法、行動、それら全てが、一葵には読めてしまうのだ。

どう考えたって、一葵が負ける事はない。

ただ、さくらを傷付ける覚悟が、一葵にあるかどうかが問題だが…。

多少の不安は残るものの、レイナを連れて上の階へ続く階段へと走って行った。

「……………よし、何とかジンとレイナは逃げられたな。さて…と。さくらの思考が全く読めねえや。…どうしたもんかねえ」

教訓その二十四「ベルトは武器になる！」

『レイナ、肩大丈夫か？』

「ええ、なんとか。それよりも…」

『ああ』

一葵と別れ、俺達は階段を上っていった。

一応レイナの肩に、一葵の上着を包帯代わりとして巻いているが、単なる応急処置である。

本来ならば止血だけでなく、すぐにでも消毒などの対応を取りたいのだが、手ぶらな俺にはどうする事もできない。

「それより、着きましたよ」

そう、階段を上りきり、ドアまでたどり着いたのだ。

ここで待つのは、マスターなのか、それとも、また別の誰かなのか。

三つ目の罠は、まだ見つかっていない。

先ほどと同様に、慎重にドアを開ける。

「~~~~~♪♪」

部屋の中で待ち受けていたのは、これまた同年代くらいの、しかも今度は男だった。

蒼く染まった長髪は、艶やかな輝きを放ち、サラサラしている。

全体的に細身で、慎重も高い。

あとム力つくぐらいイケメン。

イケメンが吞気に歌なんか歌ってやがった。

でも、その歌声は透き通っており、思わず聞き惚れてしまう程だった。

「やあ、いらっしやい」

軽い笑顔をこちらに向ける。

『アンタがマスターなのか？』

「違うよ。僕は薫^{カオル}って名前さ。ヨロシクね」

『な…何だと…？』

まさか…いや、そんなはず…。

「ん…どうしたんだい？」

あいつ…今、《僕の名前はカオル》って…。

馬鹿な。

今の時代…

一人称が『僕』の奴が居たなんて…！！

しかも名前がカオルだと！？

名字は何だ！？

杉田か？ 渚か？

……………まさか尾股おまたじゃねえだろうな！？

「何をブツブツ言ってるの…君？」

それでも、カオルは笑顔。

正直、何を考えているのか分からない。不思議な奴だ。

笑顔以外に表情はあるのか、と思ってしまっただ。

いや、騙されるな…。どうせコイツも、俺達を殺す気ではずだ。
油断したところをスパッてされないように、細心の注意をはらわなければ…！

「あれ…君、怪我してるね？」

レイナの出血に気付いたカオルは、一瞬にして間合いを詰めてきた。

はやっ…！

やはり、コイツも相当な実力者だ。あの距離から一瞬でレイナの前まで…。

レイナも身構える。警戒して距離を開ける為にバックステップを踏む。

うむ、さすがレイナ様。

相手が優しいイケメンだろうと、簡単に心を許したりしない辺りがさすがだ！

「そんな驚かないでよ。《治してあげる》から」

何を言ってるんだ…コイツは…。

傷を治す…だと？

「誘治善奏曲・ララバイ」

「……………」

カオルがレイナの傷口に手を翳す。

そして、また歌い始めた。

聞いた事のない歌だ。でも、さっき歌っていたのとは違うようだ。

「あ…痛みが無くなっていく」

『マジで！？』

一葵から止血用に貰った服を外してみると、目で見て解る事だった。

何と、傷口が完全に塞がっているではないか。

それどころか、痛みも無くなったと言う。

余りにも異様な光景に俺達はア然としていた。

同時に、焦りも感じた。

カオルは何者なんだ…と。

こんな人間離れた奴が敵…？

俺達は勝てるのか…？

「マスターへの挑戦者は、どっちだい？」

俺達はア然としているというのに、相変わらず清々しい程笑顔のカオルが聞いてくる。その表情は余裕からくるのか、分からないが。

マスターへの挑戦者は一人だったはず。つまり、次の部屋にマスターが居る。

最初は俺が行く予定だった。

マスターとは即ち、犯人の親玉だ。そんな所に女の子を一人で行かせる訳にはいかない。俺に万が一の事があれば、一葵に頼んでいたところだった。

だが、ここに来て考えが変わる。

カオルは普通じゃない。

サキもさくらも、人間離れた所はあったが、カオルは《人間じゃない》という感覚があった。

危ない。危険人物。

歌を歌っただけで、傷が治った。奴がその気になれば、歌で人を危める事ができるのかもしれない。

とにかく、今日の前で起きた事は、手品とかそついった類いではないだろう。

事実だ、おそらく…。

カオルは、歌で傷を治した。それは事実。

『レイナ、マスターの所へ行くのは……』

「もちろん、ジン君ですよね？」

『……こんな危ねえ奴任せられるわけねえだろ……。俺が残る。マスターの所でやる事は、《殺し合い》じゃなくて《答え合わせ》のはずだ。なら、頭脳派のレイナが行った方が賢い』

「私は、負けませんよ」

『こっちは武器も何もないんだぞ！ カオルは意味の分からない能力持つてるってのに……！』

「武器ならありますよ」

瞬間、隣に居たはずのレイナが消えた。

カオルに向かって突っ込んで行く。

「……………ん!？」

それに気付いたカオルは、素早くステップを踏み、レイナを避ける。
だが、避けたはずのカオルの頬から、一筋の血が流れていた。

「……………ふーん。そんなもん使ってくるんだ」

「ええ。身近に良い物があつたので」

レイナが手に持っていた物は、腰に巻いていたベルトだった。

女性用だが、バックルの部分が大きいタイプのベルトだった。

「ベルトは武器になります」

「面白いね、君」

「女王様と呼びなさい!」

「……………え? あ、うん……」

そしてレイナの意外な一面を見ました。

ベルトをムチの如く振る舞うその姿は、正に女王と言つ言葉がお似合いだった。

もしも俺がムチで叩かれ、さらには変な三角の椅子に座らされ『気持ち良いか?』なんて聞かれたらどうしよう…。

そんなもん、気持ち良いに決まってるじゃねえか!

「何ぼーっとしてるのジン君、早く行つて下さい!」

女王と呼びなさいは冗談で言つたつもりだったのか、カオルに引き攣つた笑顔をされ恥ずかしくなり赤面しているレイナが、話題を変えようと言わんばかりに俺を見る。

『分かったよ。じゃあ後は任せたぞ、女王様!』
「もうそれは言わないで下さい!」

さて、次に待ち受けるのはマスター…か。
いよいよ、だな。

まだ三つ目の罫は見つかっていない。

でも、何としても…

ユキは必ず助け出す。

「ふーん。本当にマスターのシナリオ通りに進んでくんだね」

「何言ってるんですか？ 次、行きますよ」

「まあそんな怖い顔しないでよ。……僕たちは少し、話をしよう」

教訓その二十五 過去の自分を忘れるな！（前書き）

作者視点って感じですよ。書き終えて一言。うわ、俺…才能ねえー…

教訓その二十五　過去の自分を忘れるな！

「あの頃に比べたら、強くなったわね」

矢島^{やじま} 早紀^{さき}は、右のふとももに巻き付けた包帯から、三本のナイフを取り出しながら言った。

殺傷力は少ない程の大きさだが、何せナイフである。本来、果物を切る事を目的に作られたそれは、人間の皮膚を切る事すらたやすい。

ナイフの取っ手を指と指の間に挟む。まるで、ナイフパフォーマンズをするピエロの様に。

小さく振りかぶり、素早いモーションから三本のナイフは同時に放たれた。

五十畑 妃名は、体を擦らせ、それを間一髪で避ける。

既に身体中が傷だらけだった。

つい5分程前までは、黒のスーツは新着同然だったのだが、現在着ているものは本当に同じ服なのかと疑いたくなるくらいボロボロだ。

腕の部分の生地は裂け、そこから肌が露出する。

スーツの色が黒でなければ、血で赤く染まっていたところだ。

「だからね、アンタじゃ無理だつて。普通に考えたら分かる事だよ
ね？」

早紀は、一步一步と歩を進め、妃名との距離をじわじわと詰めて行く。

「……はあ、はあああ……」

虫の息だった。呼吸する事すら辛い。

「まだこんなスーツ着ちゃってさ。アンタはもう組織を辞めた人間、
でしょ？」

辞めてはいない。私は組織を抜けたなんて、一言も言っていない。

妃名が一時的に学校に通う事になったのも、単純に懂れていたからだ
だった。

確かに、日々繰り返される訓練に飽きていたのは事実。

気になったのが『友情』だった。

妃名は、友情を学びに、学校へ通う事を決意した。

「……そうだよ、アタシは、ユキの為に…助けなきゃ…アンタなんかに……負け…」

「無理だつて言っただよ！」

既に動けないはずの攻撃を何度もしたはずだ。

それでも妃名は諦めない。それどころか、瞳の強さは増すばかりだった。

早紀にはそれが理解不能であつた。

友情を知らない早紀は、何故妃名がここまで頑張れるのかが分からない。

だんだんと不思議が怒りに変わる。

もう、諦める。

お前じゃ、私には勝てない。

「一年前は諦めただろ？ なのに、なんで今は盾突いてくるんだ

？」

「ユキを…助ける」

「謝れば許してやる。さあ、一年前みたいに、命だけは助けてと――」

「ユキを助ける!!」

満身創痍の体を無理矢理起こし、妃名は叫んだ。

涙が流れているが、瞳は何かを訴えている。

雪を助ける。今の妃名の頭には、それしか考えていない。

でも、それだけで十分だった。

大切な何かを守る時に発揮できる力は、時として限界を超える事ができる。

「…無駄だっって言ってんだろっがぁ!!」

一年前、妃名と早紀が出会ったその日。

早紀は『人間暗器』という異名を持っていた。

身体中、至る所に武器を隠し持ち、それらを自分の手足の様に操っていた事から、いつしかそう呼ばれる様になった。

早紀は元々、フリーの雇われ屋だった。誰の下にも就かない。故に自由。

ただ、依頼を受ければ完璧に熟す。依頼主に忠誠を誓う。その辺りは、しっかりしていた。

矢島家に伝わる武術や剣術、その他の多彩な武道も身につけた。それこそ、懸命な努力の玉だった。

そんな時だった。早紀が、妃名と出会ったのは。

早紀に、とある依頼が入った。

報酬金も申し分ない。ただ、その分危険も伴うだろうと、気合いを入れて行った。

依頼の内容は、ある女の相手になる事だった。

早紀は一瞬にして察知する。相手は、かなりのてだれだと。

自分と互角の勝負ができる相手を求めているのか。ならば、強いのだろう。相当な自信家なのだろう。

しかしである。

その自信家は、自分よりも小さい女の子だった。それが妃名である。後に知った事だった。依頼主は、妃名の父親だった。

自分は、ただの実験台にされただけだった。

それでも仕事である。早紀は、相手をした。

ただ、その時は時期が悪かった。そもそも、こんな場を設けられたのは、妃名が自分を見失っていた事から始まった。

何を思ったか、学校へ行きたいなどと、言い出した。

訓練にも集中していない。

つまらなそうな表情。

早紀がライバルになってくれれば、妃名の目も覚めるだろう。それが、父の本心だった。

そして二人は闘った。

早紀は、苛々していた。

あるうことか、五十畑家の部下の者が、試合が始まる前に、早紀に命令したのだ。

『わざと負ける』

それは意地だったのかもしれない。

もしも妃名が、早紀に負けるようであれば、完全に再起しないだろう。

どこぞの他人に妃名が負けるようなら、組織としての信頼も、周りから失われるだろう。

それはあつてはならない。

だが、父親はその事を知らない。部下達の勝手な判断だった。

『それは依頼されていない』

早紀は、断った。

自分と年齢が近い同性に、どこまで力に差があるのか試したかったのも本心だ。

『もし勝つたらどうなるかー』

知るか！！

結果、早紀が勝った。

それに腹を立てた部下の数名が、帰り道についた早紀を闇討ちした。ある程度の予想はできていた。故に不意をつかれずに済んだ。

早紀は、闇討ちに來た部下達までも蹴散らした。

何も知らない妃名は絶句。

部下達にまで早紀の手が迫っていた事を知り、自分が情けなくなつた。

――アタシは、ここのお荷物だった。

父の願いも虚しく、ついに妃名を学校へと入学させる事となった。

そつと決まった時、妃名の表情が生まれ変わったかのように明るかった。

組織の長としても、一人娘の父親である。娘の笑顔を見た事も少なかった。故に、父も笑顔だった。

妃名には、もはや教える事などなかった。

技術としても、力量はずば抜けていた。

――感情

それは、あった方が良いのか。それとも否か。

父は試したかった。自分の今までのやり方を変えてみようとした。

妃名に感情が甦れば、強くなって帰ってくる事を願った。

だが、結果として、感情など役に立たない事を早紀が証明している。

物理的に解決できない事を、友情などの感情で解決しようなど、誤りであった。

どんなに頑張っても、勝てないものは勝てない。

二人には、大きな差があった。

力自体には大差はないのだが。

――身長。

妃名は150センチと、小柄な体格なのに対し、早紀は165センチと、年代的な平均を上回っていた。

リーチの差である。

妃名の攻撃が届く前に、早紀が仕掛けてくる。

それは、余りにも絶望的な差だった。

「分かるでしょ？ 確かにアンタは強いよ。大人の男にだって、勝てる。でもそれは、力やスピードが勝っているから。でも私とは差がない。だったら、勝つのは身長の違いで……アタシなんだよ！」

早紀が、妃名目掛けて拳を振り下ろす。

それを受け止めるが、上から下に降ろされた拳は、威力を増す。

かたや妃名の拳は、早紀には届かない。

それを許す程、早紀は馬鹿ではなかった。

「まだ……まだ！」

腕が痺れる。それでも、妃名は立ち向かって行く。

「何が友情よ！」

早紀の蹴りが、妃名の横腹に入る。

「そんなになるまで、何でよ！」

倒れた妃名に馬乗りになり、拳を振り上げる。

「所詮、他人じゃない！」

振り下ろされた拳は、妃名の顔面……ではなく、顔の横にたたき付けられた。

地面がへこむ。もしこの拳を顔面に浴びていたら、鼻の骨など、脆く砕けていただろう。

「アンタの友達は、これで喜ぶの？ 自分のせいで友達が傷付いて、そんなボロボロの格好で助けに行って、喜んでもらえるの？」

「……………勘違いするなよ」

妃名は、顔のすぐ横に振り下ろされた拳にも何の動揺も見せず、見下ろした早紀の目だけを真っ直ぐ見つめた。

「ユキを誘拐したのはお前達だ！」

妃名の頭突きが、早紀に命中する。ようやく、まともに攻撃を入れる事ができた。

鼻を押さえ、フラフラとした足どりで早紀は後退する。

「アタシ達を傷付けているのはユキじゃない！ お前達だ！！！」

妃名は素早く起き上がり、低い姿勢を維持したまま早紀に突っ込む。

「アタシにも友達ができたんだ！ その為ならー！」

「無駄だって」

早紀の目が、冷たくなった。先ほどまでとは打って変わって、まるで別人の様に。

油断した。まさか、妃名に一発許してしまうなんて、情けない。

友達の為だと、自分には理解できない努力を見てしまい、少し動揺した。

でも、もう終わりだ。

友情を持てば、強くなると思っただが、逆ではないか。

妃名は、弱くなった。

今は友達の為だという理由をこじつけ、がむしゃらに突っ込んで来ているだけ。

侮辱されれば頭に血が上り、冷静な判断すらできなくなる。

早紀の戦略は成功した。

おそらく、本人を侮辱した所で、妃名は何とも思わないだろう。そこまで愚かではない。

だからこそ、雪や仲間の行動を侮辱する事で、妃名の判断力を鈍らせた。

友情など、知らなければ良いのに。

そんなもの、戦場で最も邪魔な感情だ。役になど立たない。

正しいのは自分。信じられるのも、自分だけ。

頼れる仲間など居ない。

常に気を張った状態が、一番強い。

妃名は、弱くなった。

低空姿勢のまま突っ込んで来た妃名の腹を、早紀の拳が貫いた。

リーチの差。それが、早紀と妃名の大きな違い。

だが、早紀は一つだけ、侮っていた事があった。

「――その為なら、アタシは負けない!!」

次の瞬間、早紀は宙を舞った。

妃名の拳が、早紀の顔面に命中したのだ。

「…な、んで？」

確かに、早紀の拳が妃名を打ち抜いたのが先だったはずだ。

だが、深く考える事はない。

妃名はそれを受けた上で、尚も攻撃をしてきた。ただ、それだけの事だった。

決意。覚悟。

そして、勇気。

何かを守りたい。

誰かを助けたい。

人は時として、実力以上の能力を発揮する。

その起動力となったのが、友情だった。

「……………はあ、はあ……」

妃名の全力を込めた拳をモロに受けた早紀は、床に寝そべり立ち上がろうとしない。

妃名は、一歩ずつ近寄って行く。

「……………殺せば？」

「うん。当然」

妃名の瞳に迷いはなかった。早紀以上に、冷たい瞳。

そんな瞳で早紀を見下ろした。

馬乗りの体制になり、ゆつくりと利き腕の拳を振り上げる。

牽制逆転。今殺生を決める権利を持っているのは妃名である。

殺生とは名ばかりか、今の妃名に、早紀を生かすつもりなど毛ほどないだろう。

友達を誘拐され、仲間を侮辱された。

それが人を殺す理由にならない事など、分かっている。

でも、許せない。

本来妃名は残酷な性格だ。感情などない。そういう人間に、教育されてきた。

「いくよ」

「……………」

覚悟を決めた早紀は、大人しく瞼を閉じ、抵抗を見せなかった。

早紀自身、人を騙し、危める行為をしている身分である。歳が若からうが、いずれこうなる事は分かっていた。

「……………なんてね」

握った拳を開き、笑顔を向ける妃名。

とどめは刺さないのか、早紀はア然とした表情になる。

「《今のアタシ》は、女子高生だよ？　そんな事はしないよ」

妃名の目的は雪を助けると言う事。

格付けは済んだ。早紀に勝った。邪魔者は居ない。

ならば、それで良い。

「はぁー疲れた…」

妃名は、早紀の横に寝そべった。

「本当は皆を追い掛けたいけど、体が動かないや」

どうやら、早紀から受けたダメージが効いているらしく、立っているのもやっとだった。

「馬鹿だね、アンタ。後悔するよ?」

「かもねー。でも力入らないもん。しょうがないよ、アハハ」

体はピクリとも動かないが、口は動いた。声は発する事ができた。

自然と、妃名の表情も緩む。自分の役目は果たした。後は、仁達に任せる。

これも友情である。

自らを犠牲にした時、後を任せる事ができる人間が居る。

人に頼るのは油断でも甘えでもない。

心の支え。

それこそが友情。

事実、妃名が何度も立ち上がったのも、諦めなかったのも、そのおかげである。

心の強さでは、妃名の方が何枚も上だった。

「可愛い下着ね」

「……ふあ!？」

早紀のいきなりの発言に不意をつかれた妃名は、まぬけな声で動揺を見せる。

早紀の暗器によって引き裂かれた胸元から、ピンクの花柄が刺繍された下着が、わずかに露出していた。

「女の子らしくなったねー、アンタ。前見た時は色気なんて微塵も感じさせない可愛くも何ともない白の……」

「うっさい！」

妃名の変化。学校に通う様になってから、感情も甦り、普通の生活を送れるようになった妃名の変化。

それを早紀は見逃さなかった。

妃名は、必要最低限の物しか与えられない暮らしをしていた。

それに、一日の予定、さらには食事のメニューと時間までも。

与えられた服を身につけ、決められた時間に起き、食物を摂取した後トレーニングを熟す。

それは規則正しくも、味気無い生活。

服や下着なども、同じ柄の物のみ。食事のメニューは毎日違うものの、似たり寄ったりで、心がこもっていないとも感じる。

就寝までの時間はプライベートルーム、いわゆる個人の自室で過ごす、テレビや漫画、CDプレイヤーと言った娯楽もない。

休む為だけの部屋。故にベットと、衣服を収納するタンスしかない。やる事と言ったら、寝るだけしか選択肢はない。

妃名にとって、それが普通の生活だった。

だからこそ、学校へ通う様になってからは戸惑いもあった。

下着の色、化粧の仕方、ヘアメイク、服の着こなし方。

それらに関しては無知であった。

麗奈に教わり、叙情に慣れていく、世間での常識。その全てが、妃名にとって未知の世界。

この下着だって、別に誰かに見せたい訳でもない。

でも、より可愛い物を身につけていたい。

自己満足と言えば終わりだろうが、妃名は、普通の生活を送っているのが楽しかった。

「好きな男でもできたのか？」

「知らない！」

「さっきの金髪の男か？ まあ確かに見た目は良いがアイツは…

…」

「何でそこでジン君が出てくるの!? 全然そんなんじゃないから!」

「まさか、さっき転んでた、いかにも頭悪そうな男の方だったか?」

「葵は酷い言われようである。」

「葵君は絶対ないね! うん!」

「即答か。まあ反応的にジンって奴だな」

「だーからー!」

「まあ恋するのは自由だ。……でも、これだけは忘れるなよ」

早紀は、ふらつきながらも立ち上がる。
まだそんな体力が残されているのかと、妃名は関心した。

「私達がやってきた過去は消せるもんじゃない。これから背負い続けて行くんだ」

「……分かってるよ、そんな事」

負けじと妃名も立ち上がる。

「まあ、アンタは今の生活が楽しそうだからな。過去の自分は忘れない」

「過去の自分は忘れない。今の自分を大切にしたいから、尚更忘れない」

「…ほう?」

「《過去の自分は忘れる》なんて言っていたら、未来のアタシは、今のアタシを忘れちゃうもんね!」

早紀は、先ほどの考えを改めなくてはならなくなった。

――妃名は、強くなった。

教訓その二十六、ピンチはピンチ！（前書き）

引き続き作者視点です。

教訓その二十六　ピンチはピンチ！

「さーて、困ったもんだな…」

斎藤　一葵は、一步も動けないでいた。

目の前には、及川さくらが拳銃を持ち立ち尽くしている。

お互い会話を交わすわけでもなく、ただただ硬直した状態が続いていた。

「しかし、さくらの思考が読めないのは厄介だな…」

静まり返った部屋には、時折こうして一葵の独り言が響く。

一葵の人並み外れた読心術。目の前に居る人間の、特別強い思考を読み取る事ができる。

視覚、嗅覚、聴覚、触覚、味覚。

五感と呼ばれる感性。一葵はその五感全てにおいて優れている。

中でも、視覚についてはずば抜けている。

《相手の思考を読み取る》と言うよりは、五感を活用し、《表情を行動に変換する》の方が正しいのかもしれない。

まず、一葵は典型的な左脳型であり、右脳よりも左脳の方が発達している。

則ち《直感型》である。

視覚によって得た概念を情報化したものを脳と結合させる。

ここで一般とは異なる点が生じる。

――個人の変化

人が嘘をついているか、ぐらいなら、誰にでも簡単に見分ける事ができる。

目が泳いでいるか、とか、声色が普段より高い…など、些細な事から判別する事が可能になる。

人は誰しもが、癖を持っている。それに自覚があるかないかは別として、必ずある。

一葵はそれを見逃さない。

共通する癖があれば、異なる癖もある。

それには個人差があるとは言え、見分ける能力に関しては、一葵は超越していた。

その最終系が、思考を読み取る事に繋がる。言い方次第では先読みと言っても良い。

もちろん、完璧ではない。

当然誤りもある。

だが、一葵は直感型である為、それを疑わない。

信じ切った行動は自信になる。

その自信に満ち溢れた一葵の行動を見れば、相手は思うだろう。

本当に心が読まれている、と。

それは単なる錯覚である。ただ、一葵の行動が、錯覚を真意に感じさせる。

「……くる！」

一葵はそう呟き、体を右方向へと反転させた。

足で地面を蹴った瞬間、響き渡る銃声。

第三者がこの場を見れば、こう錯覚をするだろう。

――葵は、さくらの思考を読み取り、銃弾を避けた…と。

そう感じるのも無理はない事だった。何せ、タイミングが完璧過ぎる。

ただ、それは錯覚である。

そもそも銃弾を避ける事は、たいして難しい事ではない。

銃口、引き金、指の動き、呼吸。

それらをよく見ていれば、意外とたやすいもの。

ただ、そう上手くいくものでもない。

ほとんどの人間は、銃に怯え、冷静さを失う。

死と直面すれば、仕方ない事。

その点、一葵は違った。

過去に、《一度死んでいる男》だった。

一葵は死んでいるはずの人間だった。今更、何も怖がる事はない。

それより、自分よりも優先しなくてはいけないのが、目の前に居るさくらだ。

何故さくらが敵なのか。

救ったはずだ。

一葵は混乱している。でも、今はそんな感情に浸っている場合でもない。

今自分が殺されれば、この後さくらはどうなる。きっと助からない。一生こんな表情のままかもしれない。

さくらを助けるには、勝つしかない。

勝敗的にも、有利な立場に居た方が後々便利だ。

だからこそ、一葵は真剣にさくらと向き合う事を選んだ。

「銃弾は残り…何発だ？」

弾が切れれば、銃の役目も失う。

一葵は探る。さくらの表情を。

「…………ちっ」

だが、失敗に終わる。

並の人間なら、読み取れていただろう。

《まだ余裕だ》

《残り…発。それまでに決める》

《まずい。後…発しかない》

時間が経てば、表情も変わるものだ。

表向きには隠したとしても、一葵には通用しない。

だがあるうことが、さくらは廃人と化している。

表情も一定。読み取る為のヒントすらない。

「これで五発避けた…。最初に発砲したのも合わせれば、六発。あの銃には残弾は残っていないはずだ」

一葵は知っていた。今さくらが持っている銃にセットできる弾の数は、最大六発まで。

その全てを、発砲させた。後はタイミングである。

さくらは、残弾がない事に気付いていないのか、未だに銃を手放さない。

銃口を一葵に向けたまま、引き金に指を掛ける。

「……リロードしないのか？」

さくらは新しい弾を入れる様子を見せない。元々、弾は六発しか持ち合わせていないのだろうか？

「なら、チャンスだ……！」

一葵は、ここぞとばかりにダッシュした。

銃口を向けられているにも関わらず、正面からの捨て身のタックル。

それに応じてか、さくらは引き金を引いた。

空発。音だけが虚しく響き渡る………はずだった。

「――嘘お!？」

直後に悪寒。

避けねば危険と体を感じ取った。それが結果的に、正解。

一葵は慌ててサイドステップを踏み、体を無理矢理捻曲げる。

まさかの隠し弾。銃弾は残っていた。

「……何で…？」

確かに、銃弾のリミットは最大で六発。それに間違いはない。

だが、一葵は、ある見逃しをしていた。

否、聞き逃しをしていた。

『一発目がくるぞ！』

只野 仁の助言を、一葵は忘れていた。

自分を庇い、怪我をした玲奈に気を取られ、一発目の後にリロードした弾の存在を忘れていたのだ。

あの時、さくらは無意識の内に、発砲後に銃弾をストックできる部

分を開けた。

弾は残り五発。だが念の為に、一発の銃弾をリロードした。それが意識的か無意識的かは分からないが。

それを見た仁は叫ぶ。

「一二発目がくる、と。」

この時点で、既にリロードは完了していた。

ただ、一葵はそれに気付けなかった。

一葵にとって、計算違いの、まさかの隠し弾。

「……よりによって足かよ、くそ！」

致命的な直撃は避けさせた。だが、ふとももを撃たれてしまった。

出血が酷い。それに呼応する様に痛みも伴っていく。

額からは脂汗が滲み出る。状態は芳しくない。

負傷した方の足を地面に立て、痛みに耐えながらも次の戦略を練る。

さくらが銃弾をリロード。銃弾はまだあった。先ほどの隠し弾で銃弾が底を尽きたのだった。良かったのだが、それを見た一葵は、万策尽きた様に呟いた。

「THE ピンチ！」

否、叫んだ。

「どうしようどうしょ…」

情けない声を出し、頭を抱える。

足は動かない。だが、かろうじて立つ事はできる。

ただ、それだけ。踏み出す事はできない。

さくらが一步一步近付いてくる。

拳銃は長距離武器である。なのに距離を詰めるのは、絶対に避けられない為であろう。

とどめを刺しに来た。

一葵は、何もできない。

さくらを見つめる事しかできない。

「誰だよ…ピンチはチャンスとか言い始めた奴は…。ピンチはピンチじゃねえか…。どうやったらこの状況がチャンスに変わるってんだ…」

確かにそうである。ピンチはピンチ。決して、チャンスなどではない。

もしも今一葵が『チャンスだ』などと言えば、ただの変人である。

ピンチは最大に達した。

ついに、さくらが目の前まで来たのである。

銃口を額に押し付ける。

引き金を引いてしまえば、一葵の脳を確実に撃ち抜くだろう。

「……もう駄目、か」

一葵は、万策尽きた。

そして、笑った。

人はどうしようもない状況になると笑うと言うが、一葵の笑顔はそれとは違った。

絶望を見据えた笑顔ではなく、優しい笑顔だった。

「見えてるか？ 俺の顔」

やがて涙が流れる。

死ぬ前に、さくらに笑顔を見てほしかった。

それが叶わないのが、悔いだ。

それでも、見てくれている事を願い、精一杯の笑顔を見せた。

「大好きだったよ」

一葵は目を閉じる。

そして、無惨にも引き金は引かれた。

発砲音が鼓膜を刺激する。

「……………ん!？」

痛みがなく、意識がある事に驚いた一葵は、まだ生きているという
事実気付くのに多少の時間を費やした。

「あれ？ あれ!？」

目を開けてみると、変わらない光景が映る。

おかしい。確かに、引き金は引かれた。発砲音だった。銃弾は
入っている。

なのに、一葵は撃たれていない。

「はは、…まさか、ね…」

——不発——

それが起こりうる確率は、何億分の一である。

だが、不発以外に考えられない。

「奇跡ですかね、これ」

首の皮一枚繋がった。

だが、奇跡はまだ続く。

「……………かー…くん？」

さくらの瞳に光が戻った。

それどころか、意識までも。

一葵を認識。まるで、長い眠りから覚めた様な表情だが、しっかりと認識。

さくらが、戻った。

「はは、ははは…夢か、これ？」

一度は全てを諦めた一葵に、突如舞い降りた奇行。

一葵も、さくらでさえも、原因は分かっていない。

だが、そんな事を考える前に、一葵はさくらに抱き着いた。

「良かった…！　本当に良かった…！」

「かつ、かーくん！？　……って、ここ何処？　私今まで…」

「良い！　何もない！　大丈夫…大丈夫…！」

「かーくん足！　……あれ、私何か持って…拳銃！？」

それは不思議であつた。

さくらは今まで何をしていたのかすら覚えていない。

「もしかして…私が撃つたの？　かーくんの足…」

さくらの中で、現状が繋がったのだろう。

この二人きりの空間で、一葵は足に怪我を負い、その傷を付けるに十分な威力を持つ武器を、自分が握っている。

「ああ、そうだよ」

一葵は、ごまかそうとはしなかった。

「でも、良いんだよ、もう。今は……な？」

自分を責めるさくらを、ただひたすら強く抱きしめた。

「ジン、レイナ。足が動かねえから後は任せた…ぜ」

緊張の糸が切れたのか、膝からガクリと崩れ落ちた。

現状が完全に理解できないさくらだったが、責任はある。

その気持ち、崩れ落ちる一葵を受け止めた。

「……どうしよう…わけわかんないよ…もう」

今にも泣き出しそうなさくら。

「ぷっ… あっはっはっはっ！」

それに比べ、一葵は笑っていた。

「何でこんな状況で笑ってんのー！？ ちゃんと説明してよー！」

「だって俺もう死んだかと思ってて、なのに生きてて、さくらが戻って、もうわけわかんねえ！ 笑うしかねえだろ！」

今にも泣き出しそうなさくらを余所に、一葵は幸せそうに笑った。

二人は後に知る事となる。

不発そのものは奇跡としか言いようがないが、さくらの意識が戻ったのは、奇跡ではなく必然的だったという事を。

そして、結果的に一葵の命を救った、速水玲奈に感謝しなければならぬ事を。

教訓その二十七、人間、死ぬ気になれば五分と五分だ！

「僕たちは少し、話をしようよ」

薫は、速水麗奈にそう提案をした。

「……いいですよ」

麗奈は、あえてその意見を受け入れる。時間がない。本来ならば、すぐにでも仁を追いつけたい。

だが、薫が何者かが分からない今、慎重な動きが必要とされる。

さっきから、麗奈の背筋には寒さが走っている。

まず、まともにやり合っても勝てない。直感が、そう告げている。

「ふふ、OKしてもらえとは思わなかったよ」

薫は静かに笑った。

このような、余裕の態度も、自信の現れなのだろう。

何より、怖いという感情に飲み込まれそうだ。

「質問しても良いでしょうか？」

「どうぞ」

「あなた、何者？」

「人間だよ。君と同じさ」

「人間は、手を触れて歌を歌っただけじゃ、傷を治す事はできません」

麗奈が勝ち目を見出だせない理由の一つが、まさにそれである。

さくらの発砲した弾を、一葵を庇う為に負った傷。

心配かけない様にと、平然を装っていたのだが、正直泣きそうなくらい痛かった。

それが、今は嘘の様に回復している。傷口すら消えている。

ありえない事だ。

「僕から質問するね？」

「私の質問に答えてからにしてくださいます？」

「答えたじゃないか。僕は人間。それ以上も以下もない」

「じゃあどうやって傷を治したのですか？」

「それは二つ目の質問になってしまっうね。僕から一つ質問が終われば、答えるよ」

「……………どうぞ」

薫には、討論ですら勝てない。

屁理屈と言えばそれまでだが、薫の言い分にも一理ある。それに、譲る気はないという事が伝わってくる。

渋々だったが、これ以上言い合っても無駄だと思い、一先ず承諾。麗奈は薫の言葉を待つ事にした。

「君は、自分と他人、どっちが大切？」

薫の質問に、麗奈はしばし沈黙。

質問の意図が読めない。そんな事を聞いて、どうする？

でも、答えなければならない。薫の能力の理由が分かるのだから、尚更。

「……………自分、です」

「正直だね、君は」

麗奈は、他人よりも自分が大切と答える。それに対して、薫は相変わらずの笑顔。

「自分が一番。それは間違っていないよ。人間は、自分の為に生きている。決して、他人の為じゃない」

「さあ、次はあなたが答える番よ。さっきの質問の続き」

「人間は直ぐに偽善者ぶる。知っている単語を並べただけの上辺だけの言葉には、何の価値もない」

「質問に答えなさい」

「落ち着いてよ。僕は話がしたいだけ。聞いて欲しいだけなんだよ」

麗奈は、早く正体を確かめたかった。だが、薫のペース。

「矛盾していると思わないかい？ 人間は自分が一番可愛いのに、言葉はそれを隠そうとする。心は全く逆の事を思っているのに」

「…確かに、そうかもしれないわ。でも、私達がユキを助けたいという事に、偽りはない」

「それは友達だから助けるんだ。他人は知らんぷり。友達を助けない奴は、嫌われる。君は嫌われる事を嫌っている」

「例え他人でも、目の前で困っている人が居たら力になるわ」

「人を助ける手段はいくらでもある。でも、君は妥協する」

「……………」

薫には、言い返す言葉が見つからない。

「例えば、コンビニなどに置いてある募金箱。これにいくらでも寄付すれば、救われる人間は大勢いる。身近にあるんだよ、いくらでも」

「…そうね。私は自分が一番で良いわ。だから、自分の為にユキを助ける」

「言葉は全て偽りなり。完璧な言葉などない。それでも心は言葉を探せと、僕を煽る」

薫の雰囲気が変わった。瞬間的に麗奈は身構える。

「それに比べて…歌は良い。まるで偽りを感じない」

また、薫が歌い出した。

おそらくだが、薫の能力の秘密には、歌が関係している様に思える。

「質問に答えない気ね…」

麗奈は、顔をしかめる。

薫の歌が、戦闘開始の合図である事を察知。

麗奈が持ち合わせる唯一の武器は、ベルトのみである。

長さおよそ一メートル。腕よりは長いベルト。幾分だが、攻撃範囲は広い。

殺傷力に関しても、申し分ない。遠心力を上手く活用し、バックルの部分が命中すれば、人間の皮膚など軽く裂く事が可能。

現に、薫の顔には傷を付ける事ができた。掠めただけで、切れるのだ。直撃すれば、ダメージも大きいはず。

「□ ♪ □○○」

薫が歌う歌は、意味が分からない。

そもそも、歌詞が日本語ではない。

頭脳明晰である麗奈ですら、聞いた事のない言語。どこかの国の言葉というよりは、はるか昔の言葉に近い。まるで、呪文のようだ。

「さあ、おいでよ」

歌い終えて気が済んだのか、薫は麗奈を挑発する。

闇雲に攻撃しても無駄だろうが、薫の対応も気になった麗奈は、あえて乗る事にした。

正面から突っ込み、攻撃範囲であるメートル手前で体を一回転。ベルトに遠心力を与え威力を倍増させる。

振り切ったベルトは薫に直撃するはずだった。

ほんの、一瞬。

麗奈が回転を加える為に、薫に背中を向けた、ほんの一瞬。

薫は、消えていた。

「……………嘘、でしょ…？」

次に麗奈が見たものは、勝機を絶望させる程の、力の差だった。

「…あなた…本当に何者なの…？」

麗奈は、薫を《見上げた》。

「に、人間じゃない…」

そう、人間は、宙に浮く事など、できないのだから。

いつの間にか、薫は浮いていた。ベルトが空を切ったのだ。透明な台の上に乗っているわけではない事が証明される。

重力を無視した、薫の能力。

人が、浮いている。

麗奈は、勝ち目を見出だせなかった。

負のオーラを出した一瞬を、薫は見逃さない。

宙に浮いたまま、足で大気を蹴る。まるで地を蹴る様な動きで。

そのまま、麗奈に向かって突進。飛んで来た、と言っても良い。

「ああああああ！」

もはや麗奈は、正気ではいられなくなり、狂った様にベルトを振るう。

確かに、直撃。だが、感触がない。ベルトは、薫を貫通し、またしても空を切る。

「やあ」

「!？」

背後から悪寒。振り向けば、薫が涼しい笑顔を向けている。
引き攣った顔をする麗奈に対し、何と涼しい笑顔だろうか。

恐怖。今麗奈を支配しているもの、それは恐怖。

まるでホラー映画の被害者の様だ。

気が付けば背後を取られている。

傷の完全回復。空中浮遊。

科学で証明できない事実が、今まさに目の前で起こっている。

「……………落ち着いて…落ち着いて…」

麗奈は自分に言い聞かせる。

冷静になれ。慌てるな。

よく、考えるんだ。

必ず策があるはずだ。それを探すんだ。

麗奈は素早くバックステップを踏み、薫から距離を取る。

そして、冷静に分析を試みる。

『なんでベルトが擦り抜けたのかしら。一番最初に攻撃した時、薫はベルトを避けた。喰らいたくなかったんだ。結果的にベルトが掠った。あの頬の擦り傷が打撃が効く事を証明している。じゃあ何でさつきは避けなかったのかしら。きつと、無駄だからだ。だから避けなかった。そして擦り抜けた。…という事は、あれは実体じゃない…？』

今度は、薫から一時も目を離さず、睨み付けたまま思考する。

『この部屋にホログラムでも仕掛けてあるの？ …違う。そんな大掛かりな事をすれば機材でバレる。歌だ。あの歌に何か関係性があるはずだ。…本当にそうか？ マジシャンなら、動きの全てに意味がある。でも、薫のは手品じゃない。あの歌はフェイク？』

麗奈の睨みにも、薫は何の反応も見せない。

ただ、涼しい笑顔で棒立ちをしているだけ。

『一瞬にして消えた事は、どう説明する？ …考える…。薫の行動は全てが人間離れしている。でも、彼は人間だと言った。まず、間

違いない。人間が傷を癒し、宙に浮き、一瞬で消える。私ならどうする。私がそれらを会得しろと言われたら、どうする?..』

「…さつきからさ」

「ーえ？」

「何を考えているんだい？」

ありえない！

麗奈は、一瞬も薫から目を離さなかった。しっかり、睨み付けていた。

なのに何故、薫が背後に居るのだ！？

『なんで！？　なんでいつも一瞬で背後に……っ！！　背後……？　そうか……！』

麗奈は、振り返り様にベルトを振るう。

薫はいとも簡単にそれを避ける。

『やっぱり…これは避けるんだ。…………じゃあ…次は…』

麗奈は再び、距離を開ける。

「私も、本気でいきますよ！」

そして、メガネを外した。

麗奈の視力は、裸眼だと両目共に0.5。視界そのものがぼやける。大丈夫なのだろうか？

「喰らいなさい！！」

一戦目同様、薫には何の策もないように、ただ突っ込んで来ただけに見える。事実、そうなのだが。

攻撃パターンも全く同じ。一メートル手前で一回転。ベルトに遠心

力を加えた攻撃。

「同じ事さ。そろそろ僕からも行くよ？」

麗奈のベルトは空を切る。一瞬の内に薫は上空へと逃げる。

麗奈は、目を閉じてしまった。

薫が上空から突っ込んで来ているというのにも関わらず。

――パキッ――

「ちゃんと、弁償してもらっわよ」

鈍い音が、静かな部屋に響いた。

床に伏せているのは、薫であつた。

麗奈の肘が、薫の溝を貫いたのだ。

「高かつたのに…このメガネ…」

薫の足元には、麗奈が仕掛けたメガネが、踏まれた事を原因に無惨な形になっていた。

「催眠術…ね。貴方凄いわ」

意識を失つた薫を見下ろしながら、麗奈は呟いた。

同時に、腕に激痛が走る。

「…やっぱり、治ってない、か」

麗奈の腕には、完治したはずの傷が、再び浮かび上がっていた。

否、傷は最初から完治などしていなかった。

催眠術。それは、世にも恐ろしい魔術。

薫の場合、例の歌。あれが、催眠の掛橋。

催眠術には種類があり、最も一般的なのが、視覚による幻想。

次に神経を麻痺させる。

麗奈の傷は消えていない。消えた様に見せただけ。神経を麻痺させる事により、痛みも感じなくなる。

空中浮遊も、実際に薫が飛んでいたのではない。

薫が飛んでいるように見せただけであり、本人は地上に居た。

幻想に気を取られている麗奈の背後に回り込む事など、実にたやすい。

麗奈がそれに気付く事ができたのは、薫がベルトを避ける時と避けない時があったからだった。

避ける時は実像。避けない時は虚像。

背後に居る時は実像。それは必ず、突然現れた時だった。

回転を加えた時に、床にメガネを落とす。実像の薫からすれば、そこは死角。
宙に浮く薫は虚像。麗奈の意識がそちらに向いている内に、背後に回り込む。

そこに、落ちたメガネを踏み、音がする。麗奈は我に帰る。

虚像が突っ込んできているにも関わらず、背後に肘を繰り出した。

薫は、特に身体能力が高いわけでもない、普通の人間。溝に強い衝撃を受ければ、一たまりもない。

「……………勝った」

麗奈は、深いため息と共に床に座り込む。

「ジン君…ごめん。前、見えないや…」

メガネが破壊され、腕の傷の再発。仁を追う力は残っていなかった。

薫の気絶により、催眠は解除された。

これは麗奈だけでなく、及川さくらにも影響を与えた。

さくらは、廃人化しているわけじゃなくて、操られていただけだった。考えてみれば、意識がない人間が、拳銃を扱えるわけがない。

さくらの意識が戻ったのは、一葵にトドメを刺す直前。麗奈が薫の意識を奪うのに少しでも遅れていたら、一葵は撃たれていただろう。

催眠は恐ろしい。人を簡単に操れてしまうのだから。特に、薫のよ
うなタイプの催眠は危険。

視覚を刺激する催眠ではなく、歌による聴覚への刺激。脳へ異常な
データを送り込み、判断力を鈍らせる。結果的にそれは、幻覚を見
るようになる。

「やっぱり痛いな、これ」

麗奈は、持っていたベルトを腕に締め付け、溢れ出る血を止血した。
痛みがなく、完治した気になったとはいえ、傷自体はそのままだっ
たのだ。

激しい動きにより、悪化したに違いない。

忘れていた痛みが再び訪れるというのは苦痛だろう。

「それにしても、あの質問は何だったのかしら？」

麗奈は、気絶している薫を見ながら呟く。

「この子…人を嫌ってるのかも。催眠を悪用なんかしないでよね…」

麗奈は、薫の頬に付けてしまった傷口にそつと手を当て、顔を覗き込んだ。

裸眼のせいで、視界が悪い。二人の顔の距離は、かなり近い。

第三者がこの現場を見れば、『まさか、キス！？』と誤解をされそうだ。

「……可愛い寝顔」

「ありがとう」

一瞬にして、麗奈の顔は真っ赤になる。

「近いですよっ！」

「…君から近付いて来たんじゃないか」

動揺を隠せない麗奈に対しても、やはり薫は涼しい笑顔を向ける。

麗奈には、そう見えているだろう。

裸眼のせいで、麗奈は薫の表情の違いに気付く事ができなかった。

己の大胆な行動を恥じる余り、メガネを掛けていても見逃していたかもしれない。

わずかだが、薫は照れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1075d/>

ヤクザの学校

2010年10月10日01時58分発行